兵庫県文化財調査報告　第297冊

伊丹市

小阪田遺跡

－大阪府道・兵庫県道高速大阪池田線（延伸部）建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－

２００６年３月

兵庫県教育委員会

伊丹市

小阪田遺跡

－大阪府道・兵庫県道高速大阪池田線（延伸部）建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－

２００６年３月

兵庫県教育委員会

例　言

1．本書は兵庫県伊丹市小阪田都賀元に所在する、小阪田遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は大阪府道・兵庫県道高速大阪池田線（延伸部）建設事業に伴うもので、阪神高速道路公団の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が平成２年度と平成５年度に本発掘調査を実施した。

3．出土品整理は阪神高速道路公団の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が、平成16年度と17年度に実施した。

4．「小阪田遺跡」は『伊丹市史』などでは「小坂田遺跡」と記述され、発掘調査時点でも「小坂田遺跡」として調査したが『兵庫県遺跡地図』の記載のとおり「小阪田遺跡」として報告する。

5．本書に使用した座標系は日本測地系第Ⅵ系の数値を表し、方位は座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。

6．本書に使用した地図のうち、第３図・第５図下は国土地理院「伊丹」平成11年（1:25,000）に加筆あるいは縮小して使用した。第５図上は陸地測量部「伊丹町」「池田村」明治18年・明治19年（1:20,000仮製）に加筆あるいは縮小して使用した。第５図中は国土地理院「伊丹」昭和28年（1:25,000）に加筆して使用した。第６図は国土地理院「伊丹」「広根」平成11年（1:25,000）に加筆あるいは縮小して使用した。第７図は阪神高速道路公団「池田延伸線平面図」昭和55年（1:5,000）に加筆あるいは縮小して使用した。

7．出土品の分析は、掘立柱建物の柱根の土器の胎土分析および樹種同定を、入札によりパリノ・サーヴェイに依頼した。

8．執筆は、

　第３章第５節：別府洋二

　第３章の石器：久保弘幸

　第４章：パリノ・サーヴェイ

　が行い、それ以外は篠宮　正が行った。

9．編集は篠宮が行った。

10．本書にかかる写真・図面などの記録や遺物などは、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管している。

11．発掘調査および報告書作成にあたり、

伊丹市教育委員会・池田市教育委員会・辰馬考古資料館

青木政幸・泉　拓良・小長谷正治・高橋　学・田上雅則・千葉　豊・冨井　眞・中井秀樹・

福井英治・村川行弘・森岡秀人の各機関・各氏にご援助・ご指導・ご教示頂いた。記して深く感謝の意を表する。

小阪田遺跡

大阪府道・兵庫県道高速大阪池田線（延伸部）
建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

目次

例　言

第1章　遺跡をとりまく環境 …… 1
- 第1節　地理的環境 …… 1
- 第2節　歴史的環境 …… 1
- 第3節　小阪田遺跡周辺の景観変化 …… 8

第2章　調査の契機と経過 …… 9
- 第1節　調査の契機 …… 9
- 第2節　池田線（延伸部）の既往の調査 …… 10
- 第3節　小阪田遺跡の調査経過および体制 …… 11

第3章　調査成果 …… 15
- 第1節　概要 …… 15
- 第2節　A地区 …… 15
- 第3節　B地区 …… 24
- 第4節　C地区 …… 46
- 第5節　D地区 …… 52

第4章　自然科学的調査の成果 …… 62
- 第1節　小阪田遺跡出土弥生土器の胎土分析 …… 62
- 第2節　小阪田遺跡から出土した柱材の樹種 …… 77

第5章　まとめ …… 79
- 第1節　小阪田・豊島南遺跡群の変遷 …… 79
- 第2節　遺跡立地の要因と景観 …… 82
- 第3節　川辺郡・豊島郡の境界 …… 83

別　表 …… 85～88
図　版
報告書抄録

挿図目次

第1図	伊丹市と小阪田遺跡の位置		1章1節	1
第2図	小阪田遺跡周辺の地形分類と弥生時代の海域	1/100,000	1章1節	2
第3図	小阪田遺跡周辺の主要遺跡	1/35,000	1章2節	5
第4図	古代における小阪田遺跡の位置		1章2節	6
第5図	小阪田遺跡周辺の景観変化	1/25,000	1章3節	7
第6図	阪神高速道路池田線延伸と調査遺跡	1/50,000	2章1・2節	10
第7図	小阪田遺跡と豊島南遺跡の調査区	1/1,500	2章2・3節	13
第8図	A地区平面	1/200	3章2節	16
第9図	A地区壁土層	1/200・1/40	3章2節	17
第10図	A地区溝断面	1/20・1/30	3章2節	18
第11図	掘立柱建物SB04	1/80	3章2節	20
第12図	掘立柱建物SB04柱根	1/4	3章2節	21
第13図	A地区出土土器	1/4	3章2節	22
第14図	B地区平面	1/300	3章3節	24
第15図	B地区北・東壁土層	1/200・1/40	3章3節	25
第16図	B地区南・西壁土層	1/200・1/40	3章3節	26
第17図	B地区溝断面	1/20・1/50	3章3節	28
第18図	掘立柱建物SB03	1/80	3章3節	29
第19図	井戸SE01	1/20	3章3節	30
第20図	流路SD03出土土器1	1/2	3章3節	32
第21図	流路SD03出土土器2	1/2	3章3節	33
第22図	溝SD06・SD09出土土器	1/2・1/4	3章3節	34
第23図	溝SD04出土土器1	1/4	3章3節	35
第24図	溝SD04出土土器2	1/4	3章3節	36
第25図	溝SD04出土土器3	1/4	3章3節	37
第26図	溝SD04出土土器4	1/4	3章3節	38
第27図	溝SD04出土土器5	1/4	3章3節	39
第28図	溝SD04出土土器6	1/4・1/2	3章3節	40
第29図	溝SD04出土土器7	1/4・1/2	3章3節	41
第30図	溝SD04出土土器拓影	1/2	3章3節	42
第31図	溝SD05出土土器	1/4	3章3節	43
第32図	B地区出土石器	1/2・1/3	3章3節	44
第33図	C地区平面	1/200	3章4節	46
第34図	C地区壁土層	1/200・1/40	3章4節	47
第35図	竪穴住居SH02	1/50	3章4節	48
第36図	竪穴住居SH01	1/50	3章4節	49
第37図	竪穴住居SH01竈	1/20	3章4節	49
第38図	流路SD03出土土器	1/2	3章4節	50
第39図	竪穴住居SH02・SH01出土遺物	1/4	3章4節	51
第40図	D地区第1面	1/250・1/50	3章5節	53
第41図	D地区第1面掘立柱建物と溝断面	1/50	3章5節	54
第42図	D地区第2面	1/250・1/50	3章5節	55
第43図	D地区第2面掘立柱建物	1/50	3章5節	57
第44図	溝SD101・SD103・SD105出土土器	1/4	3章5節	58
第45図	溝SD107出土土器	1/4	3章5節	59
第46図	D地区包含層出土土器	1/4	3章5節	60
第47図	D地区石器	2/3	3章5節	61
第48図	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)～(3)		4章1節	69～71
第49図	孔隙・砂粒・基質の割合		4章1節	71
第50図	胎土中の砂の粒径組成		4章1節	72～74
第51図	木材組織顕微鏡写真		4章2節	78
第52図	小阪田・豊島南遺跡群の変遷(1)(2)	1/1,600	5章	80・81

表目次

第1表	小阪田遺跡周辺の主要遺跡	1章2節	4
第2表	分析資料一覧および胎土分類	4章1節	62
第3表	薄片観察結果(1)～(5)	4章1節	64～68
第4表	樹種同定結果	4章2節	77
第5表	小阪田遺跡周辺の遺跡動態	5章	83
別表	小阪田遺跡土器一覧(1)～(4)		85～88
別表	小阪田遺跡石器一覧		88

図版目次

図版1　遺跡　1　小阪田遺跡　遠景（南から）　2　小阪田遺跡　遠景（東から）
図版2　遺跡　3　A・B・C地区　全景（南西から）　4　D地区　全景（北から）
図版3　遺物　上：B地区　SD03出土縄文土器　下：C地区　SH01・SH02出土土師器
図版4　遺物　上：A地区・D地区　古墳時代～奈良時代須恵器
中：D地区　古墳時代前期土師器　下：B地区　SD04出土土器
図版5　分析　土器胎土薄片(1)
図版6　分析　土器胎土薄片(2)
図版7　分析　土器胎土薄片(3)
図版8　分析　土器胎土薄片(4)
図版9　分析　土器胎土薄片(5)
図版10　遺跡　5　A・B・C地区　全景（北西から）　6　A・B・C地区　全景（上が北西）
図版11　遺跡　7　B・A地区　全景（上が南東）　8　C・B地区　全景（上が南東）
図版12　遺構　A地区　9　東半部　全景（南西から）
10　柱穴P04　11　柱穴P14（西から）　12　柱穴P13　13　柱穴P20（北から）
図版13　遺構　A地区　14　掘立柱建物SB04　全景（南から）　15　掘立柱建物SB04全景（南西から）
図版14　遺構　A地区　16　掘立柱建物SB04　柱穴P416　柱根断面（西から）
17　柱穴P402　柱根断面（北から）　18　柱穴P413　柱根断面（南から）
図版15　遺構　A地区　19　掘立柱建物SB04　柱穴P402　検出状況（東から）
20　柱穴P403　21　柱穴P404　22　柱穴P405　23　柱穴P406　断面（北から）
24　柱穴P411　25　柱穴P412　26　柱穴P414　断面（南から）
図版16　遺構　A地区　27　溝SD20　遺物出土状況（西から）　28　溝SD19（南から）
29　溝SD12（東から）
図版17　遺構　A地区　30　西半部　全景（東から）　31　溝SD13・SD14・SD15（東から）
32　溝SD11（南から）
図版18　遺物　A地区　柱穴・溝・包含層出土土器
図版19　遺物　A地区　上：柱穴・包含層出土土師器　下：柱穴・溝・包含層出土須恵器
図版20　遺物　A地区　掘立柱建物SB04柱根
図版21　遺構　B地区　33　全景（北東から）　34　溝SD08・SD05・SD04（南から）
35溝SD05（南から）
図版22　遺構　B地区　36　掘立柱建物SB03、溝SD08・SD05（南から）
37　掘立柱建物SB03（南から）
図版23　遺構　B地区　38　溝SD08・SD05（南西から）
39　溝SD05　土層断面（南西から）　40　溝SD08　土層断面（南から）
図版24　遺構　B地区　41　溝SD04（南から）　42　土層断面（南から）　43　遺物出土状況（西から）
図版25　遺構　B地区　44　溝SD02（西から）　45　流路SD03（西から）　46　流路SD03　土層断面（南東から）
図版26　遺構　B地区　47　井戸SE01　土層断面（北西から）　48　井戸SE01（北西から）
図版27　遺物　B地区　流路SD03出土縄文土器
図版28　遺物　B地区　流路SD03出土縄文土器
図版29　遺物　B地区　流路SD03出土縄文土器
図版30　遺物　B地区　SD03・SD05・SD06・SD09出土土器
図版31　遺物　B地区　SD04出土弥生土器壺
図版32　遺物　B地区　SD04出土弥生土器壺
図版33　遺物　B地区　SD04出土弥生土器壺
図版34　遺物　B地区　SD04出土弥生土器壺
図版35　遺物　B地区　SD04出土弥生土器壺
図版36　遺物　B地区　SD04出土弥生土器甕
図版37　遺物　B地区　SD04出土弥生土器甕

図版38　遺物　B地区　SD04出土弥生土器甕
図版39　遺物　B地区　SD04出土弥生土器甕
図版40　遺物　B地区　SD04出土弥生土器鉢
図版41　遺物　B地区　SD04出土弥生土器鉢・有孔鉢
図版42　遺物　B地区　SD04出土弥生土器鉢・有孔鉢
図版43　遺物　B地区　SD04出土弥生土器高坏・器台
図版44　遺物　B地区　SD04出土土器
図版45　遺物　B地区　SD05出土土器
図版46　遺物　B地区　SD05出土土器
図版47　遺物　B地区　SD05出土土器
図版48　遺物　B地区・D地区　石器
図版49　遺構　C地区　49　竪穴住居SH02　全景（北西から）　50　中央土坑SK201（北から）
51　柱穴P203遺物出土状況（北から）　52　柱穴P201断面（南東から）
53　柱穴P202断面（南東から）
図版50　遺構　C地区　54　竪穴住居SH01　全景（北西から）　55　竈検出状況（南から）
56　竈断面（東から）　57　柱穴P101断面（南から）
58　柱穴P102断面（南から）
図版51　遺構　C地区　59　流路SD03（北東から）　60　溝SD02（北東から）　61　現地説明会状況
図版52　遺物　C地区　流路SD03出土縄文土器　竪穴住居SH02出土土器
図版53　遺物　C地区　竪穴住居SH02・SH01出土土器・石器
図版54　遺構　D地区　62　遠景（東から）　63　全景（東から）
図版55　遺構　D地区　64　全景（北から）　65　全景（上が南）
図版56　遺構　D地区　66　第1遺構面　全景（東から）　67　掘立柱建物SB101（北から）
図版57　遺構　D地区　68　溝SD101（南から）　69　溝SD101　土器出土状況
70　溝SD102　土層断面
図版58　遺構　D地区　71　溝SD105（北西から）　72　溝SD105（南東から）
73　溝SD105　土層断面
図版59　遺構　D地区　74　溝SD103（南から）　75　溝SD106（西から）
76　溝SD103　土器出土状況　77　溝SD104（南から）
78　溝SD107（北から）　79　第1遺構面　全景（東から）
図版60　遺構　D地区　80　第2遺構面　全景（東から）　81　第2遺構面　全景（東から）
図版61　遺構　D地区　82　溝SD108（南から）　83　溝SD108　土層断面（南から）
84　土坑SK203土層断面　85　土坑SK201土層断面
86　柱穴P2043土層断面　87　柱穴P2042土層断面
図版62　遺物　D地区　SD107出土土器
図版63　遺物　D地区　SD107出土土器
図版64　遺物　D地区　SD107・SD101・SD105出土土器
図版65　遺物　D地区　SD103・SD105・包含層出土土器

第１章　遺跡をとりまく環境

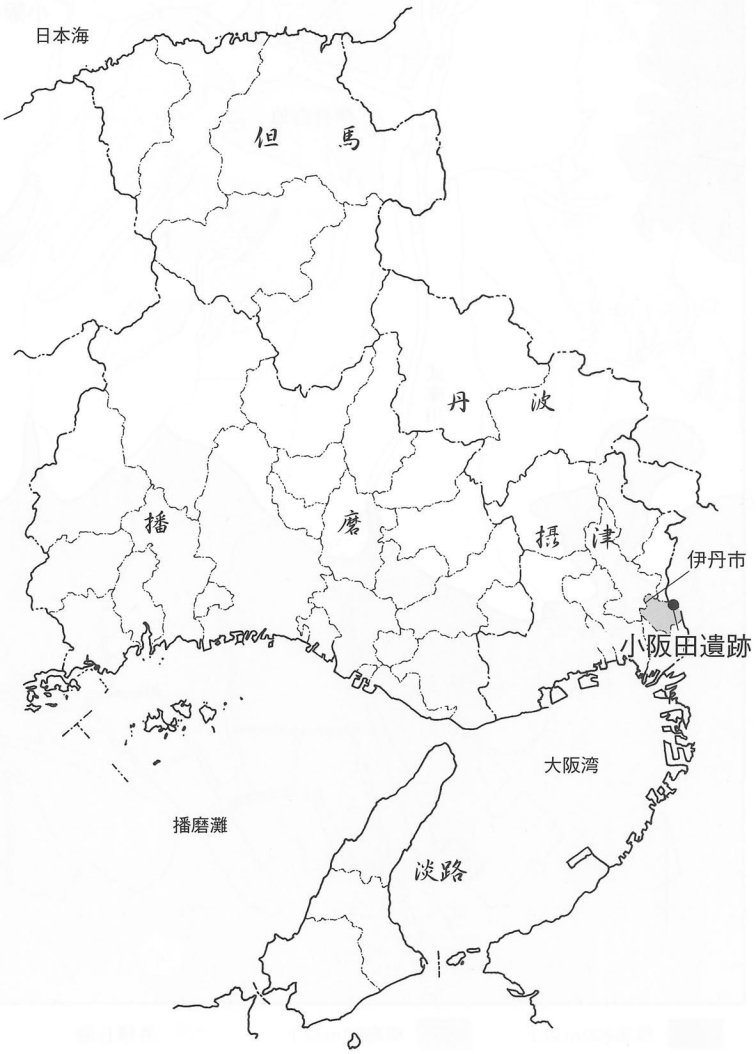
第１節　地理的環境（第１・２図）

伊丹市は兵庫県の南東部に位置しており、北は川西市に、北から西は宝塚市と西宮市に、南は尼崎市に、東は大阪府池田市と豊中市に接している。小阪田遺跡は伊丹市の北東端の伊丹市小阪田字都賀元に所在している。ここは大阪国際空港の北側であり、池田市と接した場所である。

小阪田遺跡の北側には有馬―高槻構造線および野畑断層による地溝状の低地を隔てて、北方に中古生代から成る丹波山地を控えている。丹波山地は石炭紀～ジュラ紀の丹波層群と白亜紀後期の茨木複合花崗岩体を中心に構成されている。その前縁には丘陵地が形成され、それに接する段丘地域、猪名川の氾濫原地域と沖積低地から成る。

小阪田遺跡東側に広がる丘陵地域は千里丘陵の西縁にあたり、新生代第四紀更新世中期に堆積した大阪層群の地層によって形成されている。小阪田遺跡付近の標高は約20mを測り、低位段丘である石橋段丘面の末端の堆積層から猪名川と箕面川の氾濫原から沖積低地にかけての場所にあたる。

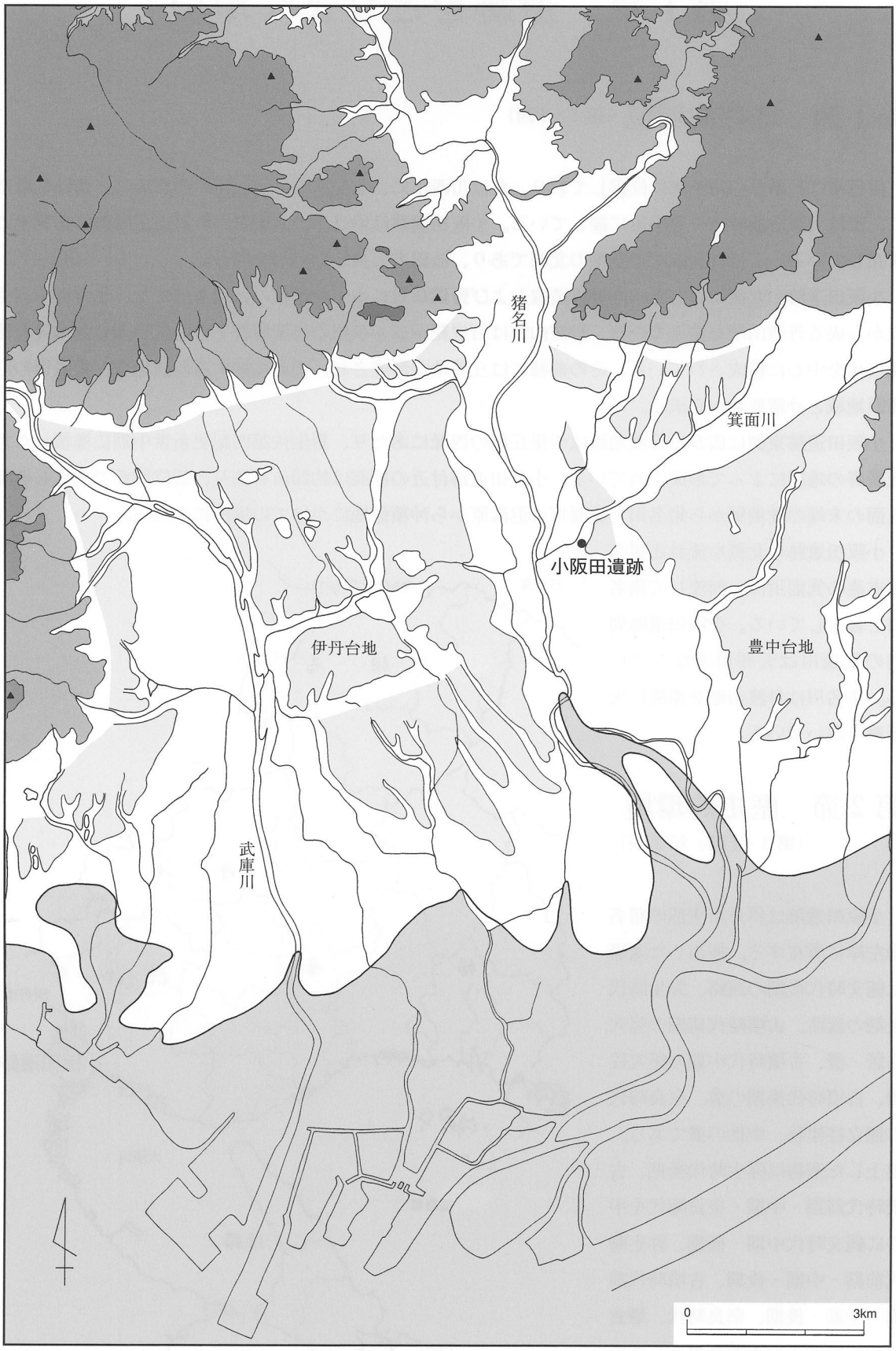
小阪田遺跡の北側を流れる猪名川支流の箕面川は、西流して猪名川と合流している。小阪田遺跡周辺の箕面川は天井川となっている。猪名川は丹波山地を源流に大阪湾に注いでいる。



第１図　伊丹市と小阪田遺跡の位置

第２節　歴史的環境（第３・４図、第１表）

小阪田遺跡は伊丹市東部の猪名川左岸に所在する。検出した遺構は縄文時代後期の流路、弥生時代後期の流路、古墳時代前期の竪穴住居・溝、古墳時代中期の竪穴住居、古墳時代後期の溝、奈良時代の掘立柱建物、中世の溝である。出土した遺物は弥生時代後期、古墳時代前期・中期・奈良時代を中心に縄文時代中期・後期、弥生時代前期・中期・後期、古墳時代前期・中期・後期、奈良時代、鎌倉時代にかけての土器が出土している。したがって、小阪田遺跡を中心に兵庫県川西市・伊丹市・尼崎



標高200ｍ以上　標高90ｍ以上　洪積丘陵　弥生時代の海域

第２図　小阪田遺跡周辺の地形分類と弥生時代の海域

市、大阪府池田市・豊中市・箕面市の猪名川中・下流域に所在する関係ある遺跡を中心として時代ごとに概観する。時代によって立地や密度に非常に偏った分布を示している。

１．旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、川西市加茂遺跡、池田市と豊中市にまたがる宮の前･蛍池北遺跡、豊中市蛍池西遺跡がある。川西市加茂遺跡ではナイフ形石器・角錐状石器などが出土している。宮の前･蛍池北遺跡ではナイフ形石器が出土している。蛍池西遺跡では国府型ナイフや翼状剥片、石核、チップなどが出土している。

このほか採集された石器も存在しているが、点的であり今後の資料の増加を待ちたい。

２．縄文時代

縄文時代の遺跡は、遺構が検出された遺跡は少なく、多くの場合、自然流路や包含層からの遺物の出土のみの場合が多い。

縄文時代中期は伊丹市岩屋遺跡、豊中市野畑春日町遺跡・勝部遺跡・原田西遺跡がある。野畑春日町遺跡では土坑と船元式の土器が出土している。原田西遺跡では船元式の土器が出土している。岩屋遺跡や勝部遺跡では北白川上層式の土器が出土している。

縄文時代中期末から後期初頭は伊丹市森本遺跡と豊中市野畑遺跡がある。森本遺跡では確認調査で土器が出土している。野畑遺跡では土器と石鏃や石錘などの石器が出土している。

縄文時代後期は川西市加茂遺跡、伊丹市伊丹郷町遺跡下層・大阪空港Ａ遺跡・大阪空港Ｂ遺跡・岩屋遺跡、池田市豊島南遺跡がある。

加茂遺跡では土器埋設遺構・土坑・柱穴が調査されている。伊丹郷町遺跡下層では土坑から北白川上層式の土器が出土している。大阪空港Ａ遺跡では縁帯文土器が、大阪空港Ｂ遺跡では元住吉山式の土器が採集されている。岩屋遺跡では自然流路から一乗寺Ｋ式の土器が出土している。豊島南遺跡では後期の土器が出土している。

縄文時代晩期は川西市加茂遺跡、伊丹市口酒井遺跡・森本遺跡・岩屋遺跡、池田市池田城跡下層・豊島南遺跡、豊中市野畑春日町遺跡がある。加茂遺跡では石冠が出土している。口酒井遺跡・森本遺跡・岩屋遺跡・豊島南遺跡では突帯文土器が出土している。特に口酒井遺跡では溝と土坑が検出されており、突帯文土器に伴う炭化米、籾痕跡のついた浅鉢と石包丁は、近畿地方における農耕の開始期を考える重要な発見である。池田城跡下層では土坑を検出し生駒西麓産土器が出土している。

３．弥生時代

弥生時代になると遺跡数が増加するとともに、遺物量も膨大となる。

弥生時代前期は伊丹市大阪空港Ｂ遺跡・口酒井遺跡・岩屋遺跡、尼崎市田能遺跡、豊中市勝部遺跡・山ノ上遺跡がある。大阪空港Ｂ遺跡では前期の土器が採集されている。岩屋遺跡では灌漑施設が営まれている。田能遺跡や勝部遺跡では溝が掘削されており、遺跡は後期まで継続している。山ノ上遺跡では前期の土器に伴って縄文晩期の土器が出土している。

弥生時代中期は川西市加茂遺跡・栄根遺跡、伊丹市岩屋遺跡・原田西遺跡、尼崎市田能遺跡、池田市豊島南遺跡、池田市と豊中市にまたがる宮の前･蛍池北遺跡、豊中市待兼山遺跡・勝部遺跡がある。

加茂遺跡は台地上に立地する環濠集落で中心部分に方形区画と大型建物が存在し、ほかに方形周溝墓・竪穴住居・土坑・溝がある。栄根遺跡では方形周溝墓を検出している。原田西遺跡では方形周溝墓や灌漑施設を検出している。田能遺跡では方形周溝墓・竪穴住居など多数の遺構を検出している。中でも首から胸にかけて632個の碧玉製管玉をつけた人骨、左腕に銅製の腕輪をつけた人骨や銅剣の鋳型は注目される。豊島南遺跡では方形周溝墓を２基検出している。宮の前･蛍池北遺跡では方形周溝墓や竪

穴住居など多数の遺構を検出している。勝部遺跡は中期の集落跡と木棺墓を検出している。中期後半になると待兼山遺跡など高地性集落が出現する。

弥生時代後期は伊丹市大阪空港Ａ遺跡・口酒井遺跡、尼崎市田能遺跡、池田市池田城跡下層・神田北遺跡・京中遺跡、豊中市蛍池西遺跡がある。中期における拠点的な集落である加茂遺跡・宮の前･蛍池北遺跡・勝部遺跡は規模を著しく縮小もしくは廃絶しており、田能遺跡のみ継続している。大阪空港Ａ遺跡では後期の土器が採集されている。口酒井遺跡では竪穴住居や円形周溝墓などが調査されている。田能遺跡では溝から多量の土器が出土している。池田城跡下層と神田北遺跡では竪穴住居を検出している。蛍池西遺跡では流路から土器が出土している。

銅鐸は伊丹市大阪空港内、豊中市原田神社、川西市満願寺・栄根、箕面市如意谷、豊中市利倉遺跡で出土している。小阪田遺跡の南東約300ｍの大阪国際空港内（神津村小坂田）から外縁付紐式四区袈裟襷文銅鐸が出土しており、原田神社からは外縁付紐式流水文銅鐸が２個出土している。

猪名川上流の満願寺と栄根からは近畿式銅鐸が出土している。箕面川上流では箕面市如意谷の山腹で近畿式の銅鐸が出土している。利倉遺跡からは水路の堰から銅鐸の鰭の飾耳片が出土している。

４．古墳時代

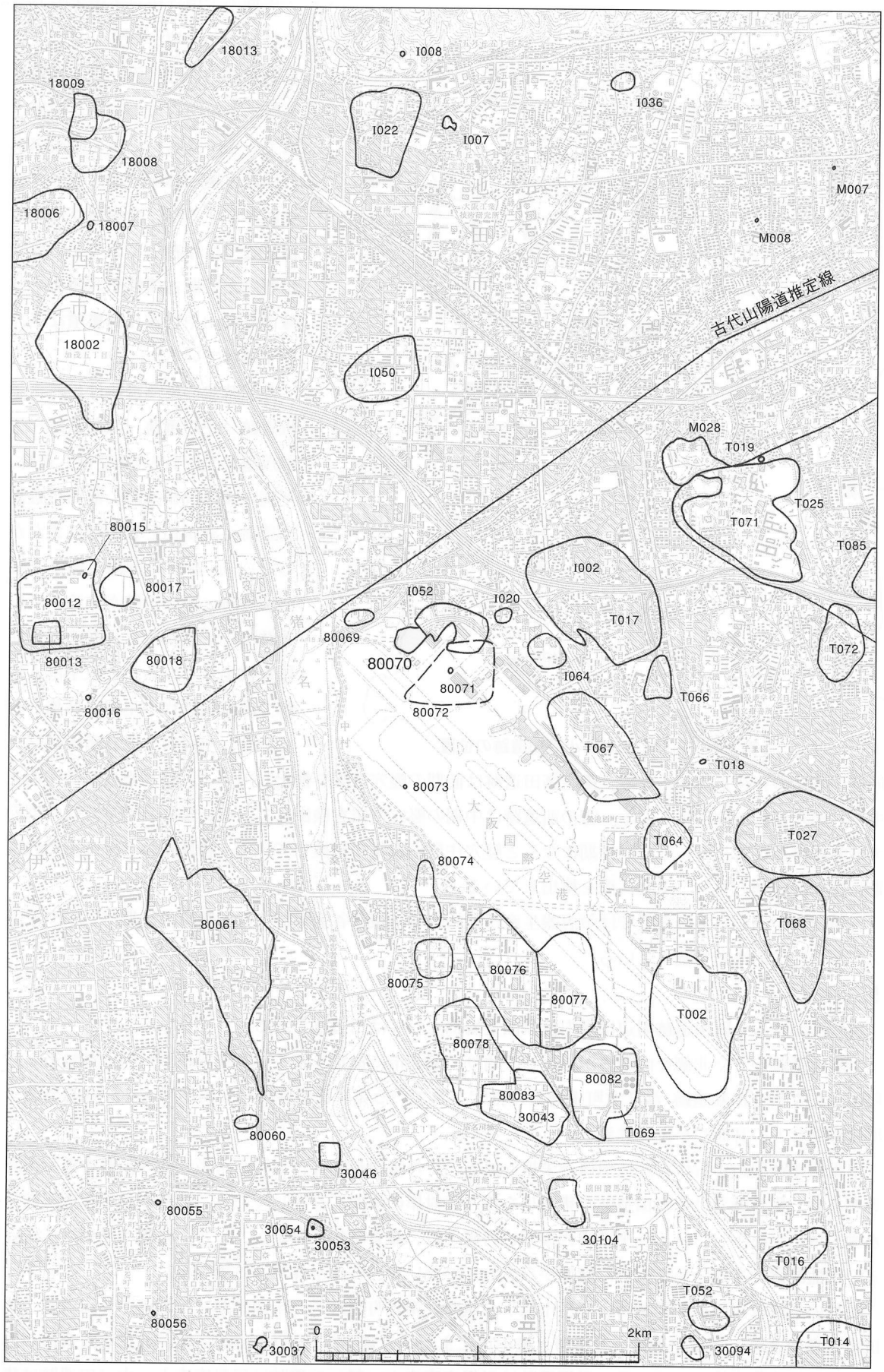
前期の古墳は五月山丘陵で池田茶臼山古墳・娯三堂古墳がある。池田茶臼山古墳は全長62ｍの前方後円墳で、竪穴式石室を内蔵している。娯三堂古墳は直径27ｍの円墳で、これ以降、首長墳は続かない。

中期の古墳は伊丹市御願塚古墳、池田市豊島南遺跡・宮の前遺跡があるが、猪名川左岸の大型墳は豊中市大塚古墳や御獅子塚古墳のみになる。

御願塚古墳は全長52ｍの帆立貝形で二重の濠をめぐらしている。豊島南遺跡では方墳の一部が調査されており、宮の前遺跡では小規模な古墳が調査されている。

第１表　小阪田遺跡周辺の主要遺跡

18002　下加茂遺跡	**80070　小阪田遺跡**	I007　池田茶臼山古墳	T016　利倉遺跡
18006　加茂遺跡	80069　下河原遺跡	I008　娯三堂古墳	T018　御神山古墳
18007　栄根銅鐸出土地	80071　大阪空港銅鐸出土地	I020　住吉宮の前	T019　待兼山古墳
18008　栄根遺跡	80072　大阪空港遺跡Ａ地点	I022　池田城跡	T025　桜井谷窯跡群
18009　栄根寺廃寺	80073　大阪空港遺跡Ｂ地点	I036　京中遺跡	T027　新免遺跡
18013　小戸遺跡	80074　西桑津遺跡	I050　神田北遺跡	T052　利倉西遺跡
80012　緑ヶ丘遺跡	80075　森本居館跡	I052　豊島南遺跡	T064　箕輪遺跡
80013　伊丹廃寺跡	80076　森本遺跡	I064　宮の前西	T066　蛍池東遺跡
80015　緑ヶ丘1号墳	80077　岩屋遺跡	M007　桜古墳	T067　蛍池西遺跡
80016　緑ヶ丘2号墳	80078　口酒井遺跡	M008　中尾塚古墳	T068　山ノ上遺跡
80017　北村遺跡	30037　池田山古墳	T002　勝部遺跡	T072　柴原遺跡
80018　北園遺跡	30046　猪名寺廃寺跡	T014　上津島遺跡	T085　内田遺跡
80055　御願塚古墳	30053　中ノ田遺跡	I002　宮の前遺跡	T017　蛍池北遺跡
80056　柏木古墳	30054　大塚山古墳	M028　待兼山遺跡	T071　待兼山遺跡
80061　有岡城跡･伊丹郷町遺跡	30094　東園田遺跡	80083　田能遺跡	30043　田能遺跡
80066　南本町遺跡	30104　田能高田遺跡	80082　原田西遺跡	T069　原田西遺跡



第３図　小阪田遺跡周辺の主要遺跡

第４図　古代における小阪田遺跡の位置

後期の古墳は伊丹市南本町遺跡で３基の小円墳を調査している。緑ヶ丘遺跡周辺の伊丹段丘縁辺でも削平された古墳の存在が指摘されている。猪名川左岸では池田市二子塚古墳・鉢塚古墳などの単独墳は存在するが、大規模な群集墳は近辺では存在しておらず、豊中市野畑たこ塚古墳群や北西方の宝塚市長尾山や雲雀丘群集墳など、やや離れている。

古墳時代の集落遺跡は川西市栄根遺跡・小戸遺跡・加茂遺跡・下加茂遺跡、伊丹市大阪空港Ａ遺跡、尼崎市田能高田遺跡、池田市豊島南遺跡、池田市と豊中市にまたがる宮の前･蛍池北遺跡、豊中市蛍池東遺跡・勝部遺跡がある。栄根遺跡や小戸遺跡では多数の竪穴住居を検出している。大阪空港Ａ遺跡では古墳時代の土器が採集されており、小阪田・豊島南遺跡群と同様の集落の存在が考えられる。田能高田遺跡は前期の竪穴住居を検出している。豊島南遺跡は前期と中期の竪穴住居を検出している。宮の前遺跡は中期の竪穴住居を検出している。蛍池東遺跡では中期の大型倉庫群が存在しているが、後期になると竪穴住居の集落に転換している。勝部遺跡では古墳時代前期の掘立柱建物と井戸・土坑・溝を検出している。

古墳時代中期から千里丘陵では須恵器生産が開始され、桜井谷窯跡群では古墳時代後期にピークを迎え、奈良時代前半まで続いている。

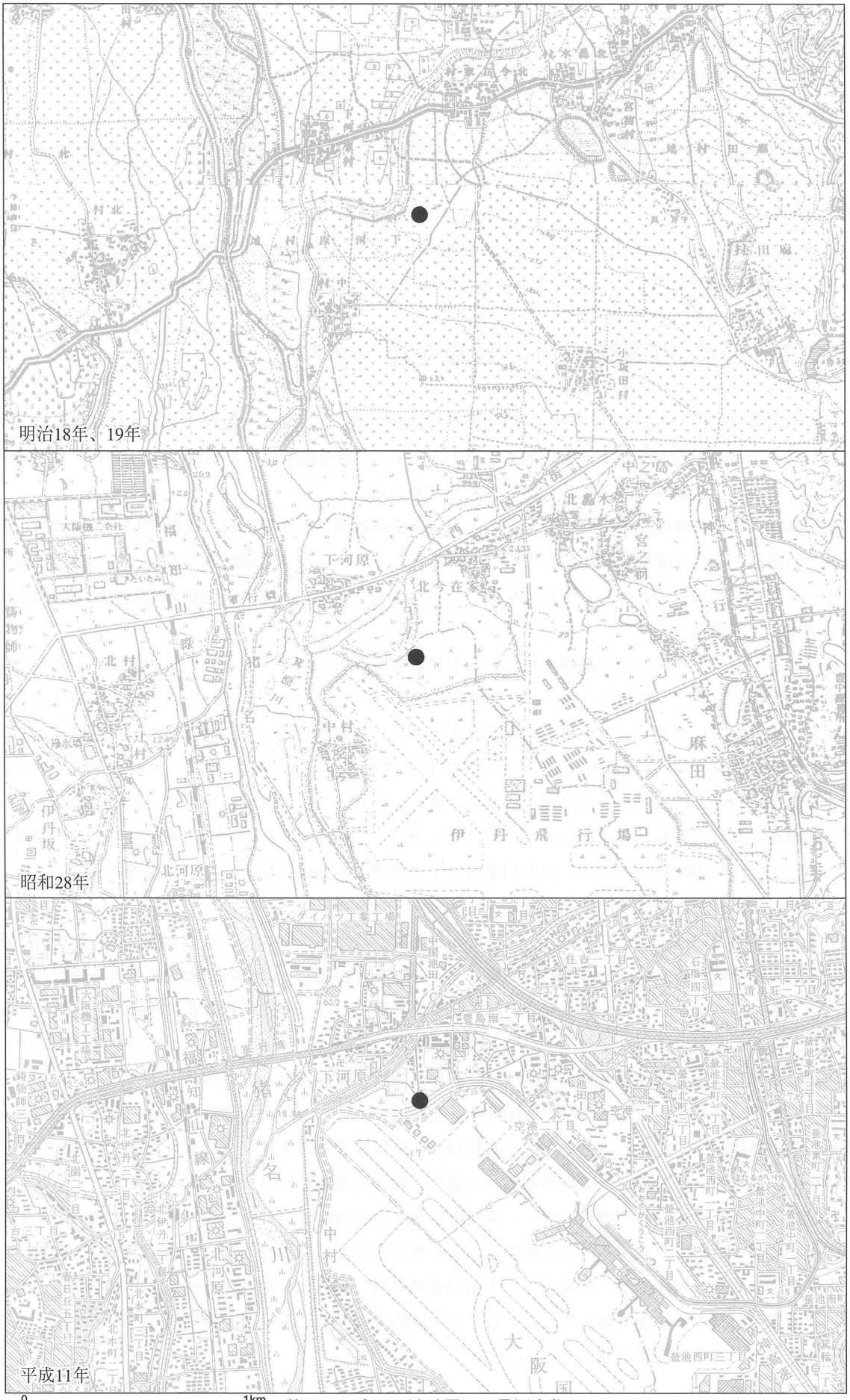
５．古代

古代における小阪田遺跡周辺は畿内摂津国豊嶋郡もしくは川辺郡であると考えられる。

小阪田遺跡のすぐ北側を山陽道が斜行して通り、箕面市に推定されている豊嶋郡草野駅と芦屋市と神戸市にまたがる津知遺跡･深江北町遺跡群に推定されている菟原郡葦屋駅の間に位置する。豊嶋郡衙や川辺郡衙などの官衙や草野駅は見つかっていない。

小阪田遺跡周辺の古代寺院は川西市栄根寺廃寺、伊丹市伊丹廃寺、尼崎市猪名寺廃寺、豊中市石積廃寺がある。伊丹廃寺は小阪田遺跡の猪名川を挟んで対岸の真西に存在している。法隆寺式の伽藍配置で水煙や塼仏が出土している。平安時代後期に再建され、鎌倉時代に廃絶している。猪名寺廃寺は法隆寺式の伽藍配置である。石積廃寺は発掘がなされていないが、古瓦が採集されている。

古代の遺跡は川西市栄根遺跡、伊丹市緑ヶ丘遺跡・南本町遺跡・原田西遺跡、尼崎市中ノ田遺跡、池田市豊島南遺跡・神田北遺跡、池田市と豊中市にまたがる宮の前･蛍池北遺跡、豊中市蛍池西遺跡があり、掘立柱建物を検出している。栄根遺跡は栄根寺廃寺と、緑ヶ丘遺跡は伊丹廃寺と、中ノ田遺跡は猪



第５図　小阪田遺跡周辺の景観変化

名寺廃寺との関係が指摘されている。

猪名川左岸地域は空港建設まで条里地割が顕著に残り、小阪田周辺は豊嶋北条の坪付方式である。『和名類聚抄』には摂津国豊嶋郡の７郷のうちの一つとして「桑津」をあげており、安貞元年（1227）の『勝尾寺文書』には「豊嶋北条西桑津」とあり、猪名川左岸は鎌倉時代初期までは豊嶋郡であった。『延喜式』神名帳の伊居太神社は川辺郡の記載がある。

６．中世

中世の遺跡は伊丹市北園遺跡、池田市神田北遺跡などがある。北園遺跡では、掘立柱建物を検出し、瓦や卒塔婆などが出土しており、北村廃寺と考えられている。神田北遺跡では掘立柱建物を検出している。

第３節　小阪田遺跡周辺の景観変化（第５図）

小阪田遺跡周辺は、江戸時代や明治時代初期の村絵図を見ると、整然と区画された水田地帯、真四角あるいは長方形条里地割の水田地帯の名残がうかがえる。小阪田遺跡のすぐ南側には何箇所かの「出水」が存在しており、扇状地の湧水地帯であったことがわかる。

明治18年・19年の地図（第５図上）を見ると、小阪田遺跡周辺は小坂田村・東桑津村・西桑津村・中村・下河原村・北今在家村・麻田村などの集落が点在しているのみで水田地帯が広がっている。小阪田遺跡の北側には西国街道が通り、箕面川を渡っている。明治43年には東側に箕面有馬電気軌道（現在の阪急宝塚線）が開通している。

昭和11年７月に、兵庫県川辺郡神津村、大阪府豊能郡池田町、同豊中市にまたがる地域が、新しい大阪飛行場の設置位置として選定された。昭和11年12月１日に地鎮祭が行われ、工事が進められた結果、昭和14年１月17日に開場し、大阪第二飛行場と命名された。新飛行場はその面積142,406.48坪であり、滑走路は南北に長さ680m、幅60mのものと、これに45度の角度で交わる長さ730m、幅60mのものと計２本が設けられた。昭和15年からは飛行場拡張工事が行われ、これに伴い、神津村小坂田のほとんどは飛行場用地となり、昭和15年に解村して、村は姿を消した。昭和16年に伊丹飛行場と命名され、開港した。また、伊丹飛行場建設とともに、小阪田遺跡のすぐ西側の箕面川が蛇行している部分のショートカット改修が行われ、旧河道は埋め立てられた。

昭和28年の地図（第５図中）を見ると、小阪田遺跡周辺は水田地帯が広がっている。小阪田遺跡の南側には伊丹飛行場が描かれ、小坂田村は消滅している。小阪田遺跡の西側の箕面川は大きく蛇行した旧河川敷と新たにショートカットした河道が両方とも描かれている。西国街道は北今在家村の北側をバイパスが通り、猪名川には軍行橋が架けられ、ほぼ直線的な道路に整備されている。猪名川西岸には国鉄福知山線が通り、現在の阪急電鉄宝塚線は京阪神急行電鉄宝塚線となっている。

昭和34年には、第一種空港に指定され国際空港化が決定され、大阪国際空港と改称され、新滑走路が昭和45年に供用開始された。これに先立つ昭和44年には阪神高速道路池田線が大阪空港まで開通した。昭和45年には吹田・宝塚間の中国自動車道が開通し、高速交通網が整備されていった。

平成２年には小阪田遺跡の調査を行い、調査終了後工事が開始され、平成10年４月に、池田線延伸部の供用が開始された。平成９年には大阪空港から千里方向に延びる大阪モノレールが開通している。

平成11年の地図（第５図下）を見ると、小阪田遺跡の調査部分は阪神高速池田線延伸部が開通しており、箕面川の旧河川敷は住宅地となっている。大阪国際空港は拡張され、中村集落はなくなっている。周囲は住宅や工場など開発が進んでいる。

第２章　調査の契機と経過

第１節　調査の契機（第６図）

大阪府道・兵庫県道高速大阪池田線（阪神高速道路大阪池田線）は大阪市西成区山王から池田市木部の延長30.4kmとして計画された。大阪市内中心部は時計回りの一方通行で環状線と通称され、福島から大阪国際空港に至る区間は空港線と通称されている。

昭和37年10月に大阪市道高速１号線（現、阪神高速道路大阪池田線）が着工され、昭和36年６月には土佐堀から湊町間の2.3km、11月には出入橋から土佐堀間の0.8kmが開通した。昭和40年12月には、梅田から道頓堀間4.2kmと順次延伸し、昭和44年２月には、大阪国際空港まで開通した。

阪神間の北部地域（川西市・猪名川町、池田市・箕面市・豊能町・能勢町）は、大阪都市圏のベッドタウンとして急激に発展してきた地域であり、大規模住宅団地の開発に伴う将来の人口は、今後も増加すると予想されるのに対し、この地域は南北方向の幹線道路が少なく、このため、国道173号・176号の交通混雑は年々ひどくなっている。昭和56年に阪神高速道路大阪池田線を豊中市蛍池西町付近から池田市木部まで、延長7.4kmを延伸する都市計画の決定がなされた。この延伸ルートは大阪国際空港の東側から分岐して、大阪国際空港の北側を通り猪名川に向い、伊丹市下河原地区、池田市、川西市の猪名川沿いに池田市木部の国道173号および国道423号に連結するものである。兵庫県を通過する場所は、大阪国際空港北側の伊丹市小阪田地区と西河原地区、猪名川沿いの川西市小花地区と小戸地区に至る。阪神高速道路は高架による立体交差が一般的であるが、このうち大阪国際空港北側の伊丹市小阪田地区と西河原地区は滑走路の北延長上に位置することや、箕面川や国道171号と交差するため、航空法の高さ制限により、トンネルによる工法が採られることとなった。この伊丹トンネル（延長675m）の南東側出入り口は伊丹市小阪田に位置する。平成元年３月には、兵庫県域の基本設計が出来上がった。

工事着手に先立ち、兵庫県教育委員会と阪神高速道路公団とが埋蔵文化財調査の取り扱いに関する協議を行った。詳細が明らかでない小阪田遺跡の確認調査を実施した上で、埋蔵文化財の保存措置を講ずることとした。平成元年７月に、阪神高速道路公団から阪神高速道路大阪池田線延伸に伴う埋蔵文化財調査の依頼があり、平成元年11月に小阪田遺跡の確認調査を実施した結果、遺跡の存在や内容が明らかになった。平成２年度に本発掘調査を実施した。平成７年度には阪神高速道路公団伊丹交通管理基地建設を平成２年度調査地の北側に計画したため、平成７年度に確認調査を実施し、遺跡が存在したことから、本発掘調査を実施した。

伊丹市小阪田地区では、古くから弥生時代前期の土器が採集されていた（『伊丹市史』）。昭和12年の大阪第二飛行場建設時には神津村小坂田・中村（現在伊丹市小阪田・中村）で、縄文時代後期の土器や弥生時代後期の土器・古墳時代後期の土器（大阪空港Ａ遺跡）や外縁付鈕銅鐸（大阪空港銅鐸）が採集されており、遺跡の存在が確認されていた。しかし、正式な調査によるものではなく、小阪田遺跡の実態は明らかではなかった。昭和61年度から昭和63年度にかけて、伊丹市教育委員会は詳細分布調査を実施し、小阪田遺跡の存在が明らかになった。また府県境に隣接する大阪府池田市豊島南遺跡でも阪神高速道路大阪池田線延伸の調査により弥生時代･古墳時代･古代・中世を中心とする密度の濃い遺跡であることが明らかになっている。

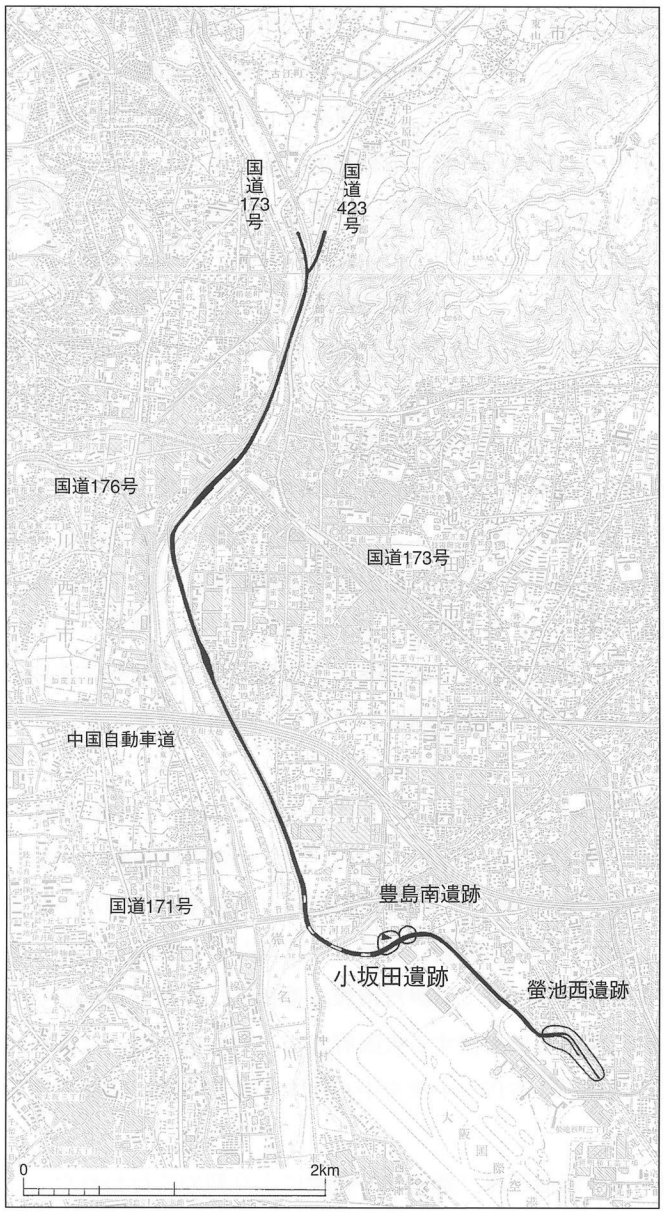
小阪田遺跡の調査は、大阪府道・兵庫県道高速大阪池田線（延伸部）建設により初めて行われた。

第２節　池田線（延伸部）の既往の調査（第６・７図）

大阪府道・兵庫県道高速大阪池田線（延伸部）は大阪府と兵庫県にまたがって、豊中市蛍池西町から池田市木部までの間延長7.4kmである。

大阪府道・兵庫県道高速大阪池田線（延伸部）建設に伴う調査は大阪府側では蛍池西遺跡と豊島南遺跡の２遺跡で行われた。

蛍池西遺跡は豊中市に所在し、延伸部分の分岐地点である。発掘調査は昭和61年から平成６年にかけて、豊中市教育委員会が７次にわたる調査（第４次～第９次・第12次）を実施した。延長約550mの範囲で行った。調査により旧石器時代、弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代の遺構・遺物を検出している。旧石器時代は盤状剥片や石核などが出土している。弥生時代後期は土坑と流路があり、流路から多量の土器が出土しているため、周辺に集落の存在が考えられている。古墳時代後期から奈良時代前半まで粘土採掘土坑群と考えられる密集土坑群を検出している。平安時代中期末は掘立柱建物群を検出している。出土品整理は平成元年度と平成２年度にかけてと平成６年度から平成９年度にかけて行われ、平成９年に報告書が刊行された。



第６図　阪神高速道路池田線延伸と調査遺跡

蛍池西遺跡は過去にも民間の開発や、前後する時期に大阪モノレール建設に伴う調査が豊中市教育委員会や大阪府文化財調査研究センターにより行われている。

豊島南遺跡は池田市に所在し、小阪田遺跡の府県境を挟んで隣接している。豊島南遺跡は昭和55年から昭和56年の分布調査で確認された。池田線（延伸部）建設に伴う調査（第２次・第３次）は昭和62年から昭和63年にかけて、池田市教育委員会が道路センター№.67付近から№.83付近の延長約320mの範囲の約2000㎡で行った。調査により弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代前期の竪穴住居・溝、古墳時代中期の方墳、古墳時代後期の竪穴住居、飛鳥時代の掘立柱建物、中世の溝を検出している。

池田線（延伸部）建設の調査以前の第１次調査（昭和60年）は、民間の工場建設に伴って大阪府教育委員会が実施し、第２次調査で検出した溝につながる２本の溝を検出した。池田線（延伸部）建設に伴う調査以降も、昭和63年から平成３年にかけて民間の開発に伴う調査を池田市教育委員会が実施しており、さらに周辺に広がっていることが判明している。

第３節　小阪田遺跡の調査経過および体制

１．発掘調査の経過

平成元年度　第１次調査　確認調査（調査番号890022）

調査対象地は大阪府に接した、道路センター№.83から№.88までの延長約100m、最大幅約30mであり、平成元年11月７日から11月29日にかけて確認調査を実施した。

調査は、路線予定地に２m×２mの試掘坑を12か所設定し、調査の進展に伴い２か所のトレンチを追加した。調査面積は91㎡である。道路センター№.84の近辺の試掘坑を№.１とし、以下西へ順次設定した。調査はすべて人力で行い、遺跡の有無を確認するとともに、土層の堆積状況を確認し、記録した。

調査の結果、№.１で古墳時代の方形竪穴住居、№.２で溝、№.３で弥生時代後期の溝、№.５で柱穴、№.６で溝、№.８で近世の井戸、№.10で溝を検出した。遺構が検出できなかった調査区でも遺物包含層を検出し、全体が遺跡であることが判明した。

平成２年度　第２次調査　本発掘調査（調査番号900046）

調査は、平成元年度の第１次調査である確認調査の結果に基づき実施した。範囲は、大阪府境の道路センター№.83～№.88の延長100m、幅は最大30mである。２本の南北方向の水路のため、西側からＡ地区・Ｂ地区・Ｃ地区と呼称した３地区に分けて調査を実施した。平成２年12月３日から平成３年３月18日にかけて調査を実施した。調査面積は1774㎡である。

調査の結果、縄文時代後期の流路、弥生時代後期の溝、古墳時代前期と中期の竪穴住居、飛鳥時代の溝、奈良時代の掘立柱建物、中世の溝などが見つかった。現場において、立命館大学の高橋学先生に自然地理学的所見を得、奈良大学の泉拓良先生に縄文時代についての所見を得た。

調査の成果は、平成３年３月２日に地元住民を中心に現地説明会を開催し、多数の参加者があった。

平成５年度　第３次調査　確認調査（調査番号930063）

平成２年度に本発掘調査を実施した西側の道路センター№.87から№.94までの延長約140m、幅約25mの地域は不法占拠地となっており、確認調査を実施し得ない状況であった。しかし、平成４年に強制執行によって不法占拠による産業廃棄物等の撤去が完了し、調査未実施地区の確認調査が可能となった。調査は、平成５年５月12日から５月14日にかけて確認調査を実施した。調査面積は56㎡である。

調査は、路線予定地に２m×２mの試掘坑を14か所設定し、遺跡の有無を確認するとともに、土層の堆積状況を確認し、記録した。東から№.１とし、以下西へ順次設定した。

調査の結果、東端の№.１は、上層より、盛土、第１層：暗灰色砂質シルト、第２層：黄灰色砂質シルト、第３層：暗灰色礫混じり粗砂、第４層：灰色シルト、第５層：暗黄色粗砂となる。第２層は須恵器の包含層であるが、遺物の量は僅少で磨滅が著しく、原位置を保つものではないため、東側の小阪田遺跡本体部からの流入と認められる。№.１は遺構が検出されなかったものの、遺跡の最西端の様相を示している。西側の№.２・３～12･14は、第１層が産業廃棄物を含む盛土層であり、第２層が人為的に河川を埋め立てた山土で、第３層は旧箕面川の堆積層である。№.２では旧箕面川の木の護岸設備が認められた。遺構・遺物は出土していない。№.13は第１層が産業廃棄物を含む盛土層であり、その下層はボーリング場跡地のコンクリートである。遺構・遺物は出土していない。

調査の結果、№.１は小阪田遺跡の西端を示すことが判明した。ただし、遺物は東からの転入であり、遺構は認められない。№.２～14までは、いずれも旧箕面川の河川敷であることが判明した。

平成７年度　第４次調査　確認調査（調査番号950135）

平成２年度の調査地点の北側に阪神高速道路公団伊丹交通管理基地の建設が計画されたため、構造物

建設予定範囲の確認調査を平成７年６月１日から16日にかけて実施した。調査地は大阪府との府県境に接した三角形の土地である。調査区は、構造物建設予定範囲に２ｍ×２ｍの試掘坑を５か所設定し調査を行った。調査面積は48㎡である。

調査は、バックホーで掘削した後、遺物包含層および遺構面が存在すると考えられる層位まで人力によって掘削を行い、遺跡の有無を確認するとともに、土層の堆積状況を確認し、記録した。

周囲から一段高い土地となっており、確認調査によって厚さ約1.5ｍの盛土を確認した。盛土と旧耕作土の下には遺物包含層と遺構面を確認した。調査の精度を高めるために№.４と№.５を結ぶ部分にトレンチを設け調査を行った。調査の結果、遺構や遺物を検出し、本発掘調査が必要であると判断した。

第５次調査　本発掘調査（調査番号950382）

調査は、平成７年度の第４次調査の確認調査の結果に基づき実施した。期間は平成８年１月17日から３月25日にかけて行い、調査面積は858㎡である。

本発掘調査では盛土等を除去した後、西側は遺構面まで機械によって除去し、ＳＤ108から東側は包含層が存在したため、包含層上面までを機械で掘削した。調査の結果、土壌化層の上下面で遺構が見つかった。第１面の遺構はＳＤ108の東側で溝・掘立柱建物などを検出しており、弥生時代終末から近世に至る時期のものである。下層の第２面は柱穴状の穴や土坑を検出し、掘立柱建物２棟を復元した。ほとんど遺物は出土しなかったが、上層の状況から弥生時代後期以前の遺構面と考えられる。

調査区の地形は比較的水平であったが、土層の堆積状況を確認すると、緩やかに西に向かって傾斜していることがわかる。更に下層の堆積状況を確認するため、一部断ち割りを行ったところ、下層はよく締まった砂礫層とシルト層が互層となっており、その上層に極細砂層が堆積した後、比較的安定した地形となった状況が見られた。

２．出土品整理の経過

出土品の整理は、諸般の事情で遅れたが、平成７年度の取り扱いの回答における別途協議に基づき、阪神高速道路公団大阪建設局長からの依頼により、平成16年度と平成17年度に実施することとなり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

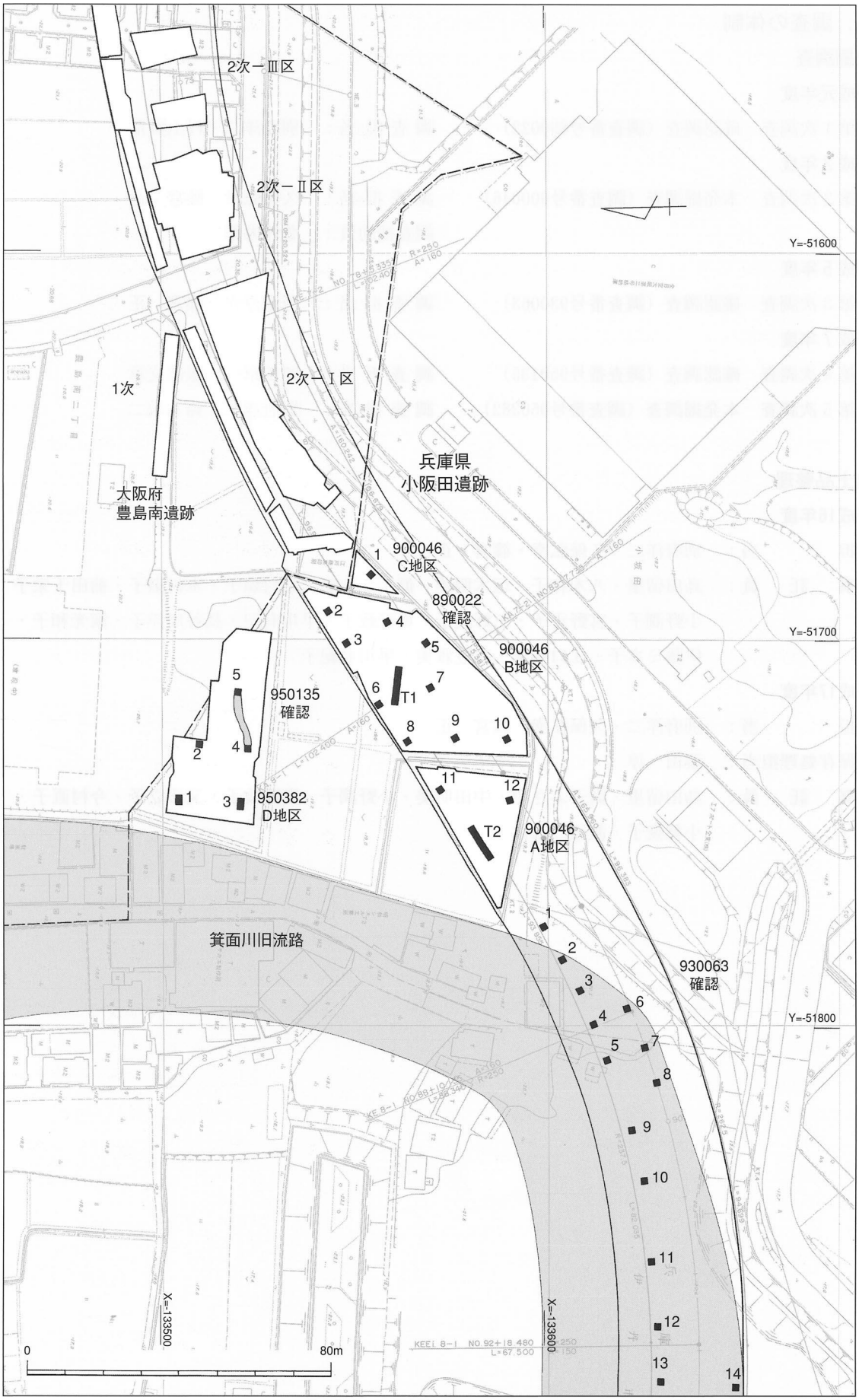
平成16年度

平成16年度は、出土遺物の水洗・注記を行った後、接合・補強を行い、実測や拓本・写真撮影するものを選択した。その後、実測・拓本を行った。遺物実測図は遺構図と共にトレースを実施した。

平成17年度

平成17年度は、土器の復原を行い、石器・木器とあわせて遺物の写真撮影を行った。昨年度に製図したトレース図のレイアウトを行った。

併せて、弥生土器の胎土分析および掘立柱建物の柱根樹種の同定を入札によりパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。縄文土器については京都大学埋蔵文化財センターの千葉豊氏にご教示を得た。これらの成果をもとに、原稿執筆・編集を行った後、報告書を刊行した。



第７図　小坂田遺跡と豊島南遺跡の調査区

３．調査の体制

発掘調査

平成元年度

第１次調査　確認調査（調査番号890022）　調査担当：別府洋二・村上賢治

平成２年度

第２次調査　本発掘調査（調査番号900046）　調査担当：久保弘幸・篠宮　正
調査補助員：藤井太郎

平成５年度

第３次調査　確認調査（調査番号930063）　調査担当：種定淳介・篠宮　正

平成７年度

第４次調査　確認調査（調査番号950135）　調査担当：岡田章一・服部文章
第５次調査　本発掘調査（調査番号950382）　調査担当：別府洋二・鈴木敬二

出土品整理

平成16年度

担　　当：別府洋二・久保弘幸・篠宮　正
嘱　託　員：島田留里・八木和子・垣本明美・眞子ふさ恵・島村順子・木村淑子・前田千栄子・小野潤子・宮野正子・三好綾子・奥野政子・早川有紀・長谷川洋子・家光和子・伊藤ミネ子・江口初美・衣笠雅美・早川亜紀子

平成17年度

担　　当：別府洋二・久保弘幸・篠宮　正
保存処理担当：藤田　淳
嘱　託　員：島田留里・眞子ふさ恵・中田明美・小野潤子・奥野政子・又江立子・今村直子・小林俊子・渡辺二三代

第３章　調査成果

第１節　概要（第７図　図版２）

大阪府道・兵庫県道高速大阪池田線（延伸部）の本線部分は大阪府境の道路センター№.81＋５付近から№.86＋４付近までの延長約99mについて、平成元年度に確認調査実施し、平成２年度に本発掘調査を行った。調査範囲は、２本の水路により調査区が３か所に分かれていたため、西からＡ地区、Ｂ地区、Ｃ地区と呼称して調査を進めた。86＋４付近以西は平成５年度の確認調査の結果、箕面川の旧河道であることが判明し、遺跡は広がらなかったため、本発掘調査は実施しなかった。

Ａ地区とＢ地区の調査区の北側に位置する阪神高速道路公団伊丹交通管理基地建設の部分は、平成７年度に確認調査を実施し、平成７年度に本発掘調査を行った。報告書作成にあたり新たにＤ地区と呼称した。

Ａ地区とＤ地区の西側は旧箕面川の河川敷にあたり、遺跡の西限になる。Ｃ地区とＤ地区の東側は大阪府との府県境にあたり、池田市側は豊島南遺跡と呼ばれている。

小阪田遺跡は発掘調査の結果、縄文時代・弥生時代・古墳時代・飛鳥時代・奈良時代・中世の遺構を検出した。縄文時代の遺構は後期の流路を検出し、中期末から後期の土器とサヌカイトが出土した。弥生時代の遺構は後期の溝を検出し、多量の土器が出土した。古墳時代の遺構は前期の竪穴住居と溝、中期の竪穴住居を検出した。前期の竪穴住居は方形で１基を確認した。溝状の土坑は１基確認した。中期の竪穴住居は竈を作りつけている。飛鳥時代は溝を検出した。奈良時代は掘立柱建物と溝を検出した。平安時代と中世は溝を検出した。

第２節　Ａ地区

１．概要（第８・９図　図版10～12）

調査範囲の西端に位置する三角形の調査区である。面積は500㎡を測る。北側は耕作地、南側は市道で東側は水路をはさんでＢ地区である。調査前は耕作地であり、標高18.8m前後であった。

北東隅は削平が著しく、20cmの耕作土を除去すると遺物包含層はほとんどなく、遺構検出面となる。ここから南西方向に向かっては、遺構検出面までの堆積層が傾斜して厚くなっており、最深70cm程度である。

２．遺構（第８図）

SD20（第10図　図版16）

SB04の南西角付近に位置する溝である。SB04の柱Ｐ415とSD12に切られている。ほぼ直角に屈曲する溝で、北側に3.5m、西側に2.8m延びる。幅0.4m、深さ0.08mであるが、土器が検出面で削平されていたため、本来はもう少し深かったと考えられる。埋土はシルト質極細砂である。

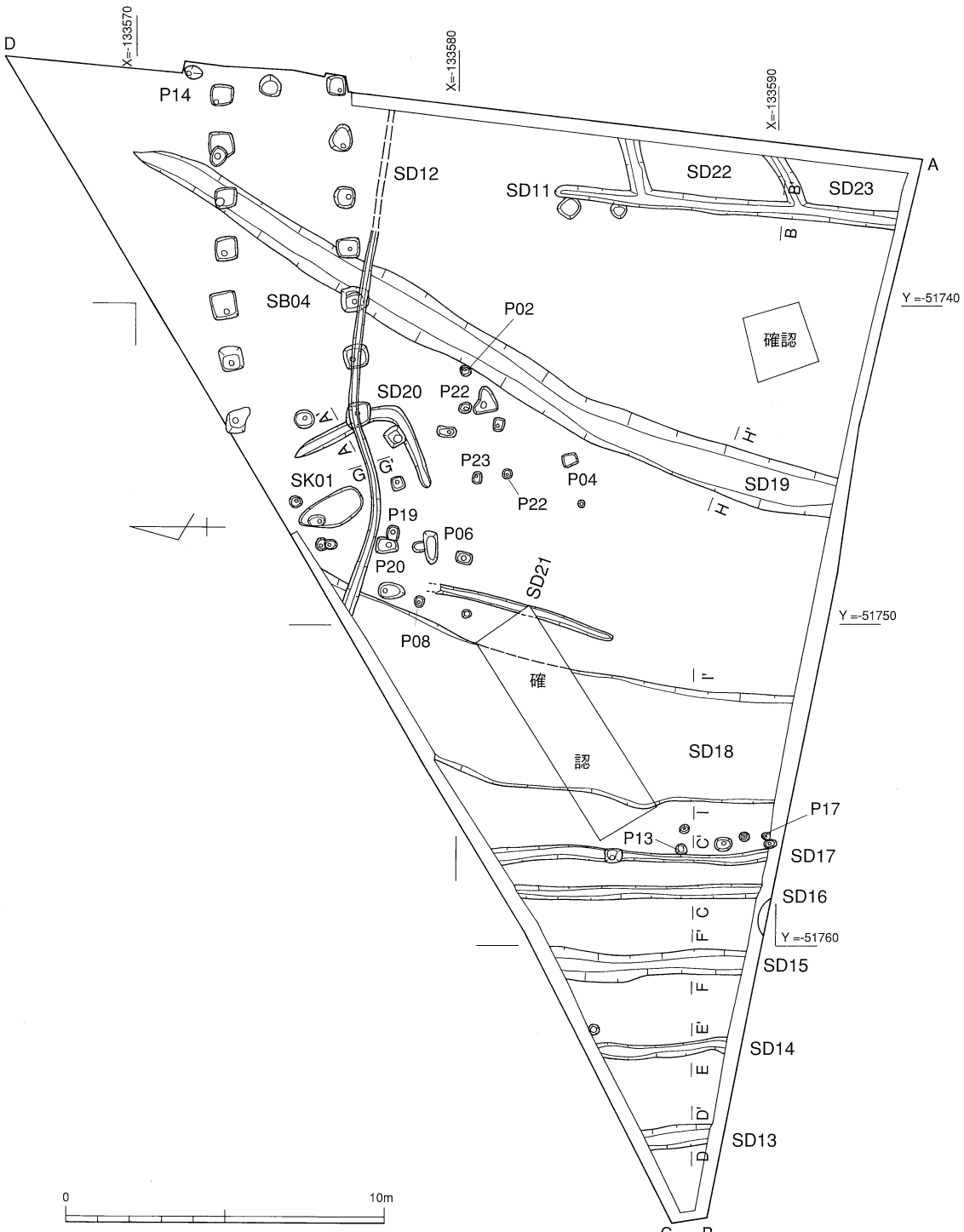
遺物は、古墳時代前期の土師器壺が出土した。

SD19（第10図　図版16）

調査区の北東角から南西に流れる溝である。SB04のＰ405・Ｐ412・Ｐ413とSD12に切られている。幅1.5m～1.2m、最大深さ0.27mで、僅かに北から南に傾斜している。埋土はシルトからシルト質極細砂である。遺物は飛鳥時代の須恵器坏Ｉ・坏Ｇ身・平瓶が出土した。

SD18（第10図　図版16）

SD19の西側に位置する南北流路である。北端でSD12に切られている。幅2.3m、深さ0.07mで、僅かに



第８図　A地区平面

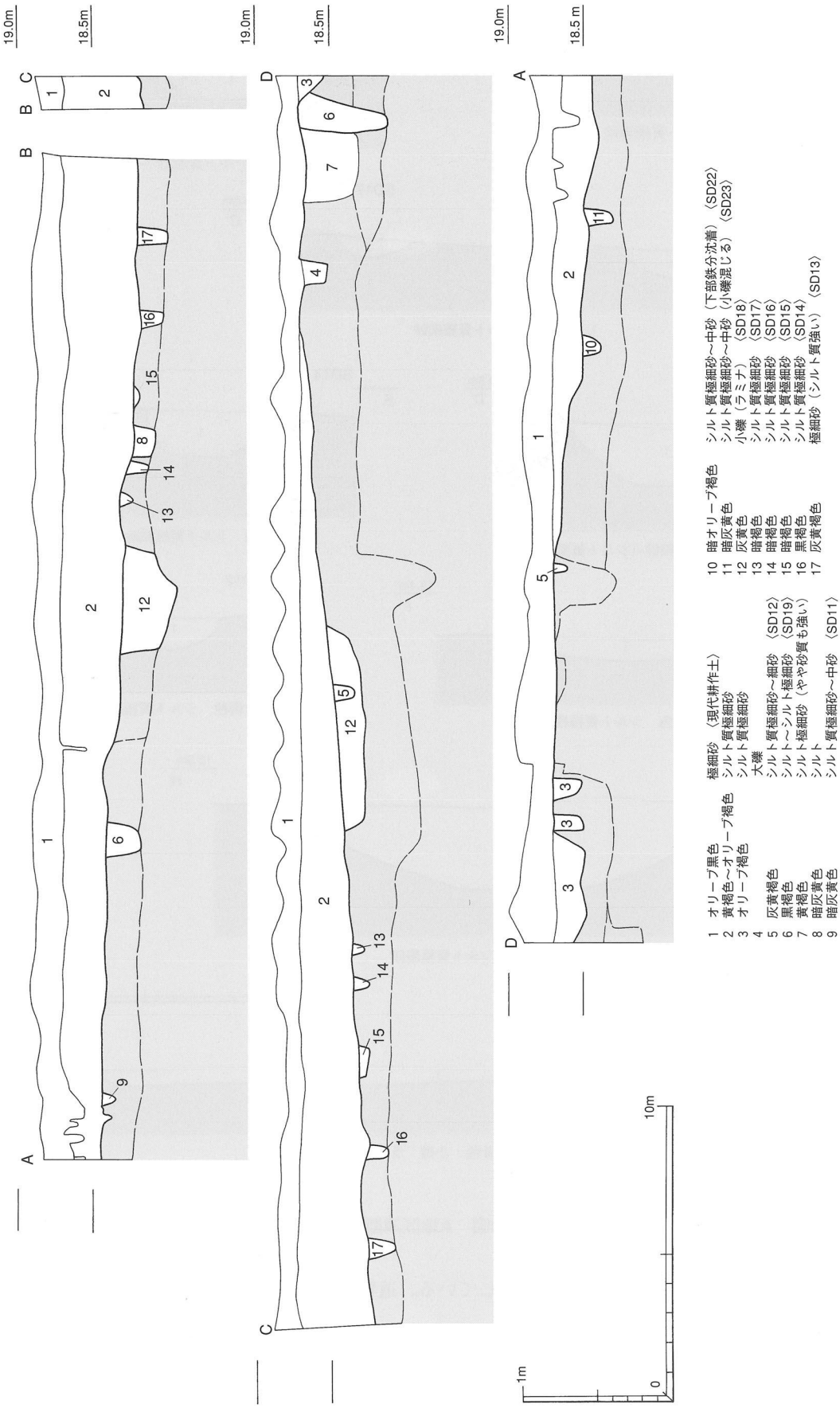
北から南に傾斜している。埋土は小礫を中心としたラミナが認められる。遺物は須恵器坏Ｂが出土した。

SD11（第10図　図版17）

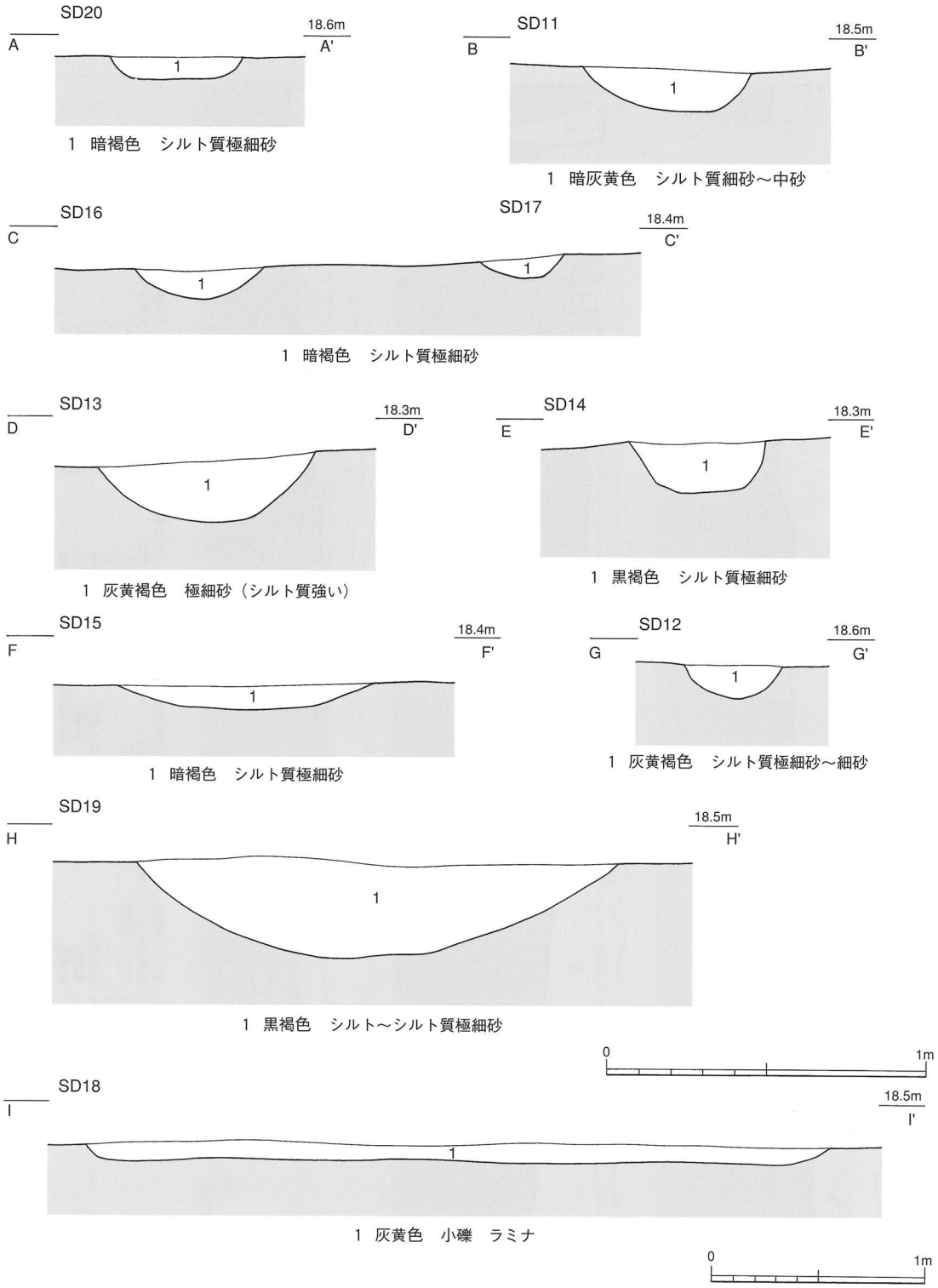
調査区の南東端に位置し、北から東に４°振る南北溝である。SD22とSD23が合流している。幅0.5m、深さ0.13mで、僅かに北から南に傾斜している。埋土はシルト質の細砂から中砂である。遺物は出土していない。

SD22（第８図　図版17）

調査区の南東端に位置する東西溝である。SD11に合流している。幅0.6m、深さ0.10mで、埋土は


19.0m
18.5m
A
B
C
D
1 オリーブ黒色 極細砂 〈現代耕作土〉
2 黄褐色～オリーブ褐色 シルト質極細砂
3 オリーブ褐色 シルト質極細砂
4 大礫
5 灰黄褐色 シルト質極細砂～細砂 〈SD12〉
6 黒褐色 シルト～シルト極細砂 〈SD19〉
7 黄褐色 シルト極細砂（やや砂質も強い）
8 暗灰黄色 シルト
9 暗灰黄色 シルト質極細砂～中砂 〈SD11〉
10 暗オリーブ褐色 シルト質極細砂～中砂（下部鉄分沈潜）〈SD22〉
11 暗灰黄色 シルト質極細砂～中砂（小礫混じる）〈SD23〉
12 灰黄色 小礫（ラミナ）
13 暗褐色 シルト質極細砂 〈SD18〉
14 暗褐色 シルト質極細砂 〈SD17〉
15 暗褐色 シルト質極細砂 〈SD16〉
16 黒褐色 シルト質極細砂 〈SD15〉
17 灰黄褐色 極細砂（シルト質強い）〈SD14〉
〈SD13〉
1m
0
10m

第９図　Ａ地区壁土層



第10図　A地区溝断面

シルト質極細砂から中砂で下部に鉄分が沈着している。遺物は出土していない。

SD23（第８図　図版17）

調査区の南東端に位置する東西溝である。SD11に合流している。幅0.5m、深さ0.12mで、埋土はシルト質極細砂から中砂で小礫が混じっている。遺物は出土していない。

SD13～SD17（第10図　図版17）

調査区の西端に位置する南北溝の一群である。SD13は北から西に８°振る他は正南北で平行しており、いずれも僅かに北から南に傾斜している。西からSD13・SD14・SD15・SD16・SD17であり、それぞれの間隔は9.0m・9.0m・7.0m・3.0mである。

SD13は幅0.7m、深さ0.20mで、埋土は灰黄褐色の極細砂である。遺物は須恵器坏H蓋が出土した。

SD14は幅0.4m、深さ0.15m、SD15は幅0.8m、深さ0.07m、SD16は幅0.4m、深さ0.10m、SD17は幅0.3m、深さ0.08mで、埋土はシルト質極細砂である。SD16からは須恵器瓶が出土した。

SD21（第８図　図版16）

SD18の東側1.5mに位置し、北から東に17°振る南北溝である。幅0.25m、深さ0.05mで、僅かに北から南に傾斜している。遺物は出土していない。

SD12（第10図　図版16）

SB04の南辺に位置する僅かに蛇行する東西溝である。SB04のP413・P414・P415とSD19・SD20・SD18を切っている。規模は西端で幅0.3m～02m、深さ0.13m、東側で幅0.2m、深さ0.03mで、西に向かって傾斜している。遺物は土師器の皿と瓦器椀が出土した。

SB04（第11図　図版13～15）

調査区の北端で検出した掘立柱建物である。SD20とSD19を切り、SD12に切られている。北から西に２°振る南北棟方向で、梁行２間（3.92m）、桁行６間（10.00m）の側柱棟建物である。柱通りはすべての面ともに良く通っている。梁行方向の柱穴間距離は1.8m～2.1mである。桁行方向の柱穴間距離は1.6m～1.7mとほぼそろっている。

柱掘形は方形を基調として、桁の中心柱のP408・P416と南側桁のP410・P411の合計４本が円形である。方形のものは一辺0.8m～0.6m、円形のものは直径0.7m～0.6mの規模がある。柱掘形は検出面からの深さは0.7m～0.1mと最大0.6mの差が認められるが、これは下部の礫層の堆積状況による影響である。すなわち、相対的に東側の方の礫層が高くなっている。柱痕跡はシルト化しており、直径25cm程度で、P402の柱根部分は重さのため、掘形底部より沈み込んでいた。

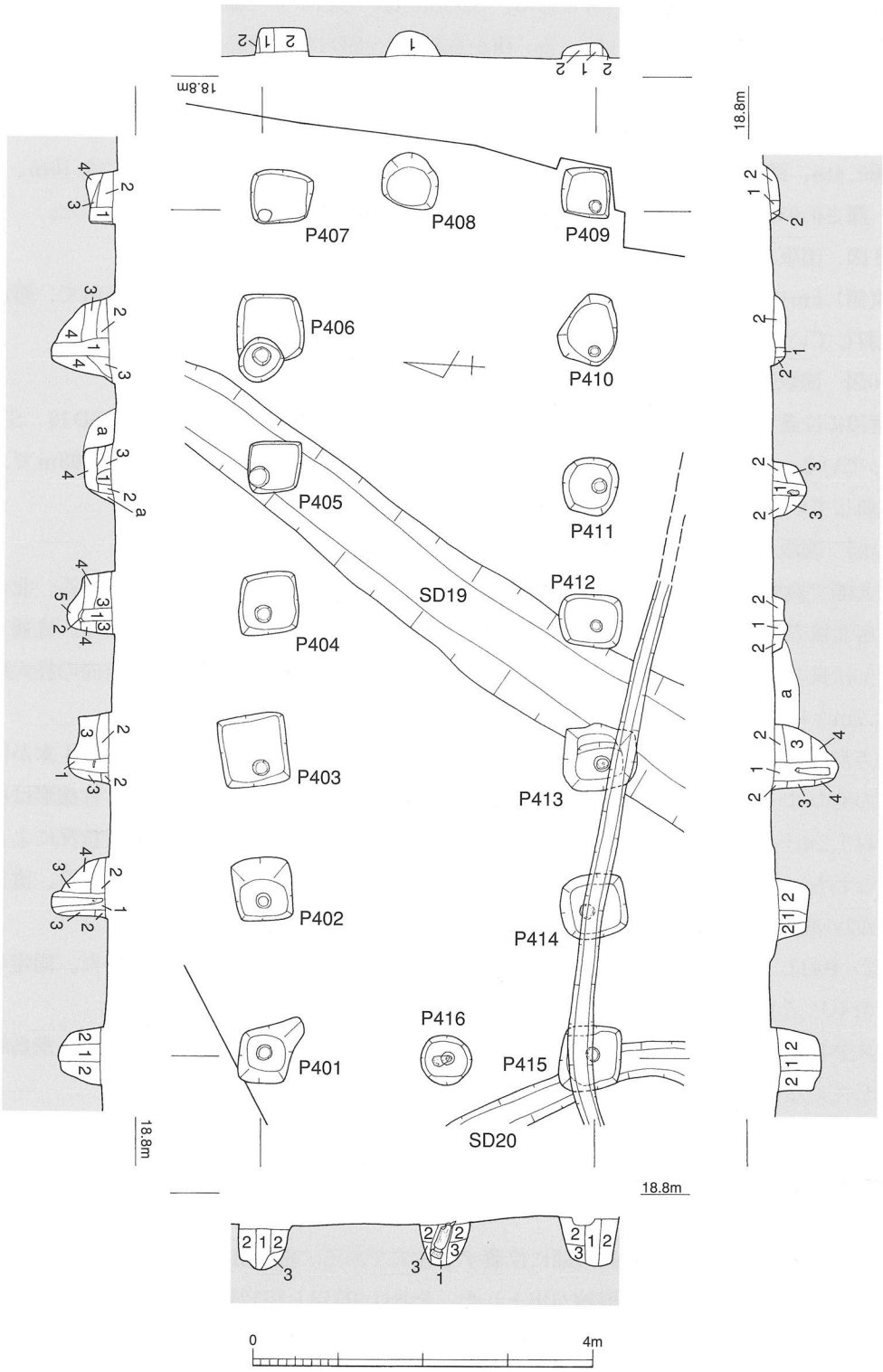
柱はP402・P413・P416の柱材が遺存していたほか、P411は柱材の一部が残っていた。同定の結果樹種はいずれもヒノキであった。西側桁の中心柱P416は柱材が南に約20°傾いていた。

遺物は柱穴P411掘形から飛鳥時代の須恵器坏H身が出土した。SB04が切る溝SD19から飛鳥時代の遺物が出土していることから柱埋設に際して、周囲から混入したと考えられる。

柱穴（第８図　図版12）

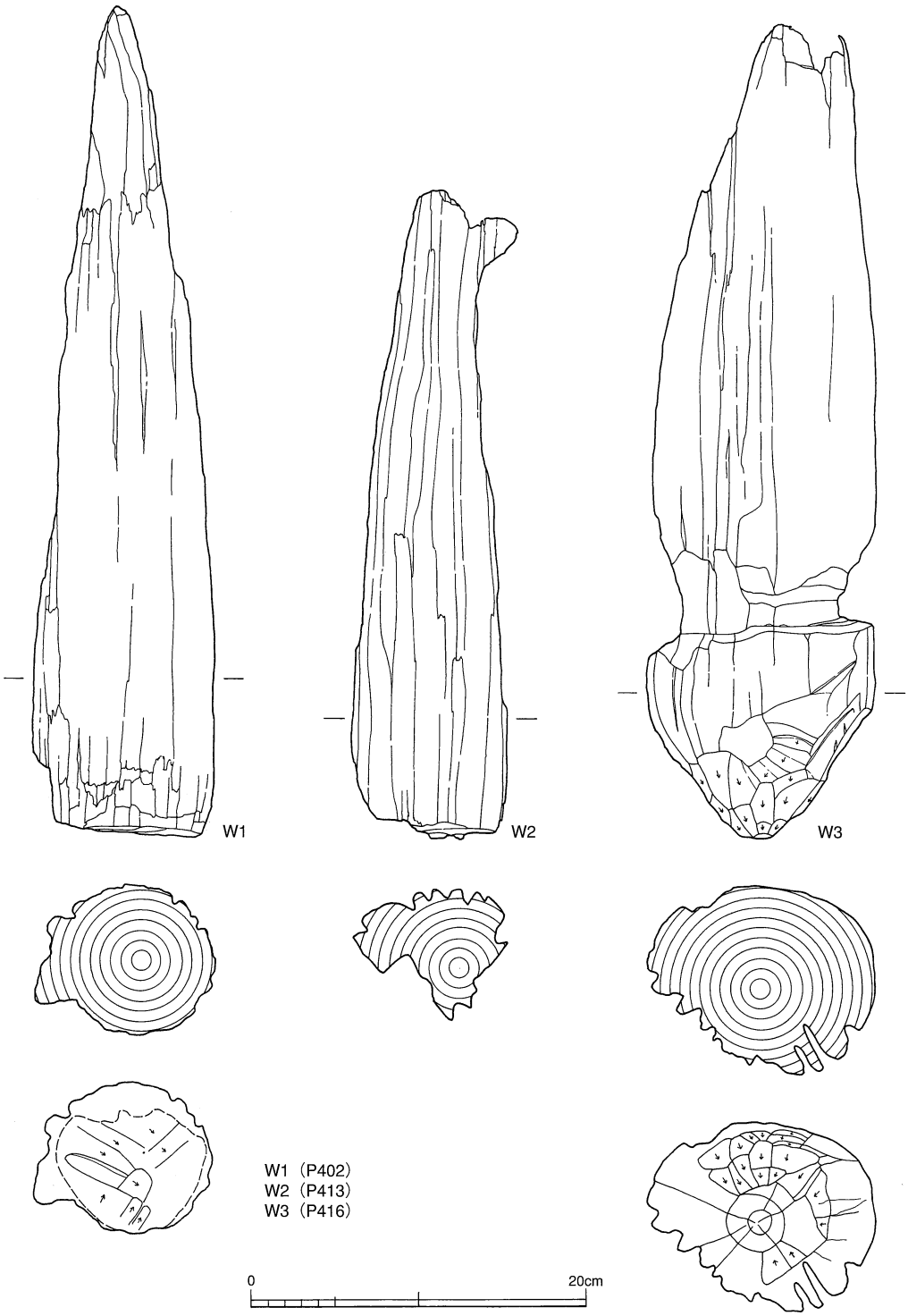
柱穴はSB04のほかに34基検出した。方形の大型のものや円形の小型の物が存在するが、主要なものについて記述する。

P17は調査区の南端のSD17とSD18の間に位置する柱穴である。掘形は直径0.2mの円形で、深さは0.15mである。遺物は土師器皿、瓦器椀が出土した。P08はSD18とSD21の間に位置する柱穴である。掘形は直径0.3mの円形で、深さは0.15mである。遺物は須恵器坏が出土した。P23はSD18とSD19の間に位置する柱穴である。掘形は東西0.35m、南北0.3mの隅丸方形で、深さは0.23mである。須恵器坏が出土した。P14はSB04の北東隅柱P407の北東に位置する柱穴である。掘形は直径0.4mの不整円形で、深さは0.1mである。遺物は掘形から完形の須恵器坏Bが出土した。P02はSD19とSD20の間に位置する柱穴である。掘形は直径0.3mの円形で、深さは0.35mである。遺物は須恵器甕が出土した。P06はP08の東側に位置する柱穴である。掘形は東西1.0m、南北0.4mの隅丸長方形で、深さは0.4mである。遺物は土師器皿が出土した。P19はSD12のすぐ南側に位置する柱穴である。掘形は東西0.4m、南北0.3mの隅丸長方形で、深さは0.3mである。遺物は土師器皿が出土した。



P401	1	灰黄褐色	シルト（炭混じり）　柱痕跡
	2	暗灰黄色	シルト質極細砂　掘形
P402	1	灰黄褐色	極細砂質シルト　柱痕跡
	2	暗灰黄色	シルト質極細砂　掘形
	3	オリーブ褐色	シルト質極細砂　掘形
	4	褐灰色	シルト質極細砂　掘形
P403	1	黄灰色	極細砂質シルト　柱痕跡
	2	灰黄褐色	シルト質極細砂　掘形
	3	灰黄褐色	シルト質極細砂　（ブロック状）掘形
P404	1	暗灰黄色	極細砂質シルト　柱痕跡
	2	黒褐色	シルト　掘形
	3	灰黄褐色	極細砂質シルト　掘形
	4	褐灰色	極細砂質シルト　掘形
	5	暗褐色	極細砂質シルト　掘形
P405	1	灰黄褐色	極細砂質シルト　柱痕跡
	2	暗褐色	極細砂質シルト　掘形
	3	灰黄褐色	極細砂質シルト　掘形
	4	黒褐色	極細砂質シルト　掘形
P406	1	にぶい黄褐色	極細砂質シルト　柱痕跡
	2	にぶい黄褐色	極細砂質シルト　掘形
	3	灰黄褐色	極細砂質シルト　掘形
	4	黒褐色	極細砂質シルト（ブロック状）　掘形
P407	1	灰黄褐色	極細砂質シルト　柱痕跡
	2	暗灰黄色	極細砂質シルト　掘形
	3	暗褐色	シルト　掘形
	4	灰黄褐色	極細砂質シルト（小礫混じる）　掘形
P408	1	灰黄褐色	極細砂質シルト
P409	1	暗灰黄色	極細砂質シルト　柱痕跡
	2	にぶい黄褐色	極細砂質シルト　掘形
P410	1	灰褐色	シルト　柱痕跡
	2	灰褐色	極細砂質シルト　掘形
P411	1	にぶい黄褐色	極細砂質シルト（小礫混じる）　柱痕跡
	2	灰黄褐色	極細砂質シルト　掘形
	3	灰黄褐色	極細砂質シルト　掘形
P412	1	褐灰色	シルト　柱痕跡
	2	にぶい黄褐色	極細砂質シルト　掘形
P413	1	暗灰黄色	シルト　柱痕跡
	2	にぶい黄褐色	極細砂質シルト　掘形
	3	黄灰色	極細砂質シルト（ブロック状）　掘形
	4	オリーブ褐色	シルト　掘形
P414	1	褐灰色	シルト　柱痕跡
	2	黄灰色	極細砂質シルト　掘形
P415	1	黄灰色	シルト　柱痕跡
	2	褐灰色	極細砂質シルト　掘形
	3	褐灰色	極細砂質シルト　掘形
P416	1	灰黄褐色	極細砂質シルト　柱痕跡
	2	褐灰色	極細砂質シルト　掘形
	3	にぶい黄褐色	極細砂質シルト　掘形
SD19	a	黒褐色	シルト～シルト極細砂

第11図　掘立柱建物SB04



第12図　掘立柱建物SB04柱根

Ｐ20はＰ19を切り西側に接する柱穴である。掘形は東西0.5m、南北0.7mの隅丸長方形で、深さは0.4mである。掘形上部に中礫２個が入れられていた。遺物は土師器の皿と鉢が出土した。

Ｐ04は調査区のほぼ中央部、SD19のすぐ西側に位置する柱穴である。掘形は一辺0.4mの方形で、深さは0.03mと浅い。遺物は須恵器甕が出土した。

Ｐ13はSD17のすぐ東側に位置する柱穴である。掘形は一辺0.3mの隅丸方形で、深さは0.17mである。底に中礫３個と小礫１個が入れられていた。

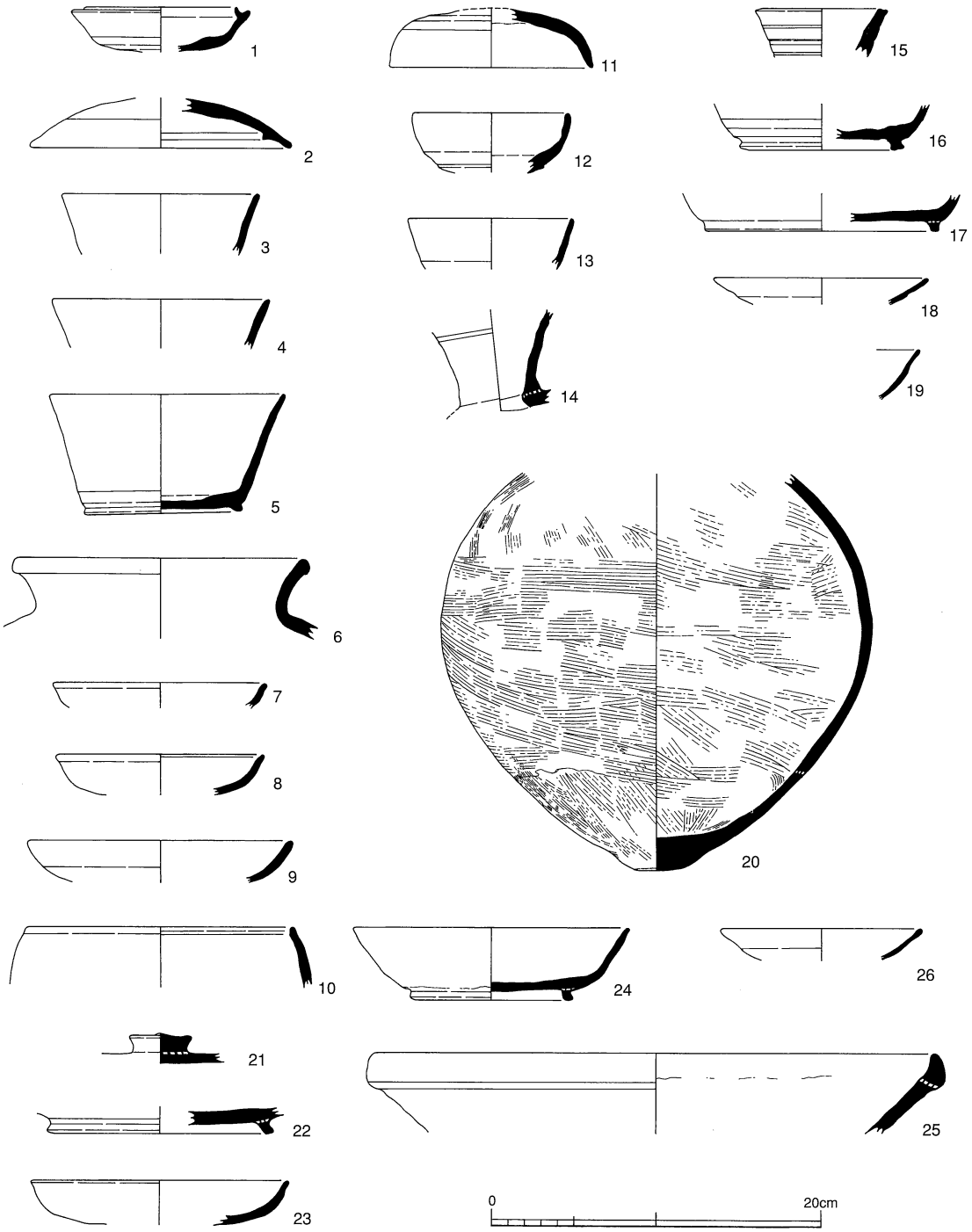
３．遺物（第12･13図　図版18～20）

SD20（第13図　20　図版18）

土師器壺20は口縁部から体部上半を欠く。体部は球形で、直径３cmの小さな底部をもつ。外面はハケ調整で、下部と上部が縦方向、中程が横方向である。

SD19（第13図　12～14　図版19）

須恵器坏I12は全体に厚く作っている。須恵器坏G身13は直線的に開く口縁部の破片である。須恵器



第13図　A地区出土土器

平瓶14は体部閉塞部の境界に穿孔して頸部を貼り付けている。

SD16（第13図　15　図版19）

須恵器瓶15は外傾する口頸部で、口縁端部に面を作る。頸部外面には沈線をめぐらす。

SD18（第13図　16・17　図版19）

須恵器坏Ｂ16・17は底部の破片で断面方形の高台を貼り付けている。

SB04（第12・13図　1　図版18・20）

柱穴Ｐ411から出土した須恵器坏Ｈ身１は口径9.1cmで、立ち上がりが短く、内傾している。底部はヘラ削りである。

柱穴Ｐ402･Ｐ413･Ｐ416には柱根が残っていた。いずれも樹種はヒノキで芯持ち材である。柱穴Ｐ402の柱根Ｗ１は残存長49.0cm、最大径10.7cmで上部に向かって先細りに腐朽しているため、本来の太さは不明である。底面は中心に向かって加工痕跡が残り、平坦面を形成している。柱穴Ｐ413の柱根Ｗ２は残存長35.7cm、最大径9.1cmで上部に向かって先細りに腐朽しているため、本来の太さは不明である。底面は平坦であるが、腐朽が著しい。柱穴Ｐ416の柱根Ｗ３は残存長48.7cm、最大径13.6cmで上部に向かって先細りに腐朽しているため、本来の太さは不明である。底面は中心に向かって加工痕跡が残り、尖っている。下から約13cmの部分には括れが存在する。

SD13（第13図　11　図版18）

須恵器坏Ｈ蓋11は口径12.1cmと小形で、天井部はヘラ切未調整である。

SD12（第13図　18・19　図版18・19）

土師器皿18と瓦器椀19はいずれも口縁部の小片である。

柱穴（第13図　2～10　図版18・19）

Ｐ17から出土した須恵器坏Ｈ蓋２は、天井部はつまみを欠き淡緑色の自然釉がかかっている。口径は15.5cmと大きく、内面に断面三角形の短いかえりが付く。Ｐ08から出土した須恵器坏３とＰ23から出土した須恵器坏４は直線的に外傾する口縁部の破片である。Ｐ14から出土した須恵器坏Ｂ５は、口縁が直線的に開き、台形の高台を付ける。軟質の焼きで、底部はヘラ切の痕跡を残す。Ｐ02から出土した須恵器甕６は、肩部から口縁部にかけての破片である。頸部は短く外反し、口縁端部は丸く作っている。Ｐ06から出土した土師器皿７は口縁部の小片である。Ｐ19から出土した土師器皿８は外反する口縁部である。Ｐ20からは土師器皿９と鉢10が出土している。鉢10の口縁部は内傾している。

包含層（第13図　21～26　図版18・19）

遺構に伴わない遺物としては、土師器坏Ｂ・坏Ｂ蓋・皿、須恵器坏Ｂ・鉢、瓦器がある。

土師器坏Ｂ蓋21はつまみ径3.8cmの扁平な宝珠摘み部分である。土師器坏Ｂ22は高台径13.7cmである。高台が剥離しているため、底部をヘラケズリした後、高台を貼り付けている。土師器皿23外反する口縁部である。須恵器坏Ｂ24は丸い腰部から口縁が大きく開く。体部に色調による重ね焼きの痕跡が残る。須恵器片口鉢25は直径33.7cmで、口縁端部は肥厚しており、片口部分は存在していない。瓦器皿26は口縁部の小片である。

４．小結

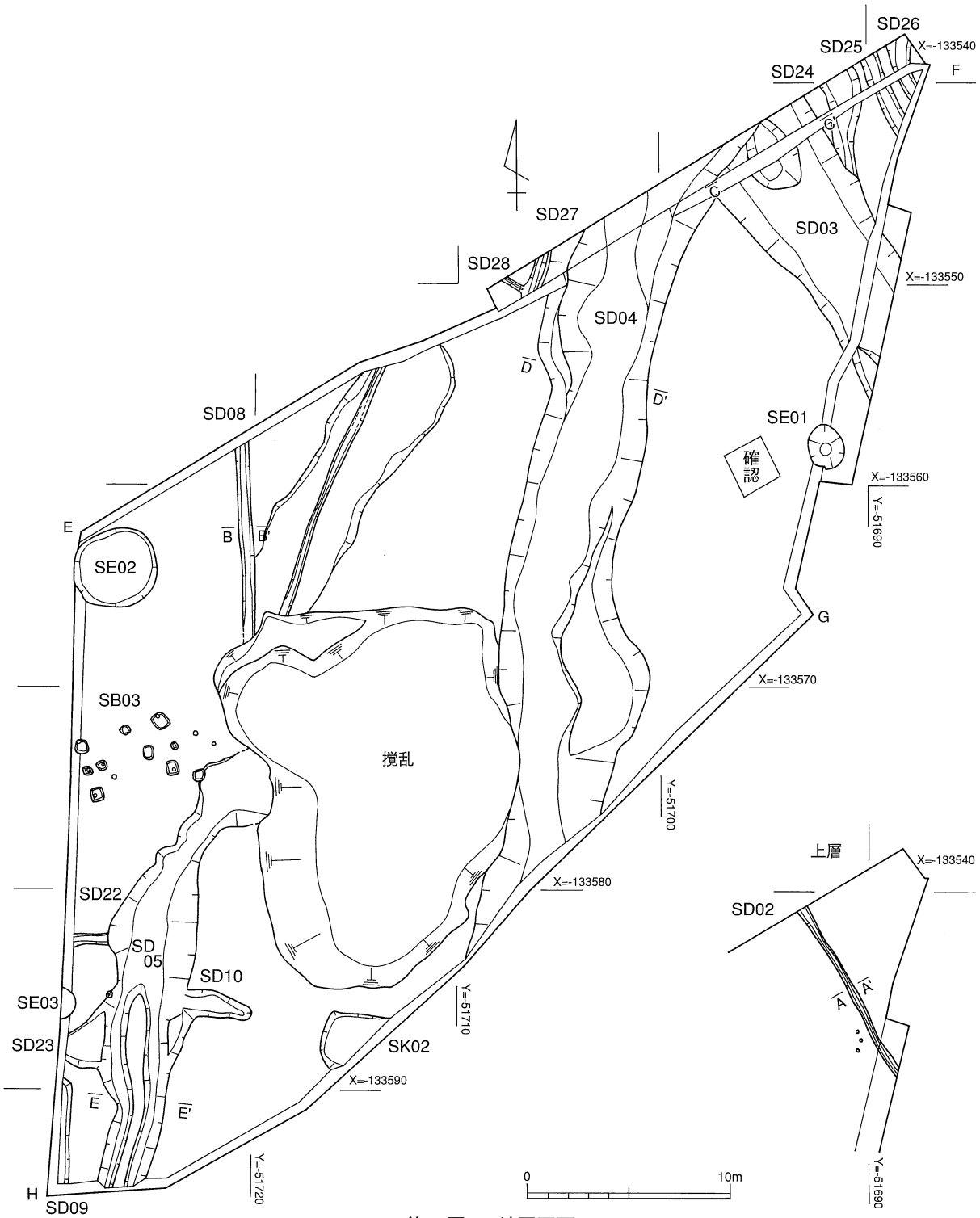
Ａ地区は北東から南西方向に向かって傾斜しており、古墳時代の溝、飛鳥時代の溝、奈良時代の掘立柱建物・溝、平安時代の溝を検出した。古墳時代前期の溝SD20は土坑状の溝である。南北方向の溝群は飛鳥時代から奈良時代に位置づけられる。掘立柱建物SB04は規模が大きい。柱掘形から飛鳥時代の土器が出土しているが、飛鳥時代の溝SD19を切っていることから、飛鳥時代後半から奈良時代の可能性が高い。東西溝SD12は平安時代末に位置づけられる。

第３節　Ｂ地区

１．概要（第14･15･16図　図版10～12･21）

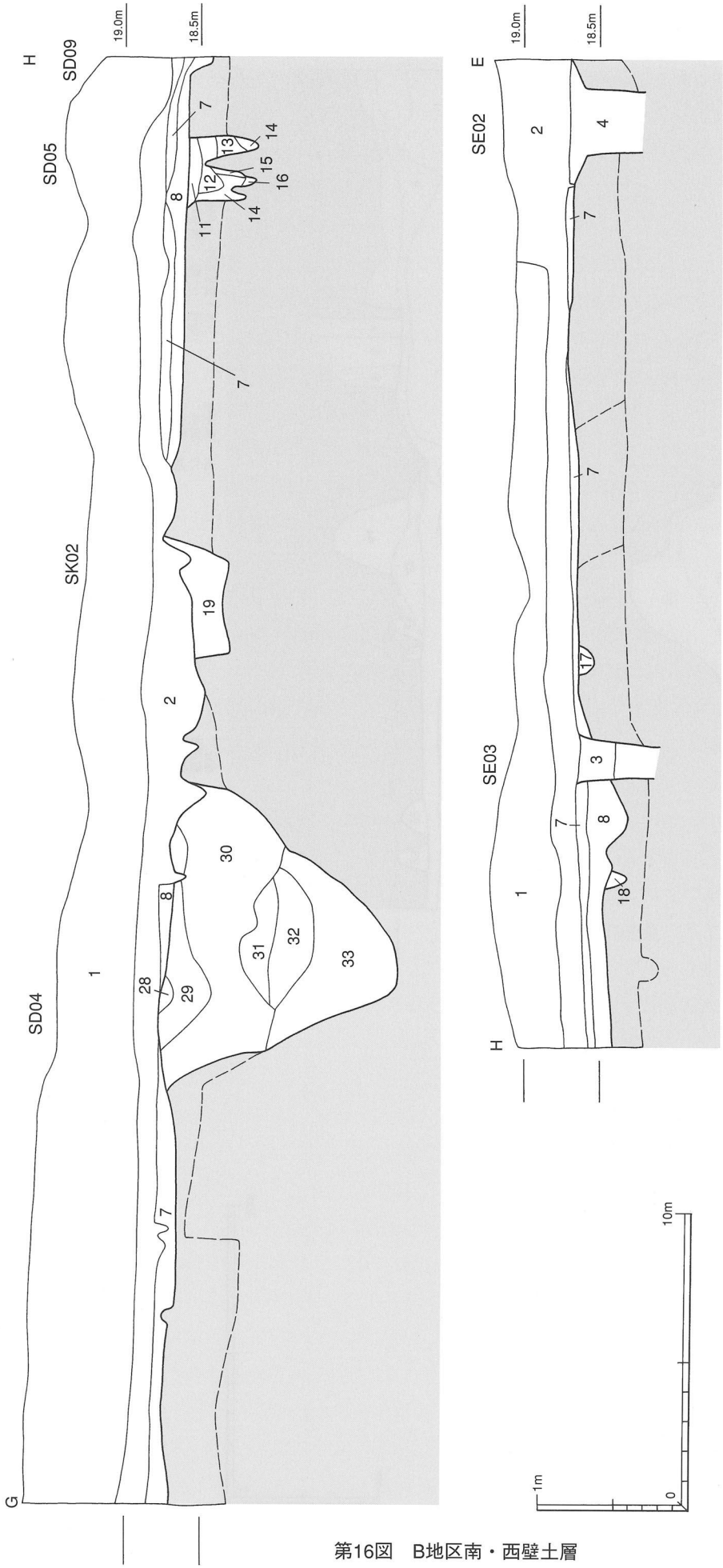
Ｂ地区は水路を挟んで西側にＡ地区、東側にＣ地区が存在する。面積は1217㎡を測る。北側は耕作地、南側は市道である。調査前は耕作地であり、標高19.2m前後である。

調査区の南半分は約0.5mの盛土が行われており、SD04とSD05の間は撹乱により大きな穴があけら



第14図　Ｂ地区平面

第15図　B地区北・東壁土層



第16図　B地区南・西壁土層

れ、遺構面が破壊されていた。削平が著しく、20cm～30cmの耕作土および床土を除去すると遺物包含層はほとんどなく、遺構検出面となる。調査の進展に伴い、多少境界部分に余裕を持たせていた東側部分のSD03とSD04にかかわる部分の周辺は、遺構の切り合いの確認や、遺物を採取するために、境界ぎりぎりまで拡張した。

２．遺構（第14図）

SD03（第17図　図版25）

調査区の東端に位置している。北から南に流れる流路で、北端で弥生時代後期の流路SD04に切られている。幅4.8m～6.2m、深さ0.3m～0.9mで凹凸が著しい。埋土は小礫から中礫を含むシルトからシルト質極細砂で良く締まっている。遺物は縄文時代後期初頭を中心とした土器と少量のサヌカイト剥片がある。

SD24

調査区の東端のSD02とSD25の間に位置しており、SD02に切られている。北から南に流れる溝で、幅1.0m～1.4m、深さ0.45mである。埋土は小礫から中礫を含むシルト質極細砂である。遺物は出土していない。

SD25

調査区の東端のSD26とSD24の間に位置している。北から南に流れる溝で、幅0.8m、深さ0.2mである。埋土はややシルト質で小礫を含む細砂である。遺物は出土していない。

SD26

調査区の東端に位置している。北から南に流れる溝で、幅0.7m～1.2m、深さ0.2mである。埋土は小礫を含む細砂から粗砂である。遺物は出土していない。

SD04（第17図　図版21・24）

SD03の西側、調査区のほぼ中央を北から南に流れる流路である。北端でSD03を切っており、南端の一部が撹乱により影響を受けている。幅4.8m～6.0m、深さ0.8m～1.8mである。埋土は上層が小礫混じりのシルト層で、下層は細砂～小礫のラミナ層で下部には鉄分が沈着しており、水が流れていた痕跡がある。

遺物は弥生時代後期の壺・甕・鉢・有孔鉢・高坏・器台を中心に、弥生時代前期の完形に近い壺、弥生時代中期の完形に近い壺、中期の高坏・壺の小片が出土している。なお、上層から黒色土器椀が出土しているが、上層の遺構の一部か混入であろう。

SD05（第17図　図版21～23）

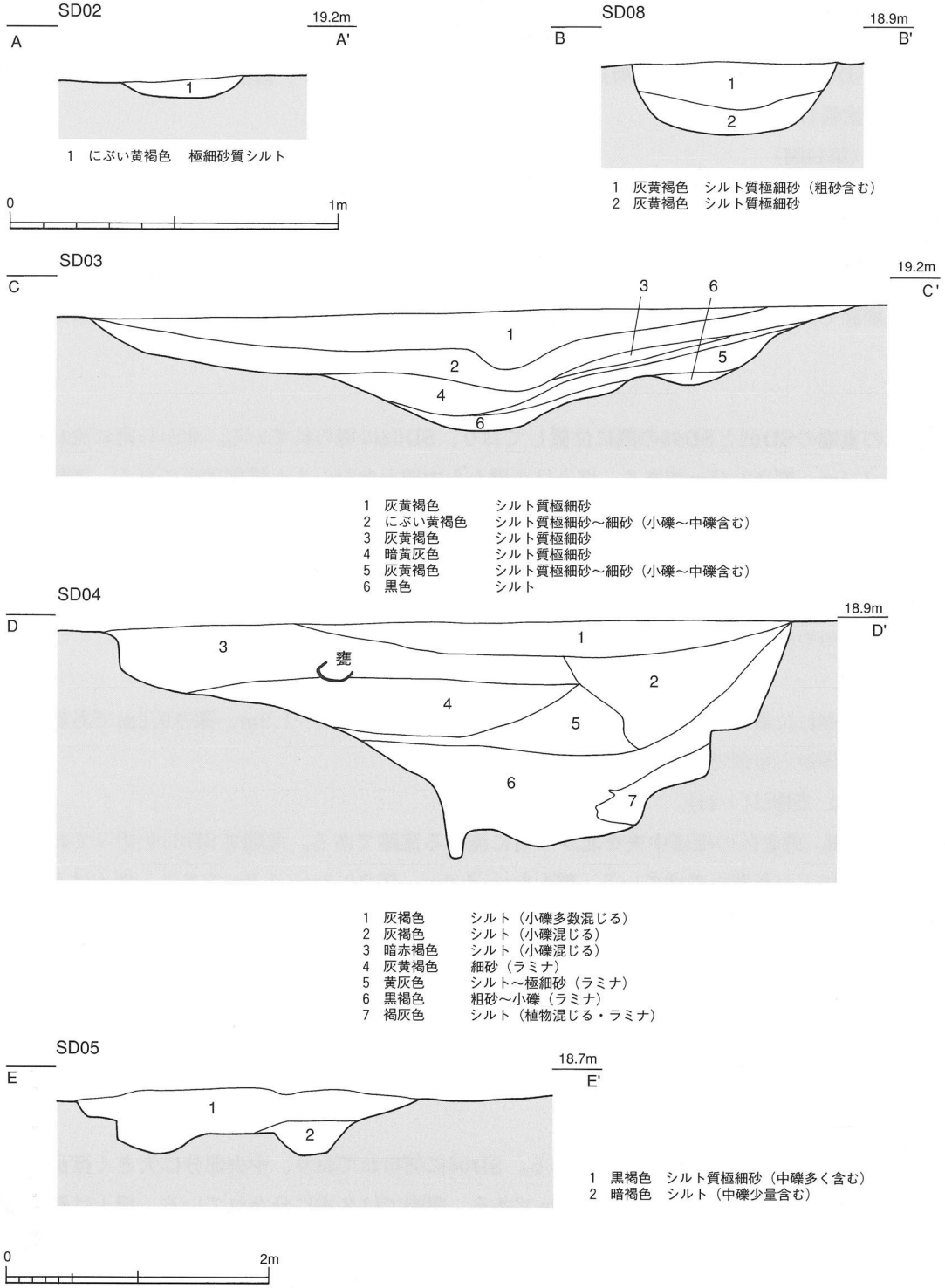
調査区の西側を北から南に流れる溝である。SD08に切られており、中央部分は大きく撹乱を受けている。幅4.3m～3.5m、深さ0.3m～0.45mである。南端では２本に分かれている。埋土は礫を含み複雑に流れた痕跡がある。遺物は弥生時代後期の壺・甕・有孔鉢、古墳時代前期の土師器壺・高坏、古墳時代後期の須恵器坏H蓋坏・坏G・坏Ｉ・坏B蓋坏・高坏・平瓶・瑳・短頸壺・直口壺・広口壺・脚付有蓋短頸壺・器台、土師器坏・高坏・壺・甕がある。

SD22

調査区の西端に位置する溝である。SD05と切り合い関係にあり、Ａ地区のSD22と同一であると考えられる。幅0.5m、深さ0.1mである。遺物は出土していない。

SD23

調査区の西端に位置し、SD05から分岐する東西方向の溝である。Ａ地区のSD23と同一であると考えられる。幅はSD05との分岐部分で3.0m、西端部分で1.4mであり、深さは0.15m～0.3mである。



第17図　B地区溝断面

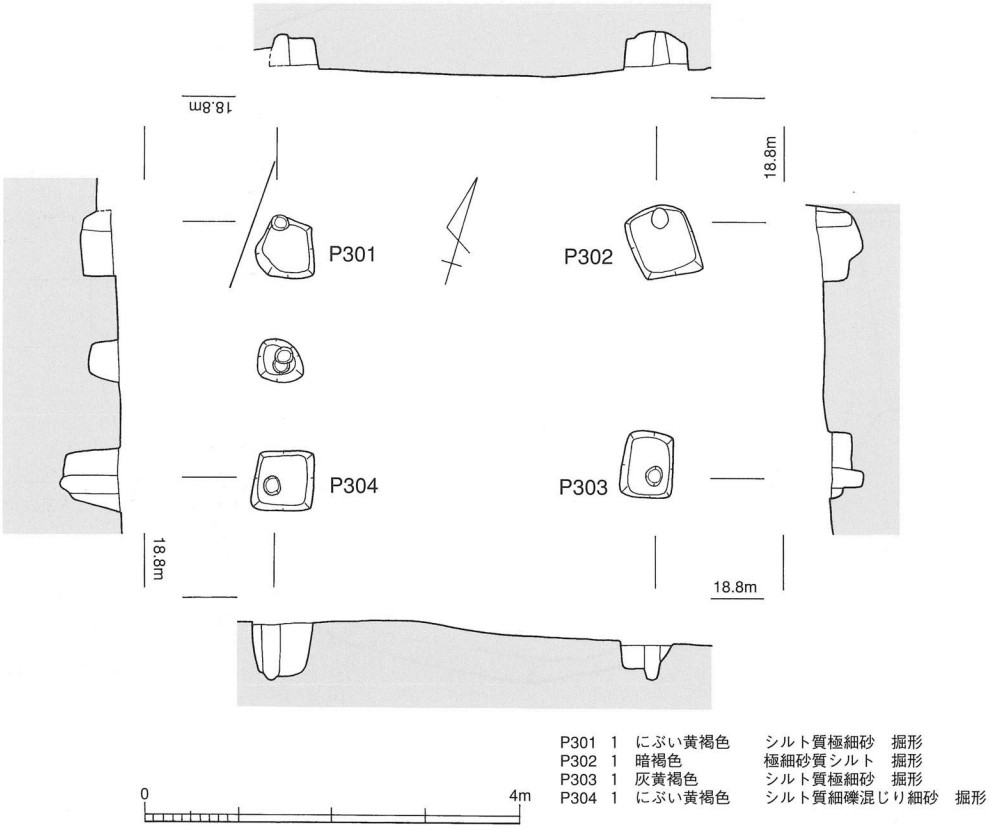
遺物は出土していない。

SD27

調査区の北側の拡張した部分で検出している。SD04の西側に位置し、北から南に流れる溝で、SD28と合流している。幅0.7m、深さ0.1mである。遺物は出土していない。

SD28

調査区の北側の拡張した部分で検出している。東西方向の溝で、SD27と合流している。幅0.3m、



第18図　掘立柱建物SB03

深さ0.05mである。遺物は出土していない。

SK02

調査区の南端、SD04とSD05の間に位置しており、調査区外に延びている。東西3.5m以上、南北2.8mの土坑で、深さ0.2mを測る。埋土はシルト質極細砂である。遺物は小片が僅かに出土した。

SD08（図版22・23）

SD05の西側に位置し、北から西に３°振る南北溝である。南半分でSD05を切っており、南端は攪乱の穴に切られている。幅0.6m、深さ0.25m前後で、埋土は粗砂含むシルト質極細砂である。遺物は小片が僅かに出土した。

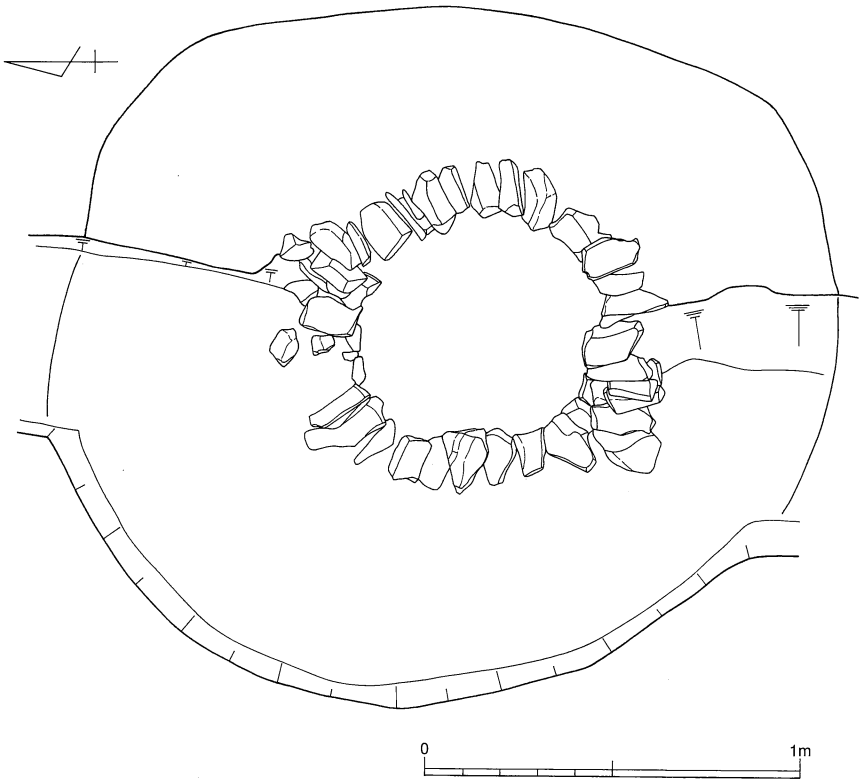
SD09

調査区の南西端に位置する、南北方向の溝である。西側および南端は調査区外に伸びている。長さは5.0m以上、幅は1.0m以上、深さは0.1mである。遺物は飛鳥時代の須恵器坏G蓋が出土した。

SB03（第18図　図版22）

調査区の西端検出した掘立柱建物である。SD05の西側、SE02の南側に位置しており、A地区の掘立柱建物SB04の真東にあたる。北から西に７°振る東西棟方向で、梁行１間（2.3m）、桁行１間（4.0m）の側柱棟建物である。東側あるいは南側は削平されているため、建物の規模が大きくなる可能性がある。

柱掘形は方形であり、一辺0.7m～0.6mの規模がある。柱掘形は検出面からの深さは0.6m～0.2mであるが南東部の削平が著しいためであり、掘形底部の標高は18.1m～18.0mとほぼそろっている。柱痕跡は直径20㎝程度で、P303・P304の柱根部分は重さのため、掘形底部より沈み込んでいた。遺物は



第19図　井戸SE01

P302から小片が出土した。

SD02（第17図　図版25）

SD03東端の上層に位置している。幅0.35m、深さ0.06m程度で、ほぼ直線的であり、C地区に続いている。方位は北から西に35°振っている。埋土は極細砂質シルトである。SD02の南端部分周辺で柱穴を３個検出した。遺物は小片が僅かに出土した。

SE01（第19図　図版26）

調査区の南東端に位置している。当初調査区に約半分かかっていたが、拡張して全容を明らかにした。平面形は円形で、掘形の直径2.0m～1.85m、内径0.6mの川原石積の井戸である。川原石は人頭大程度の大きさの扁平のものを用いている。調査区端に位置していたため、検出面から深さ0.6mまで掘り下げたが、底まで確認できなかった。

SE02

調査区の北西端に位置している。直径4.0mの素掘りの井戸である。深さ1.2mまで調査を進めたが、周囲が砂地で危険なため、深さや下部構造は不明である。掘削面や埋土から近世以降の遺構であると考えられる。

SE03

調査区の西端、SD05の西側に位置しており、半分以上は調査区外である。直径1.5m以上の素掘りの井戸である。深さ0.5mまで調査を進めたが、周囲が砂地で危険なため、深さや下部構造は不明である。掘削面や埋土から近世以降の遺構であると考えられる。

３．遺物（第20～32図）

SD03（第20・21図　27～74　図版27～30）

縄文土器は有文のものや、口縁部・底部のみを図化したが、他に多くの無文部分の破片が存在する。縄文土器は小片のみで全容を窺い知るものはない。部位および文様などから５種類に分類した。

Ａ類（27～34･37～50）は沈線を描き、縄文帯と無文帯を作るものである。波状口縁の深鉢（27～30）は、口縁に平行して沈線を描き、縄文帯と無文帯を作っている。27･28の波頂部は肥厚しておりＲＬ縄文である。28は口縁端部に沈線と刺突で施文する。平口縁の深鉢(31～33)は、口縁に平行して沈線を描き、33は沈線の区画を描く。注口状把手の深鉢(34)は、扁平な注口状部分に沈線と竹管状刺突で施文する。沈線を描き縄文帯と無文帯を作る深鉢(37～45･46～50)は、37～42は横位で43～45は縦位である。49･50は沈線の区画を描く。

Ｂ類(60～63)は円環状の沈線区画を描くものである。60は波状部に橋状把手をもつ口縁で、沈線で施文している。62･63は地文の縄文は細かく、円環状の沈線区画と直線の沈潜を組み合わせている。

Ｃ類(58･59･64～69)は無文および条痕により仕上げるもので、無文の口縁部(58･59)は58が外傾、59が内傾である。条痕(64～70)は二枚貝の条痕による調整を行うものである。64～66は口縁部の破片であり、横位の条痕である。64･65は内外とも条痕である。

Ｄ類(35･36･51～57･70)はその他のものである。35･36は肥厚する口縁部分で、沈線内に刺突を行っている。54･55括れ部に横方向の沈線を描いている。56は細かい縄文である。57は平口縁の深鉢で、口縁端部が拡張し、円形の刺突を行う。70はＬＲ縄文である。

51～53は生駒西麓の胎土に沈線で縄文帯と無文帯を作っている。51は口縁部である。52は沈線が切り合い離れている

Ｅ類(71～74)は底部である。71～73は平底の底部である。71の体部には斜行する沈線がある。74は窪み底の底部である。

SD06（第22図　75　図版30）

SD06からは縄文土器鉢75が出土している。横位の二列の列点を施文している。

SD09（第22図　76　図版30）

SD09からは須恵器坏Ｇ蓋76が出土している。つまみを欠く。天井部には白緑色の自然釉がかかる。

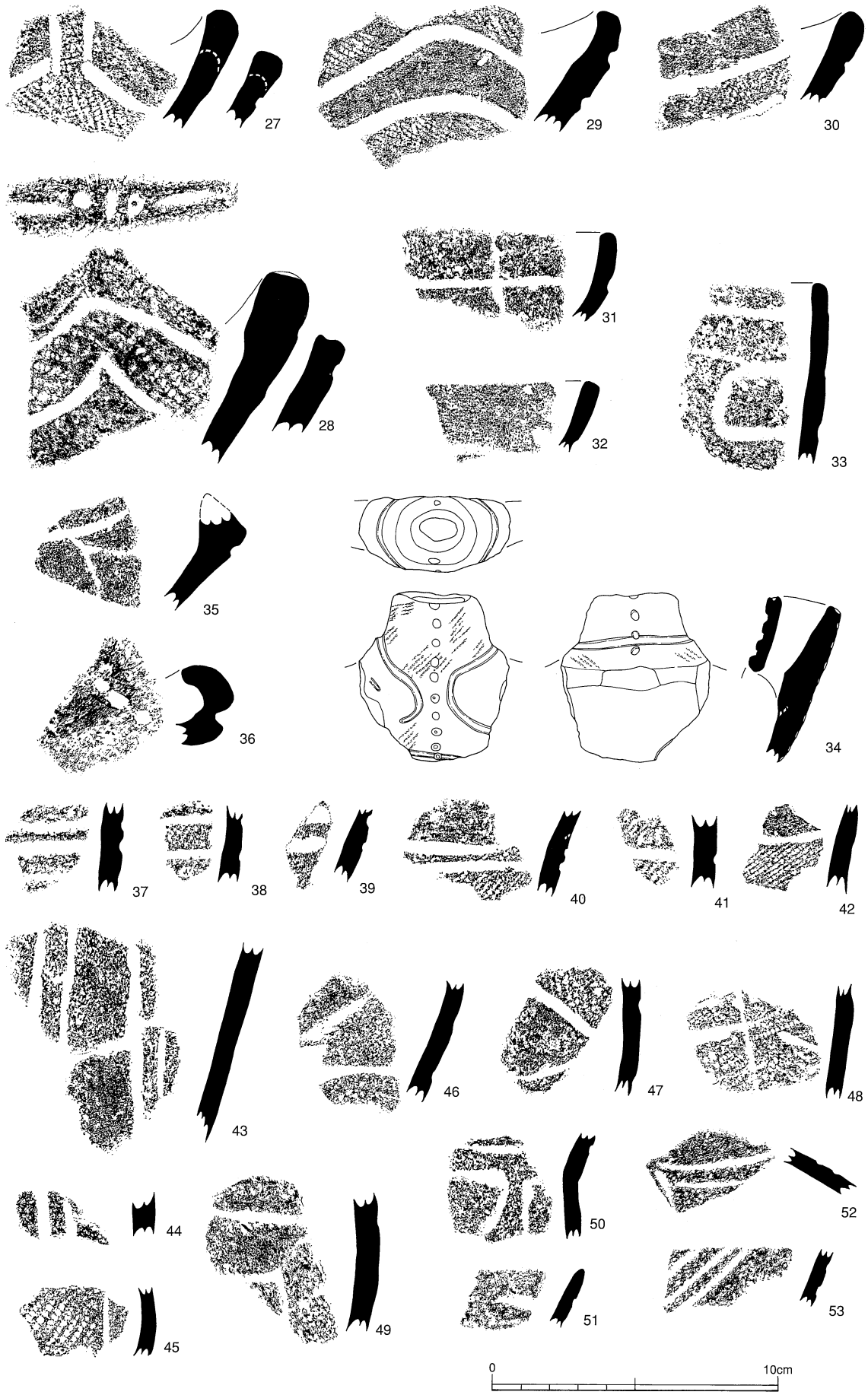
SD04（第23～30図　77～210　図版31～44）

SD04からは弥生時代後期の広口壺・長頸壺・細頸壺・短頸直口壺・甕・鉢・有孔鉢・高坏・器台、前期の壺、中期の壺・高坏・鉢、黒色土器椀、縄文土器が出土している。

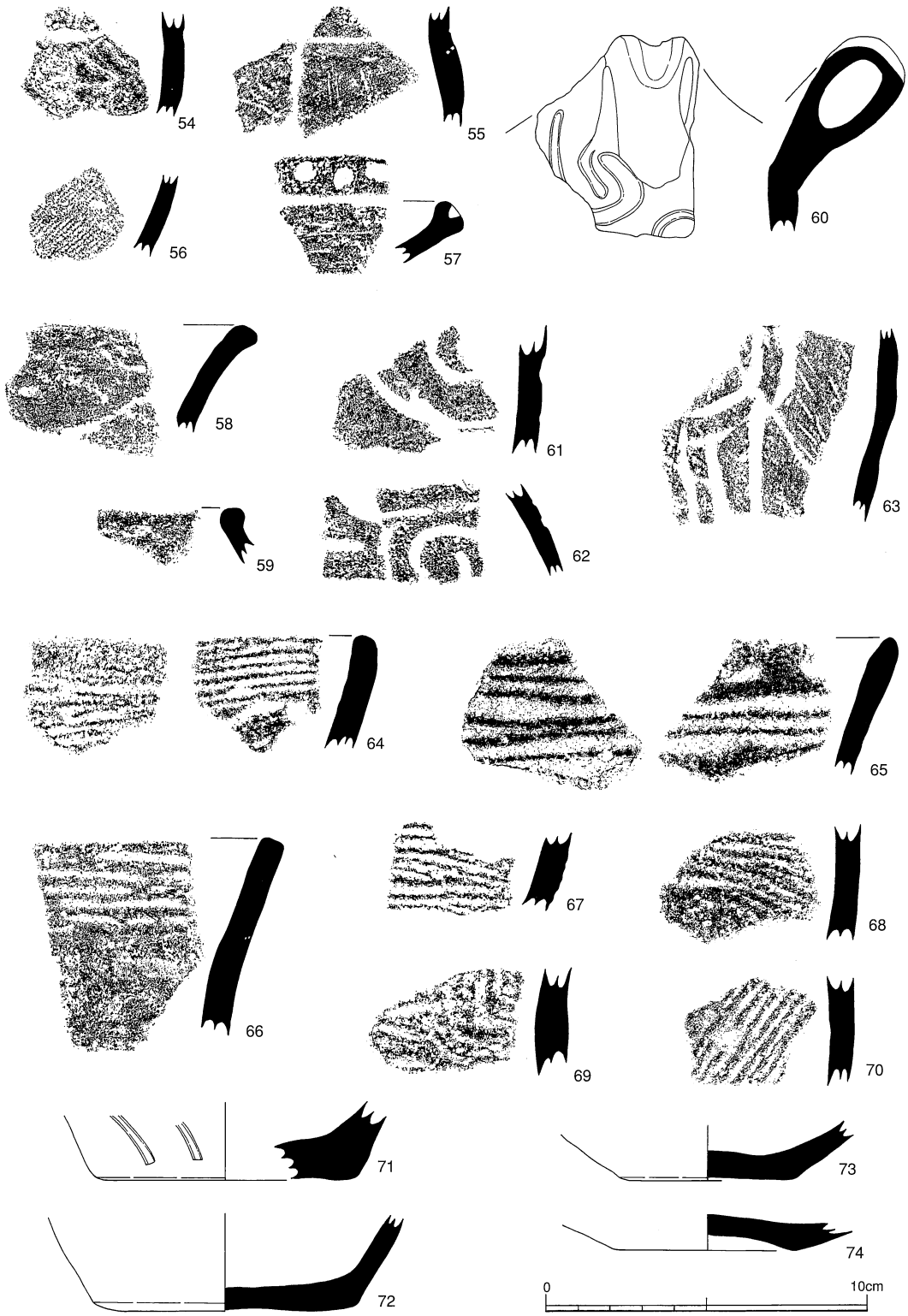
広口壺(77～122)は、形態・調整と胎土を基準として、広口壺Ａ・広口壺Ｂ・広口壺Ｃ・広口壺Ｄ・広口壺Ｅ・広口壺Ｆ・広口壺Ｇの７種類に分類した。

広口壺Ａ(77･79～83･85･86)は体部から外反する短い口頸部が付く。77の口縁内面に竹管刺突による記号文がある。79は体部上半をタタキ後ミガキの調整を行っている。80･81上方に拡張した口縁端部に凹線文をめぐらす。82の口縁端面には釦状円形浮文がある。83は口縁部を基準に図化したが、粘土紐積み上げの痕跡が斜行しているため、須恵器の平瓶などのように口縁部が斜行している可能性がある。体部は扁平である。85の口縁端面には竹管の施文がめぐる。86は体部上半に竹管刺突の記号文がある。

広口壺Ｂ(78･91)は長い頸部に外反する口縁部である。口縁端部は78が丸く、91は面を作る。広口壺Ｃ(84･87･88)は短く直立する頸部から外反する口縁部が付く。87は口縁端部に面を作る。88は頸体境に刻み目突帯がめぐる。広口壺Ｄ(89･90)は直立する頸部から外反する口縁部が付く。89は上下に拡張した口縁端部に凹線文をめぐらす。90は上方に拡張した口縁端部に凹線文がめぐる。



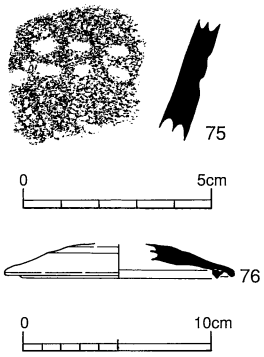
第20図　流路SD03出土土器１



第21図　流路SD03出土土器2

広口壺Ｅ(92～96)は鶏卵形の体部から直立気味の頸部が伸び、外傾する口縁が付く。92･93は頸部下端に爪形刺突の記号文がある。95･96の体部内面はケズリを行う。95の底部は平底、96の底部は丸底気味である。94～96は頸部下端に竹管刺突の記号文がある。全容がわかる95･96は対する二面に存在する。

広口壺Ｆ(97)は直立する口縁部である。広口壺Ｇ(98～101)は肩の張った体部から屈折して開く口頸



第22図　溝SD06・SD09
出土土器

部が付く。98は口縁部で、端部は面を作る。99は大形、100・101は小形である。98・99・101は角閃石を含みチャートを含まない生駒西麓の胎土である。

広口壺以外の壺は長頸壺・細頸壺・短頸直口壺がある。

長頸壺(102～104)は102・103共に口縁部を欠く。体部は球形で、102は外面ミガキ、103は外面ハケ調整である。104は外傾する口縁部である。細頸壺(105～107)は105が口縁直下に凹線文がめぐる。106は頸部で沈線文の間に列点文施す。器台の可能性もある。107は体部で頸部と底部を欠くが、わずかに扁平の球形である。短頸直口壺108は扁球状の体部に短い口頸部が付く。底部は突出している。外面に接地黒斑の痕跡を残さないが、内面に熾き溜り黒斑が残る。

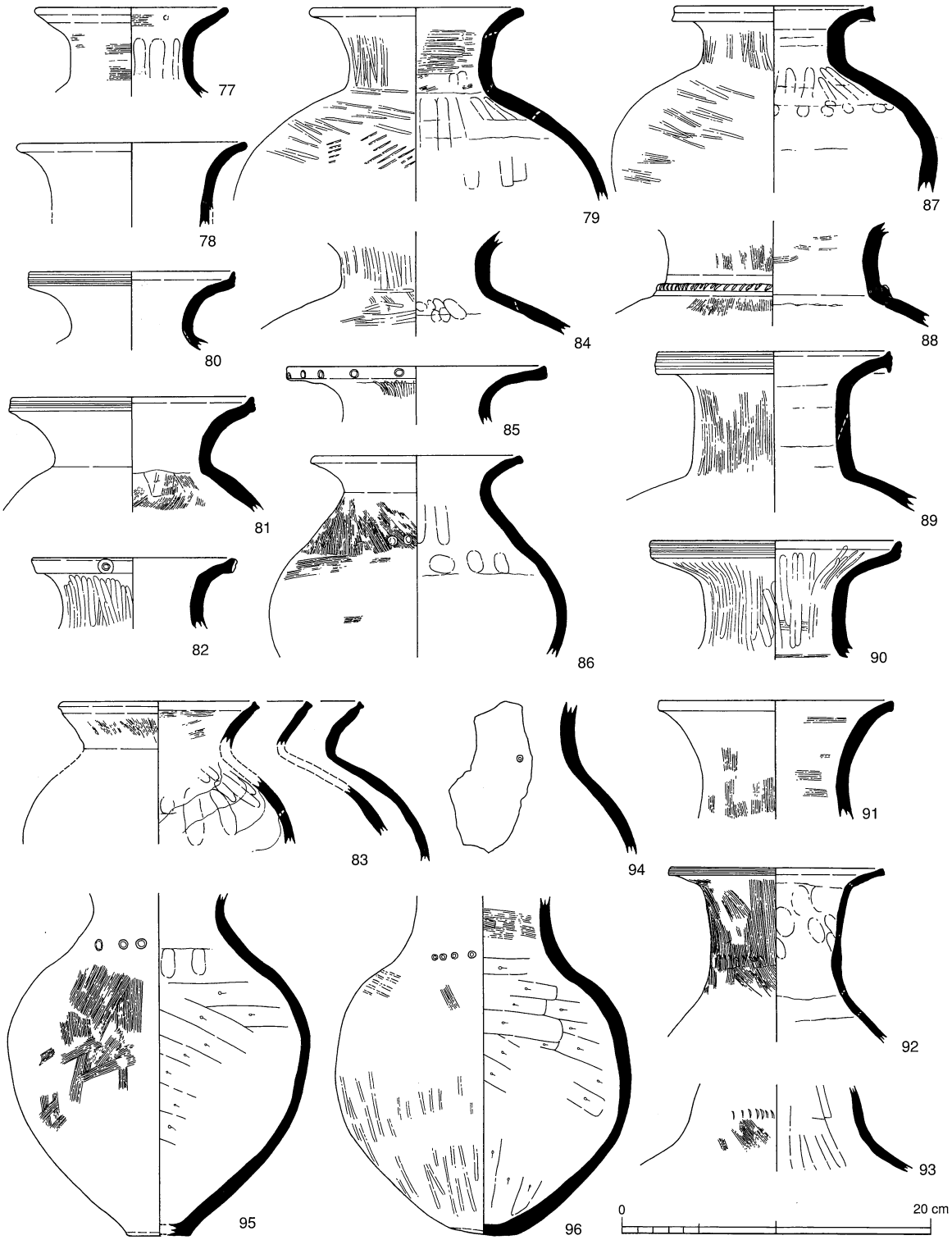
壺底部(109～122)は109がドーナツ状の底部で、体下半外面に煤が付着している。110・114～117・120は外面ミガキ調整である。119・121は外面ハケ調整である。122は外面タタキである。112・113は扁球形の体部である。114は外面のミガキが丁寧で、上げ底である。115は底部を絞って作っており、ドーナツ状である。116・117は底部が突出する。118・121はドーナツ状の底部である。119は外面ハケ調整でわずかに接地黒斑が残る。120は外面ミガキでドーナツ状の底部である。

甕(123～161)は、形態・調整と胎土を基準として、甕A・甕B・甕C・甕D・甕E・甕F・甕G・甕Hの８種類に分類した。

甕A(123～129)は頸部が屈折する形態的特徴と、外面が右上がりのタタキで内面上部が横ハケ調整あるいはナデ調整である。外面の調整の違いでタタキのみの甕Aa（123・125～127)とタタキに縦ハケ調整を加える甕Ab(124・128～129)とに細分できる。123は体部最大径が上半にあり、口縁端部は面を作る。内面底部に熾き溜まり黒斑が明瞭に残っている。125は軟らかい焼きである。126は内外面とも摩滅が著しい。127は口縁端部が拡張し、凹線文がめぐる。口縁内面の一部に黒斑が認められる。124は体部最大径が上半にあり、口縁端部は面を作る。肩部のみハケ調整を行う。128はやや球形で、最大径部分にハケを施す。内面は横方向の広葉樹原体のハケ調整を行う。外面に接地黒斑が、内面に熾き溜まり黒斑が残る。129は口縁部の接合のための指押さえ痕跡が残る。

甕B(130～139)は頸部が外反する形態的特徴と、外面が右上がりのタタキで内面上部が横ハケ調整あるいはナデ調整である。131の口縁端部には凹線がめぐる。132は外面最大径以下が煤で覆われており、口縁端部も火を受けて脆弱になっている。133は内面の火回りが悪く酸化しておらず暗灰色である。134・135のタタキはやや荒い。136は底部の一部に接地黒斑が残り、対応する内面に熾き溜まり黒斑が存在する。137は内面に3cm前後の粘土紐接合痕が残る。138は肩部が張り、タタキの下に粘土紐接合痕が残る。

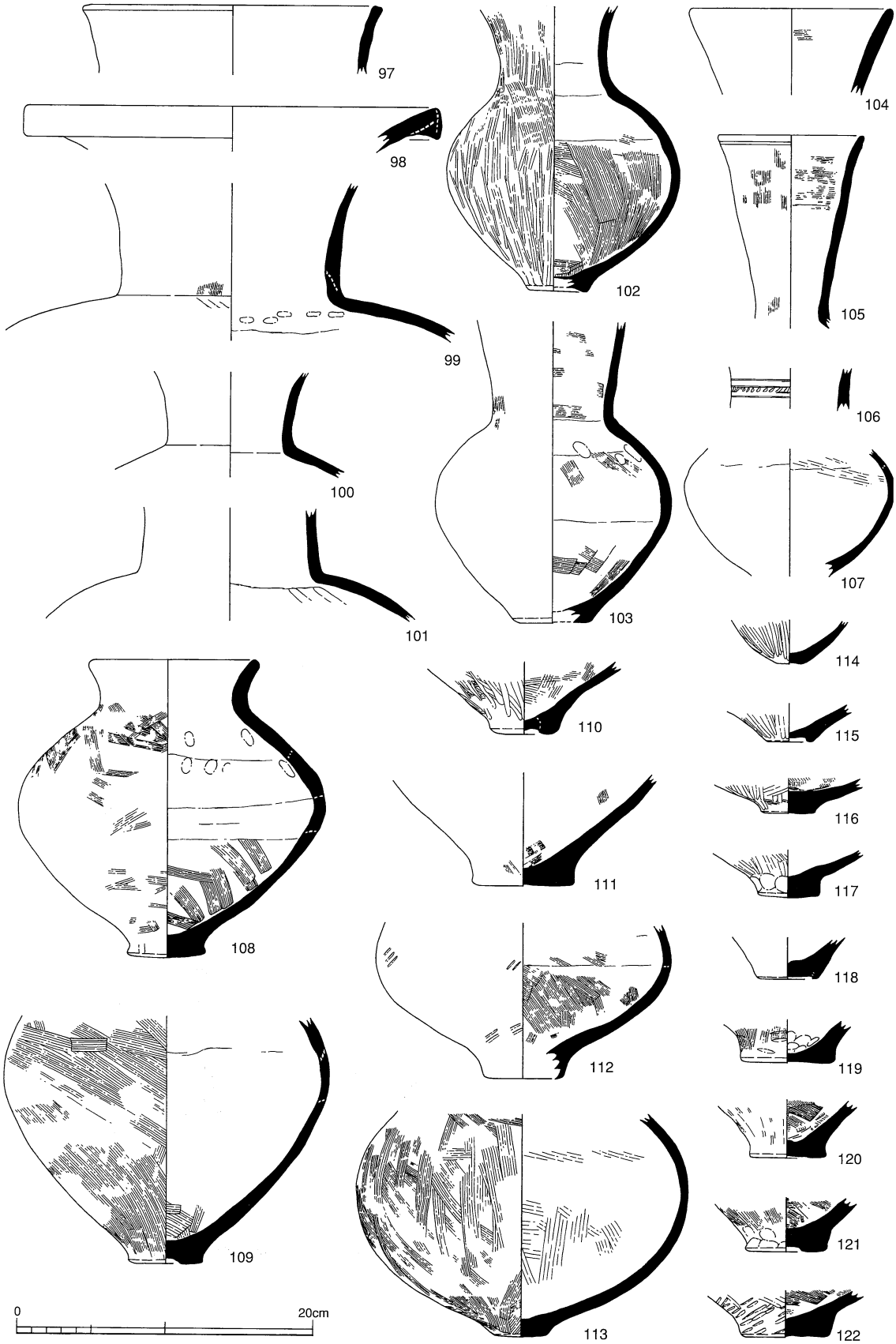
甕C(139)は頸部が外反する形態的特徴と、外面が右上がりのタタキである。体部は球形で底部はドーナツ底で小さい。器壁は厚く、タタキは荒い。甕D(142)は頸部が屈折する形態的特徴は甕Aと同じであるが、外面が左上がりのタタキで内面上部が縦ハケ調整である点は甕Aと異なる。甕E(144・145)は口縁端部が上方に延びる形態的特徴で、内外ともハケ調整である。甕F(146・147・148)は頸部が屈折する形態的特徴と、外面がハケ調整で内面がケズリ調整である。口縁端部は拡張し、凹線文がめぐる。内面のケズリは146・148が横方向、147は縦方向と横方向である。148の体部最大径部分に覆い接触黒斑が明瞭に残る。甕G(143)は体部最大径が上半にあり、外反する口縁部が付く。外面はタタキ後ハケ調整で内面は縦ケズリを行う。甕H(140・141)は頸部が屈折する形態的特徴および外面が右上がりのタタキで内面上部が横ハケ調整である点は甕Aと同じであるが、胎土が角閃石を含みチャートを含まない生駒



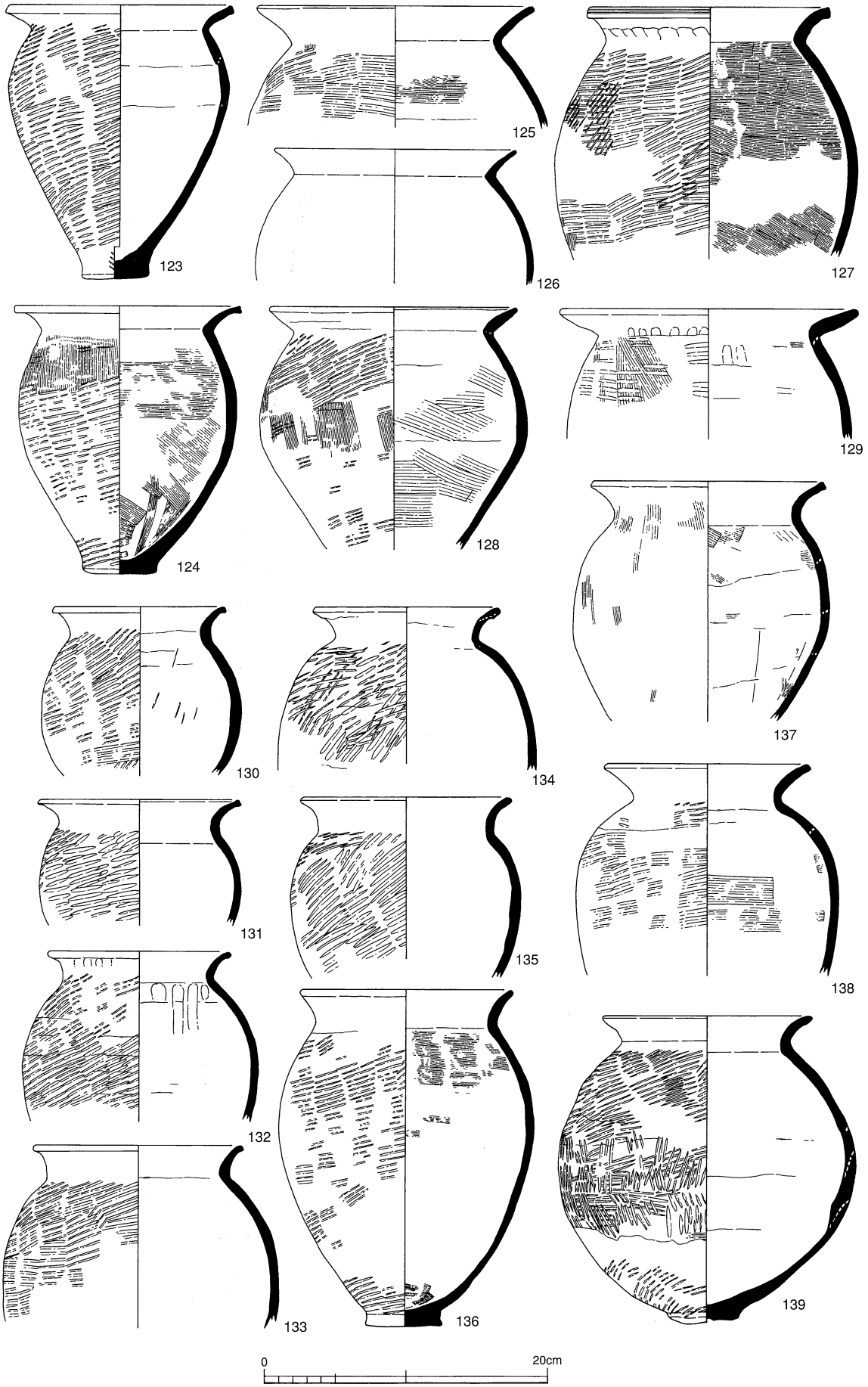
第23図　溝SD04出土土器1

西麓の特徴を示す。141は口縁端部に凹線がめぐる。

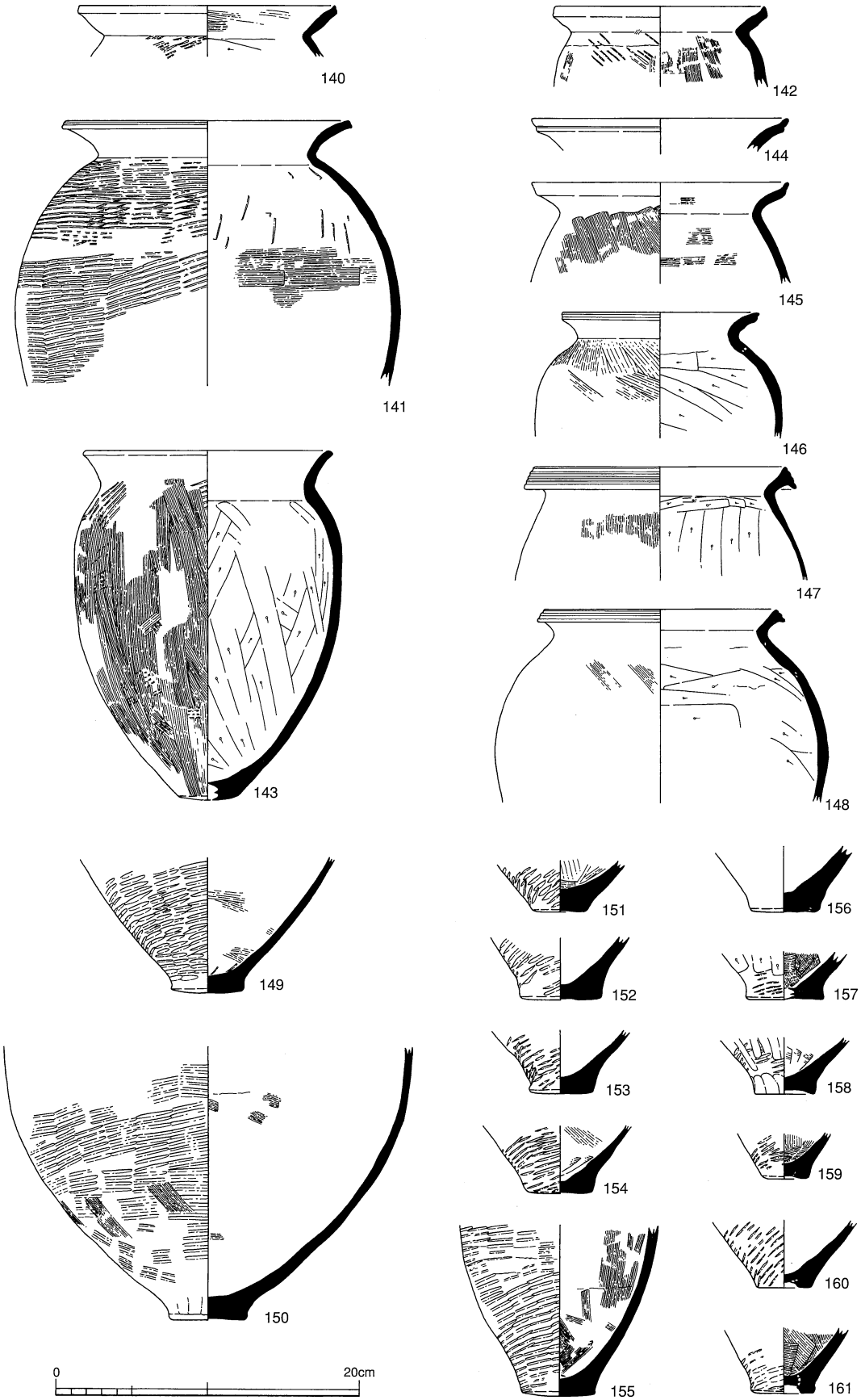
底部(149～161)は156を除いて外面をタタキで仕上げているが、157･158は一部削っている。149は底部やや上に煤酸化部が残り、内面の対応する部分におこげの痕跡が残る。151は内面の火回りが悪く酸化せず暗灰色である。154･159は内面を簾状ハケ調整している。155･157は底部内面に熾き溜まり黒斑が



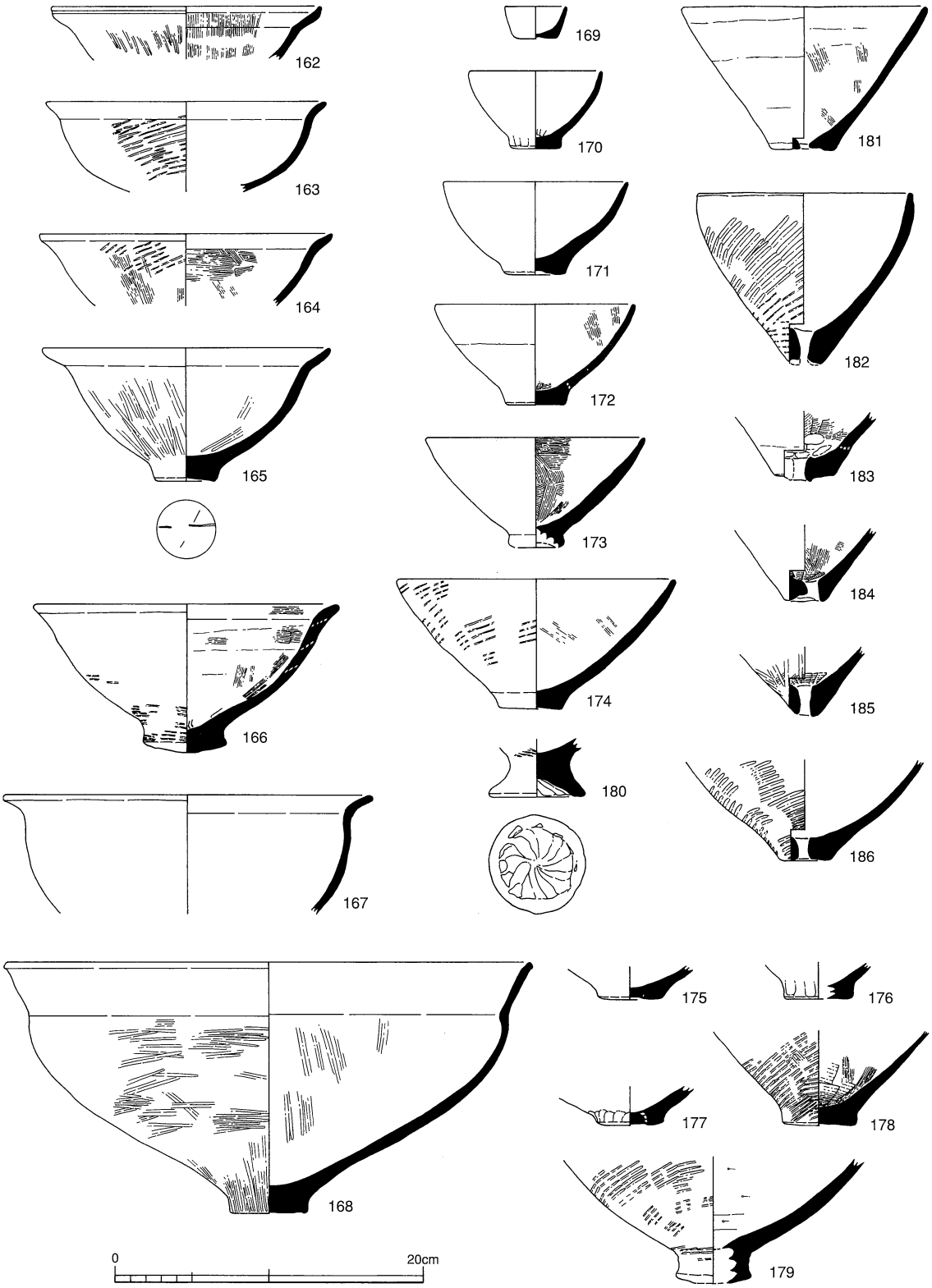
第24図　溝SD04出土土器2



第25図　溝SD04出土土器3



第26図　溝SD04出土土器4

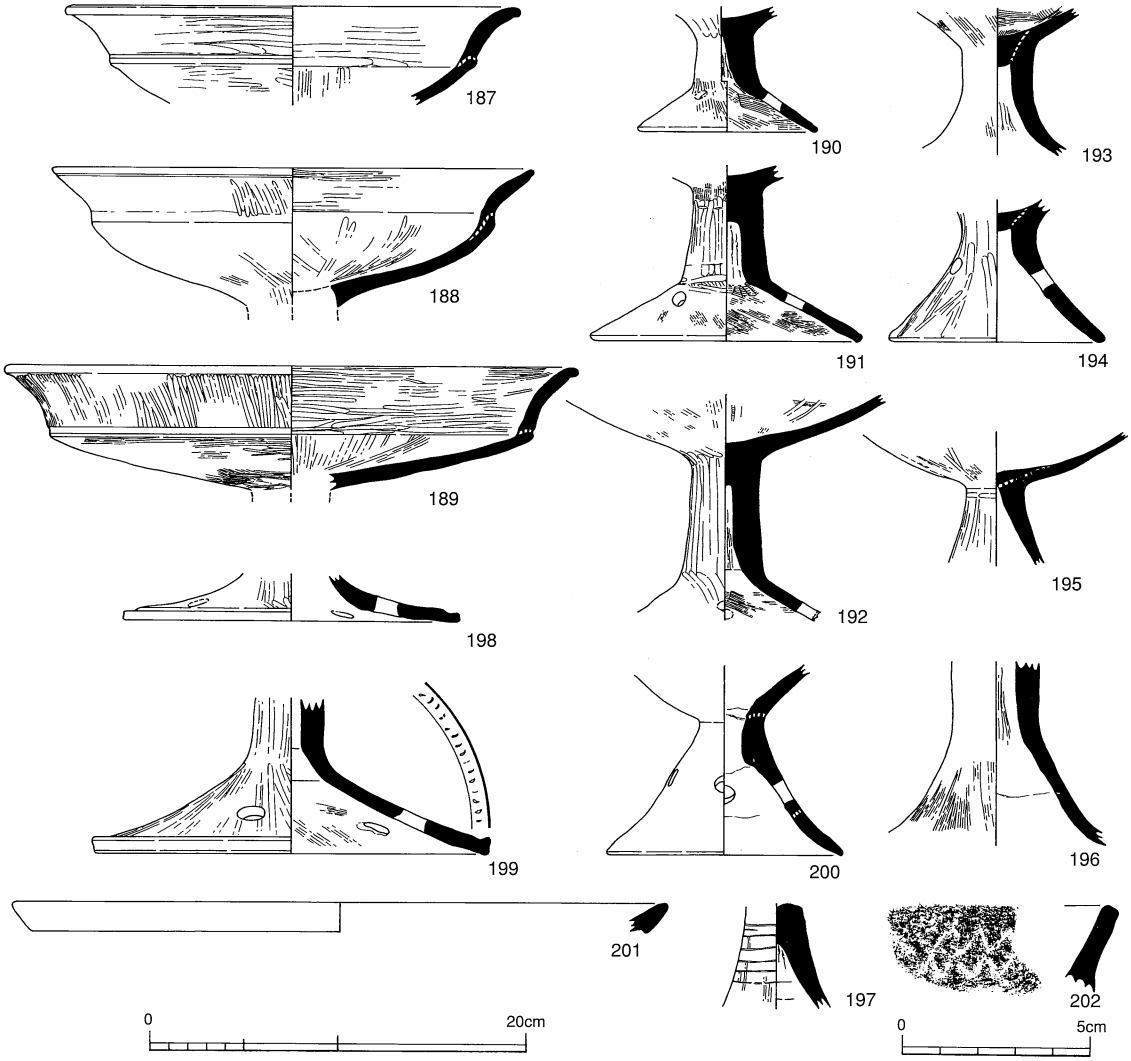


第27図　溝SD04出土土器5

明瞭に残る。156は底部に木葉様の圧痕が残る。158は上底である。160･161はドーナツ状の底部である。160は底部から体部にかけて斜めに接地黒斑が明瞭に残る。

鉢(162～180)は形態を基準として、鉢A・鉢B・鉢C・鉢Dの4種類に分類した。

鉢A(162～167)は口縁部が外反する中形のもので、162･165はミガキにより仕上げており、162は口縁



第28図　溝SD04出土土器６

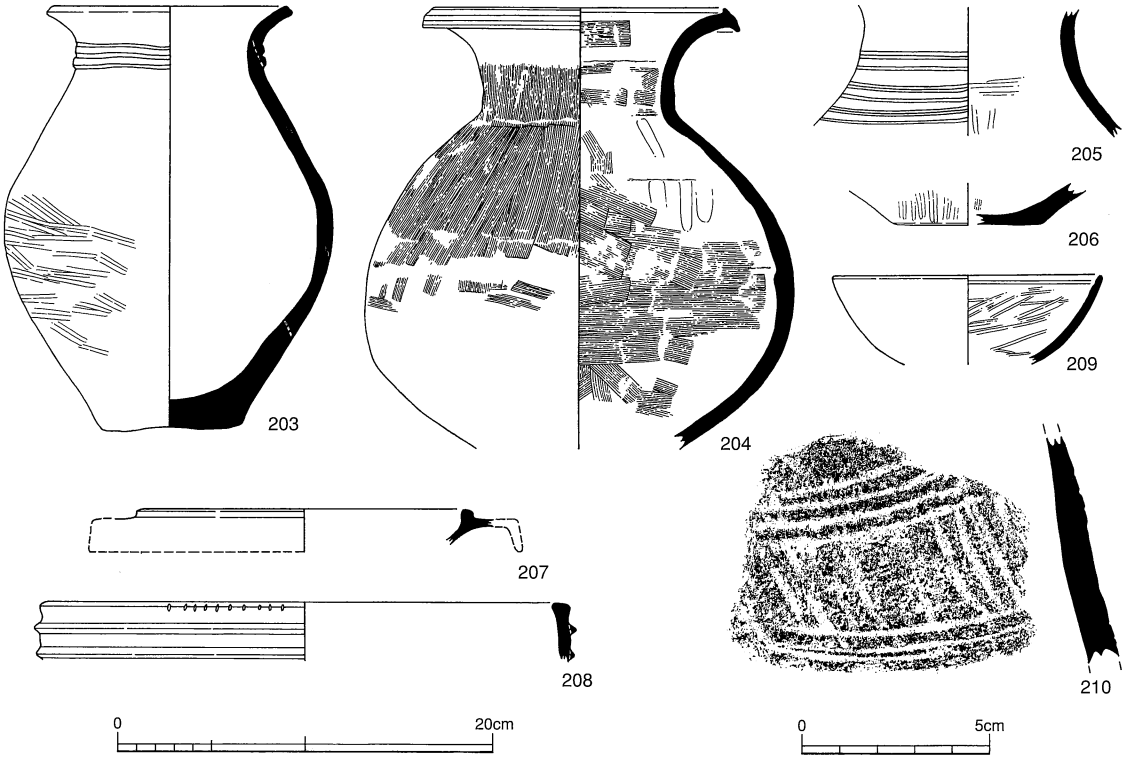
端部に沈線をめぐらし、165は底部にヘラによる「×」の記号がある。163･164はタタキにより整形する。166は突出した底部で、全体的に器壁が厚い。167は半球形の体部である。鉢Ｂ(168)は口縁部が外反する大形のもので、ミガキで仕上げている。体部から口縁部にかけて焼け爆ぜている。鉢Ｃ(170～174)は口縁部が直線的開くもので、170～173は小形、174は中形である。173のみ突出した底部を作る。174はタタキにより整形しており、底部を含む体部の約半分および口縁部の一部に接地黒斑の痕跡が残る。鉢Ｄ(169)は極小形のもので、手づくねで作っている。

鉢底部(175～180)は175･177がドーナツ底であり、179は突出した底部を作る。178･179はタタキにより整形する。180は脚台状に指調整により作り出す。

有孔鉢(181～186)は、形態・調整を基準として、有孔鉢Ａ・有孔鉢Ｂの２種類に分類した。

有孔鉢Ａ(181)は口縁部が直線的開き、平底の底部に一孔を穿っている。調整は粘土紐の接合痕跡を残すナデ調整である。有孔鉢Ｂ(182)は口縁部が内弯ぎみで、尖底の底部に一孔を穿つ。調整は右上がりのタタキ調整である。底部のみの183～186は、183･184が有孔鉢Ａで、185･186が有孔鉢Ｂであると考えられる。

高坏(187～199)は全容が判明するものは存在しない。外反する坏部のみのもの(187～189)と、接合部から脚部のもの(190･191･194)と、接合部のみのもの(192･193･195)と、脚柱状部のみのもの(196･197)



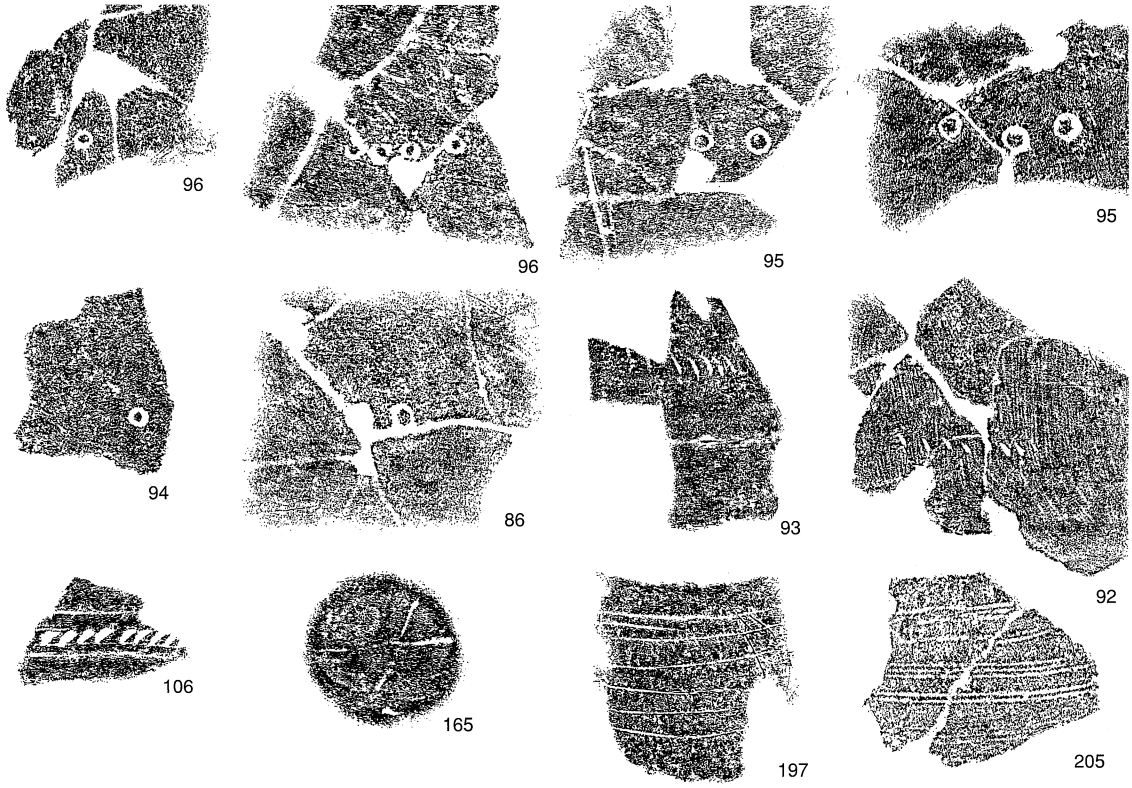
第29図　溝SD04出土土器7

と、脚裾部のみのもの(198･199)とがある。坏部内面の調整は共通して、口縁部が横ミガキ、底部が放射状ミガキであるが、外面はそれぞれ異なる。187は口縁部・体部ともに横ミガキであり、188は口縁部・体部ともに縦ミガキであり、189は口縁部が横ミガキ、体部が縦ミガキである。口縁端部は187･189が外反して丸く仕上げており、188は上方に向かって丸く仕上る。接合部から脚部の190・191は脚部が屈折している。接合部から脚部の194は直線的に開いている。脚柱状部のみの196は屈曲せずに開き、ハケ調整で仕上げている。脚柱状部のみの197は６条以上のヘラによる沈線が施す。接合部のみの192は柱状部が長く、裾部に４箇所の円孔を穿つ。接合部のみの193は外反する脚部である。接合部のみの195は脚部に坏部を貼り付けて円盤充填する。脚裾部のみの198は裾部に凹線をめぐらし、推定６個の透孔を穿つ。脚裾部のみの199は柱状部から屈折して裾部が付く。端部は面を作り、裾部に爪形文を付けた凹線文がめぐる。６個の透孔を穿つ。

器台(200～202)は、200が小形の器台で体部と脚部が屈折する。脚部は直線的に開き、201･202は大形の器台で口縁部のみの破片であるが、201は口縁端部を拡張させ、202は口縁端部を大きく外反させ櫛描の波状文を施す。

弥生前期壺203は縦長の体部に短く外反する口縁部が付く。頸部には２条の削出し突帯をめぐらす。全体的に器壁は厚く、大き目の砂粒を含む。底部に達しない胴下半に接地黒斑の痕跡が残る。

弥生中期壺(204～206)は、204が底部を欠くがほぼ全容がわかる。球形の体部に外反する口頸部が付く。口縁端部は上下に拡張して凹線文を施す。体部は無文で外面の調整は縦方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整で仕上げる。過半に煤が付着する。205は壺の頸部から体部上半にかけての破片で５本のクシを３帯以上施している。206は壺底部で外面は縦ミガキの痕跡がよく残っている。底部から体部にかけて接地黒斑が残る。弥生中期高坏207は水平口縁高坏の内突帯の部分である。弥生中期鉢208は内傾する口縁直下に２条の突帯を貼り付け、口縁に刻みを付ける。



第30図　溝SD04出土土器拓影

黒色土器椀209は底部を欠いており、内面と外面の口唇部分のみ黒い。内面の口縁直下には一条の沈線がめぐり、よく磨いている。

縄文土器210は深浅縄文を地文として、半裁竹管による連弧文を施している。船元Ⅳ式である。

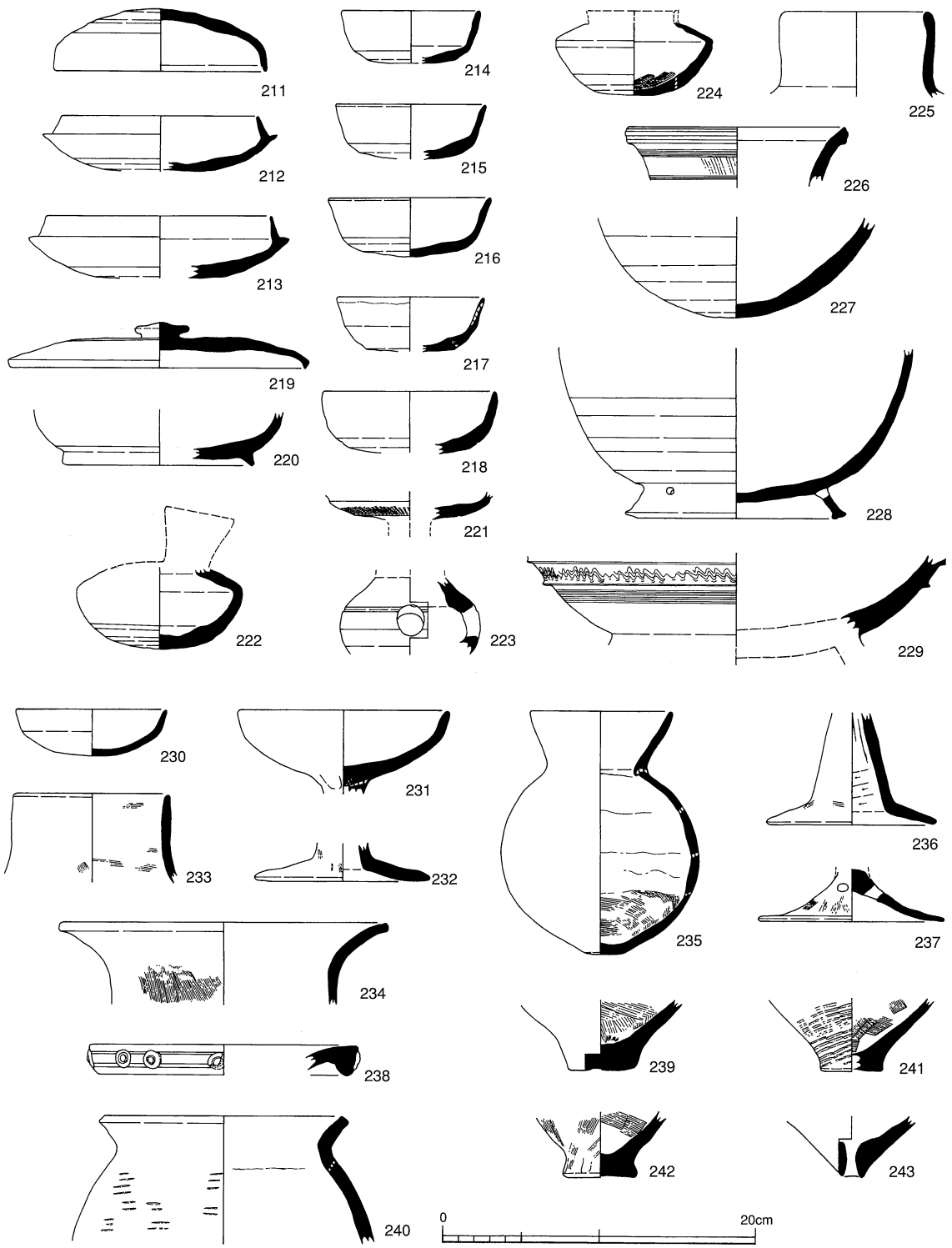
SD05（第31図　211～243　図版30・45～47）

SD05からは古墳時代後期を中心として、古墳時代前期と弥生時代後期の土器が出土している。

古墳時代後期の土器は須恵器(211～229)と土師器(230～234)がある。須恵器には坏H蓋(211)・坏H(212･213)・坏G(214～217)・坏Ⅰ(218)・坏B蓋(219)・坏B(220)・高坏(221)・平瓶(222)・瑳(223)・短頸壺(224)・直口壺(225)・広口壺(226)・壺(227)・脚付有蓋短頸壺(228)・器台(229)がある。

坏H蓋211は口縁部と天井部の境に稜はなく、天井部は右回転のケズリである。口縁端部には内傾する段が存在する。坏H212・213は口縁端部を鋭く作っている。坏G214～217の底部は右回転ロクロのヘラ切である。坏Ⅰ218はやや厚手で底部は回転ヘラ切である。坏B蓋219は口縁端部を短く折り曲げている。扁平のつまみが付く。坏B220は丸い腰部に断面三角形の高台を貼り付ける。高坏221は坏部下半の破片で、櫛描の列点文を施している。平瓶222は口頸部を欠くが、口頸部のわずかな剥離痕跡と焼成時の降灰の位置により小形の平瓶であることがわかる。体部径10.6cmを測る。底部は回転のケズリで仕上げている。瑳223は球形の体部の破片で底部及び頸部以上を欠く。沈線直下の最大径部分に注口をあけている。短頸壺224は口頸部を欠き、体部は扁平で肩が張っている。直口壺225は直立した口頸部のみの破片である。

広口壺226は口頸部の破片で、口縁部は拡張し、頸部は一部カキメを行っている。壺227の底部は回転ケズリを行っている。脚付有蓋短頸壺228は体部下半の破片であるが、大形の短頸壺である。底部には外傾する短い脚台を貼り付け、紐孔を３箇所あけている。丁寧なつくりで、自然釉が流れている。



第31図　溝SD05出土土器

器台229は台部下半の破片で、突帯の間を太い櫛描の波状文で埋めている。

土師器には坏(230)・高坏(231･232)・壺(233)・甕(234)がある。坏230は全体に薄く、底部は丸い。高坏231は椀形の坏部で脚部が剥がれた痕跡がある。高坏232は脚裾部の破片で、脚柱部から裾部にかけて屈曲する。壺233は直口する口頸部の破片である。甕234は口頸部の破片で、大きく外反している。体部は縦ハケ調整で口縁部はヨコナデで仕上げる。

古墳時代前期の土師器は壺(235)と高坏(236･237)がある。壺235は小さい平底の底部を持つ球形の小形の壺で、直線的に外傾する口頸部をもつ。高坏236は脚部の破片で、脚柱部から裾部にかけて屈曲している。高坏237は大きく開く低い脚部に３箇所の円孔を穿つ。

弥生時代後期の土器は壺(238･239)・甕(240～242)・有孔鉢(243)がある。

壺238は広口壺の口縁部下方に拡張した端面に２条の凹線がめぐり、間に円形浮文を貼り付ける。壺239は底部である。甕240は口縁端部に面をもつ。甕底部(241･242)は、241がタタキで、242はハケで仕上げている。有孔鉢243は尖底の底部に１孔をあける。

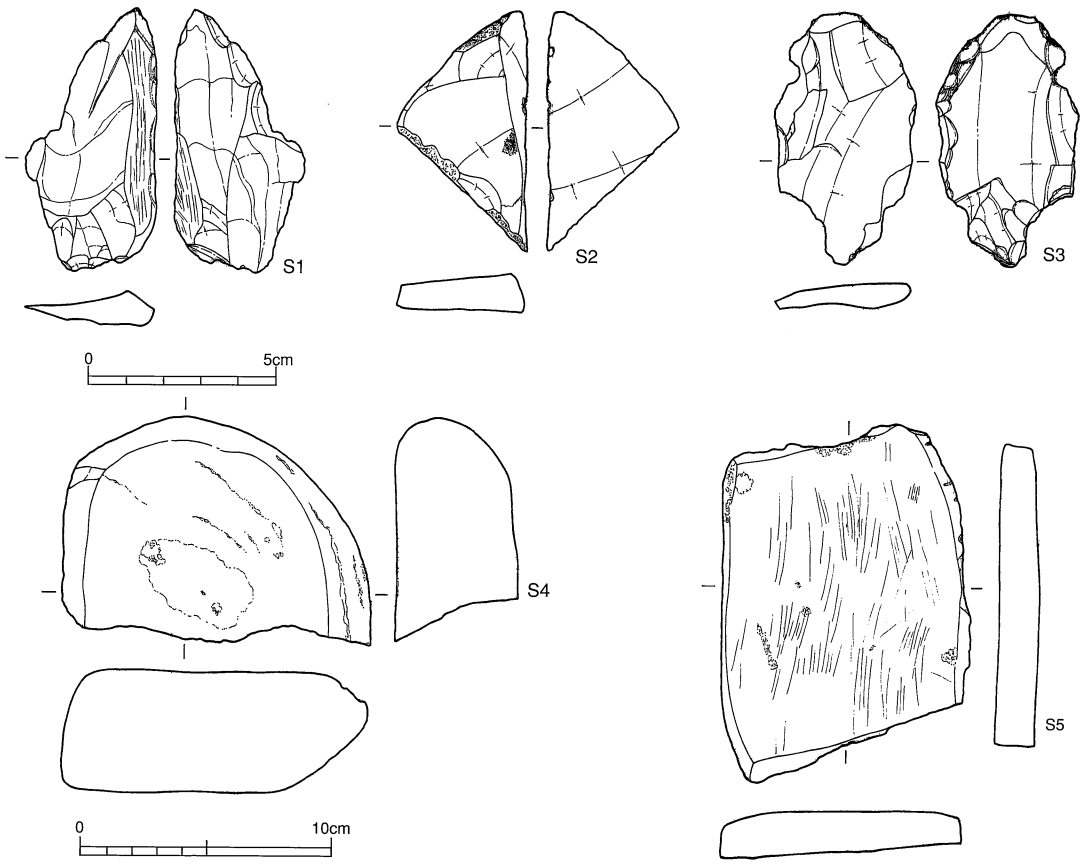
石器（第32図Ｓ１～Ｓ５　図版48）

Ｓ１は、SD03の上層より出土した、器種不明の磨製石器断片である。黒灰色の緻密な粘板岩を用いており、石器断面ではその葉理がよく観察される。左図の右側縁から右図左側縁にかけて研磨痕が認められ、中でも図に示した部位では顕著な光沢を見せる。すべての剥離痕が研磨面を切っていることから、磨製石器の再利用を試みたものと思われるが、本来の器種を示す特徴を見出すことができない。

Ｓ２は、SD03の埋土上層より出土した。讃岐産サヌカイトの特徴が、顕著に認められる剥片である。厚手剥片が折れたものであり、背腹面いずれの剥離面も、打面・打点をとどめていない。その性状から、素材として持ち込まれたものと推察される。剥片末端部には、気泡状の自然面をとどめている。

Ｓ３は、SD04より出土した、石包丁である。黄灰色を呈する、やや粗質の粘板岩を用いており、わずかに１孔の一部をとどめている。器表面は淡い黄灰色を呈しており、石材は軟質である。背面側左右側縁に見られる剥離痕は、新しい欠損である。

Ｓ４は、SD05の４区より出土した、台石である。平坦な面をもつ河川礫（石材不明）を用いており、



第32図　B地区出土石器

平坦面中央付近にわずかな打撃痕が認められる。また、この面全体が他の面と比較してやや平滑な印象を受けることから、石皿ないしは砥石的な使用がなされた可能性も考慮される。

Ｓ5は、SD05の３区より出土した、細粒～中粒砂岩製の砥石である。研磨に伴う擦痕をよくとどめており、中央部はわずかに凹んでいる。裏面は、葉理に沿って剥落したものであろう。

４．小結

Ｂ地区では縄文時代の流路、弥生時代の溝、古墳時代の溝、飛鳥時代の溝、奈良時代の掘立柱建物を検出した。

縄文時代の流路SD03はＣ地区のSD03と同一であり、中期後葉の62･63、中津式の27～36･57･65、後期前半の67･71、元住山Ｉ式前後の74があり、後期前葉を中心として中期後葉から後期中葉までの遺物が出土している。弥生時代の溝SD04は縄文時代中期の210、弥生時代前期の203、弥生時代中期の204～208、弥生時代後期前葉の147・148、庄内期並行の139などあるが、中心は後期中葉から後葉である。遺物量が多いことから、付近に居住域が存在した可能性が高い。SD05は弥生時代後期と古墳時代前期、古墳時代後期、飛鳥時代の土器が出土しており、Ｄ地区のSD107とつながる。SD08・SD09は飛鳥時代に位置づけられる。掘立柱建物SB03から、遺物は出土していないが、柱掘形の形状などからSD04と同様に奈良時代前後の可能性が考えられる。

第４節　Ｃ地区

１．概要（第33・34図　図版10～12）

Ｂ地区の水路を挟んで東側に位置する三角形の調査区である。面積は57㎡を測る。東側は大阪府、南側は市道である。

約30cmの耕作土および床土を除去すると遺物包含層はほとんどなく、遺構検出面となる。遺構検出面はほぼ同一の３面を検出した。中世から縄文時代にかけての遺構を検出し、重複は著しい。遺構の残存状況は極めて浅く、削平が著しい。

２．遺構（第33図）

SD03（第33図　図版51）

Ｃ地区のほぼ中央に位置し、Ｂ地区のSD03から続いており、南東側は調査区外に延びている。幅5.5m程度、深さ0.4m～0.5mで、底部の凹凸は著しい。遺物は縄文後期初頭を中心に中期末から縁帯文の縄文土器が出土している。

SD29（第33図　図版51）

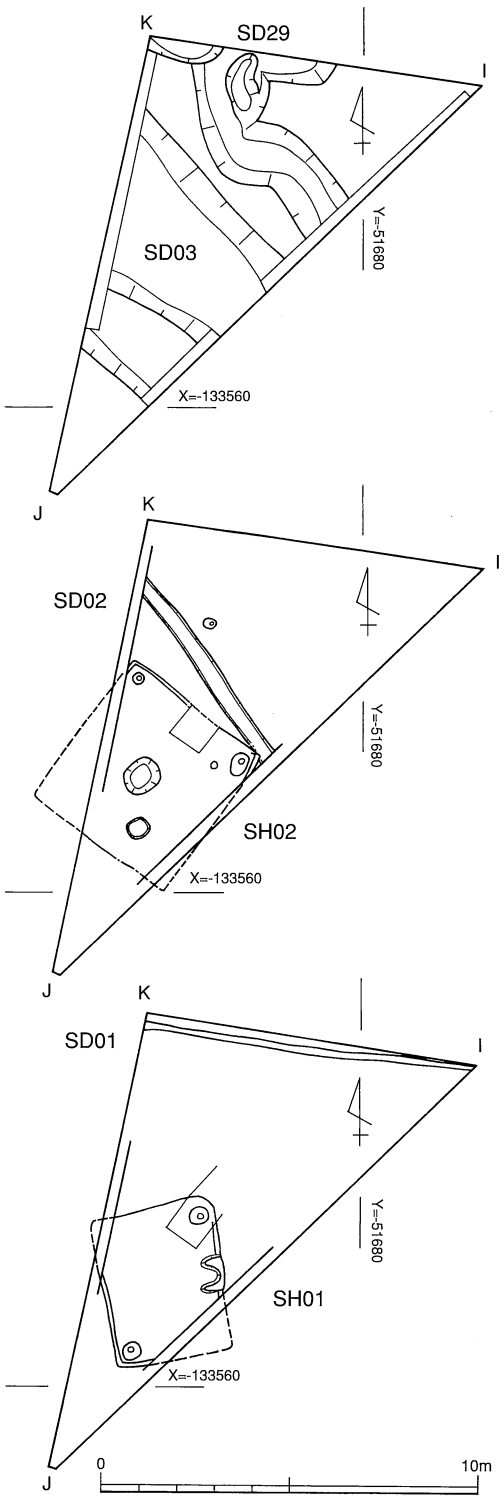
SD03の北東側に位置して、蛇行して流れている。幅1.5m、深さ0.3m前後である。遺物は出土していない。

SD01（第33図）

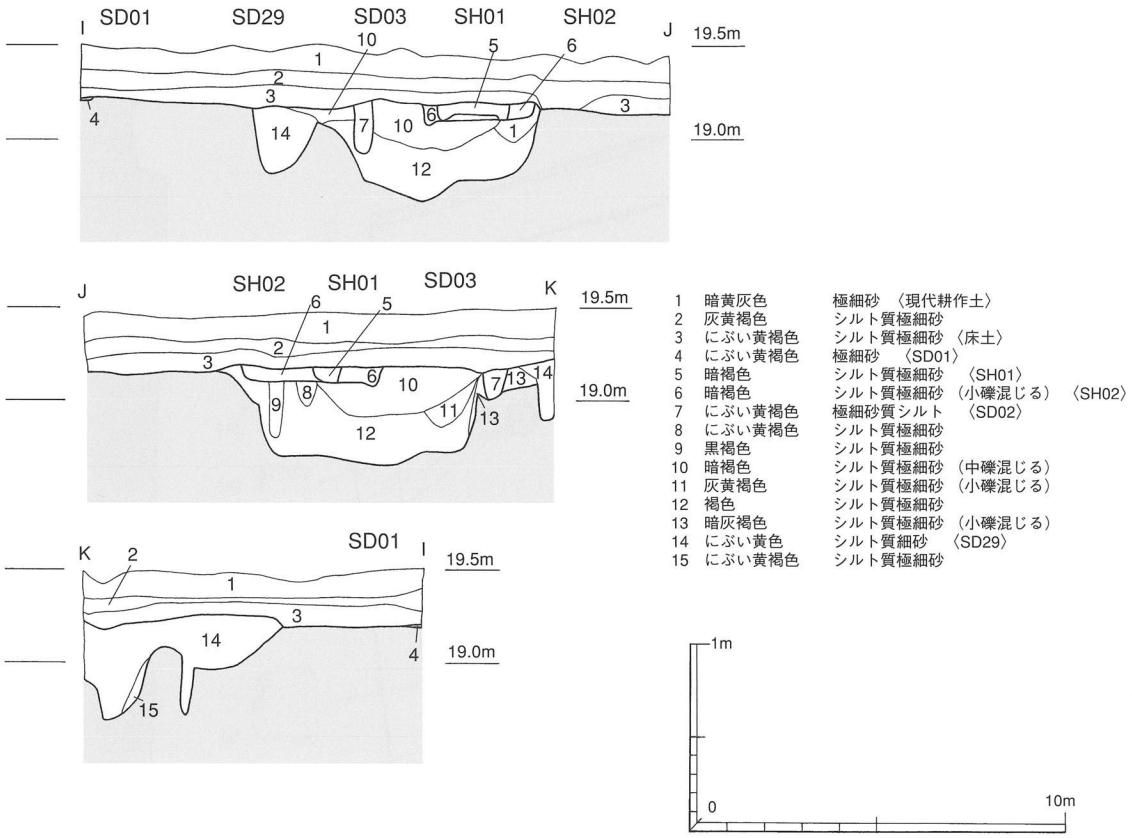
Ｃ地区の北端に位置する直線の溝で、北から82°西に振っている。幅0.2m前後、深さ0.05m前後である。検出面と埋土の状況から比較的新しく、耕作に伴うものと考えられる。遺物は出土していない。

SH02（第35図　図版49）

Ｃ地区のほぼ中央に位置する竪穴住居で、SD03を切り、SH02にほぼ重複して切られている。建物の南西部分と南東部分は調査区外にはみ出ている。平面形は東西4.30m、南北4.45mの方形で、主軸方向は北から西に52°振っている。壁の立ち上がりは削平のため0.05mと非常に浅く、床面の標高は19.05mである。床面積は復原推定19.1㎡である。屋内施設は中央土坑・土



第33図　Ｃ地区平面



第34図　Ｃ地区壁土層

坑・周壁溝・主柱穴がある。

中央土坑はほぼ中央に位置し、南北1.05m、東西0.6mの楕円形で、深さ0.1mである。埋土は暗褐色礫とシルト混じり極細砂から細砂である。土坑は南東部に位置し、直径0.65m、深さ0.08mである。埋土は灰褐色のシルト質極細砂から細砂である。周壁溝は北西部分と北東部分の一部で認められたが、南側では検出できなかった。幅10cm、深さ3cm前後と浅い。主柱穴は北西（P201）と北東（P202）の隅で２本を確認している。南西および南東の柱は調査区外のため確認できなかった。P201は直径32cmの掘形に12cmの柱痕跡が残る。P202は60cm、43cmの楕円形の掘形に18cmの柱痕跡が残る。

遺物は北西部分の床面から土師器甕が、北東部分の床面から土師器壺が、南東部分の床面から土師器椀と台石が出土した。P202の掘形内から土師器高坏と甕が、P203から土師器高坏と甕が出土した。

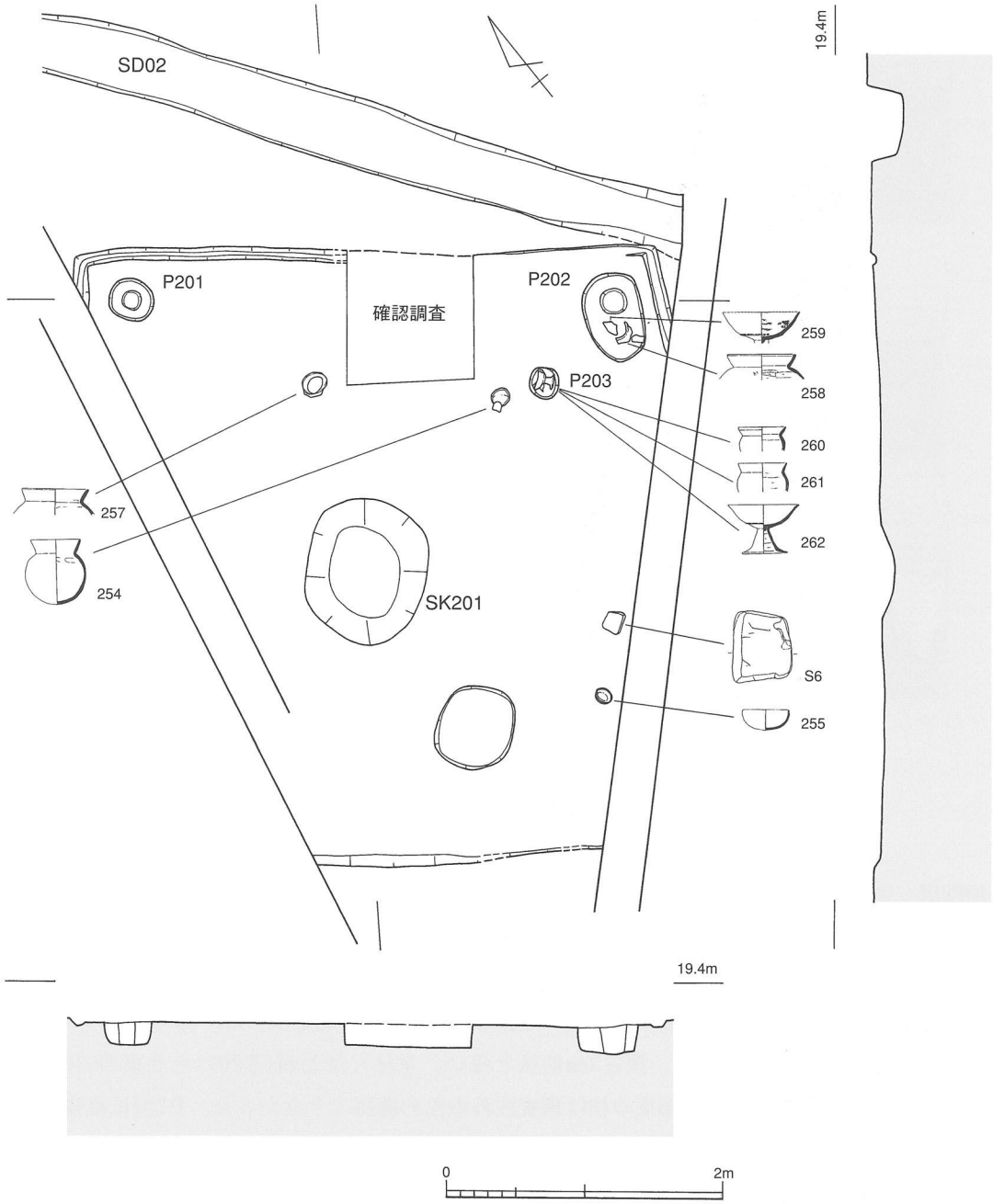
SD02（第33図　図版51）

SH02の北東側に位置し、Ｂ地区から直線的に続く溝で、北から西に35°振っている。幅0.4m、深さ0.25m程度である。埋土は極細砂質シルトである。遺物は出土していない。

SH01（第36・37図　図版50）

Ｃ地区のほぼ中央に位置する竪穴住居で、SH02を切っている。建物の北西角と南東角は調査区外にはみ出ている。平面形は東西4.0m、南北3.1mの長方形で、竈の取り付く壁の主軸方向は北から西に５°振っている。壁の立ち上がりは削平のため0.03mと非常に浅く、床面の標高は19.1mである。床面積は復原推定12.4㎡である。屋内施設は竈・周壁溝・主柱穴がある。

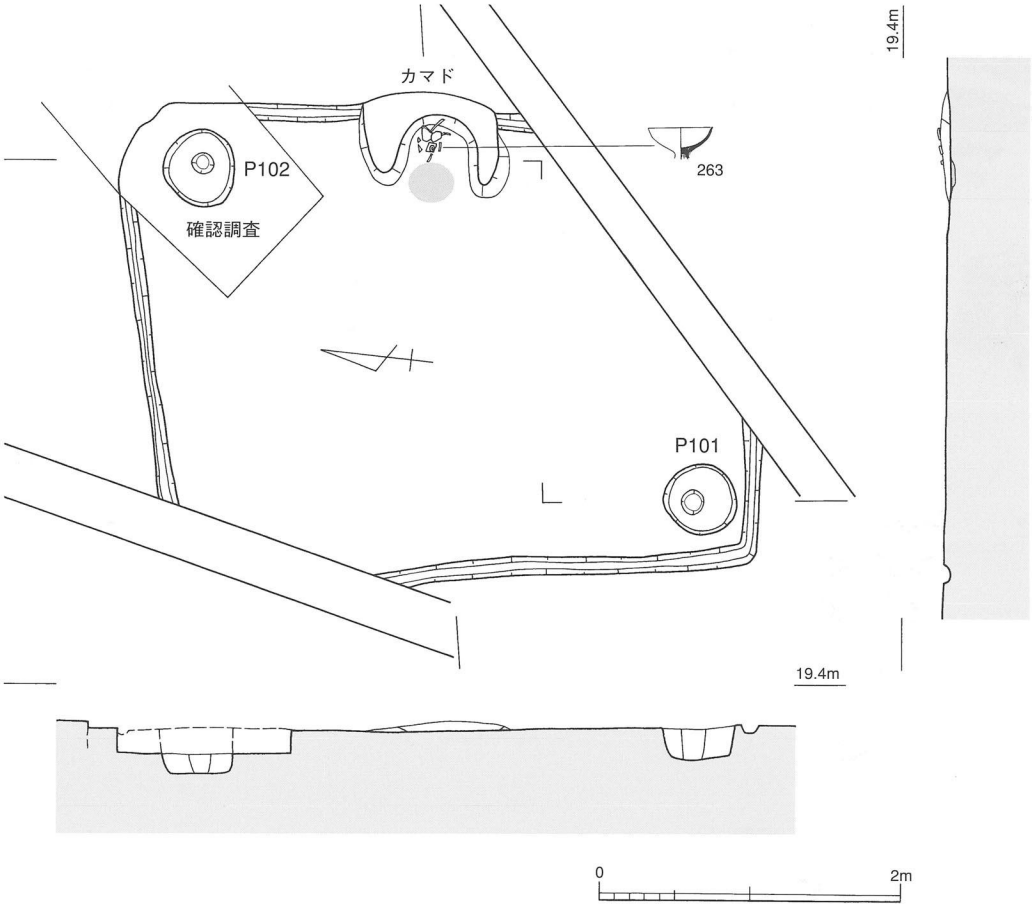
北壁中央には竈が作りつけられているが、残りが悪く、一部しか残っていない。焚口部分の床面は非常によく焼けており、直径25cm、深さ２cmの部分が赤変している。周壁溝は幅12cm前後、深さ４cmある



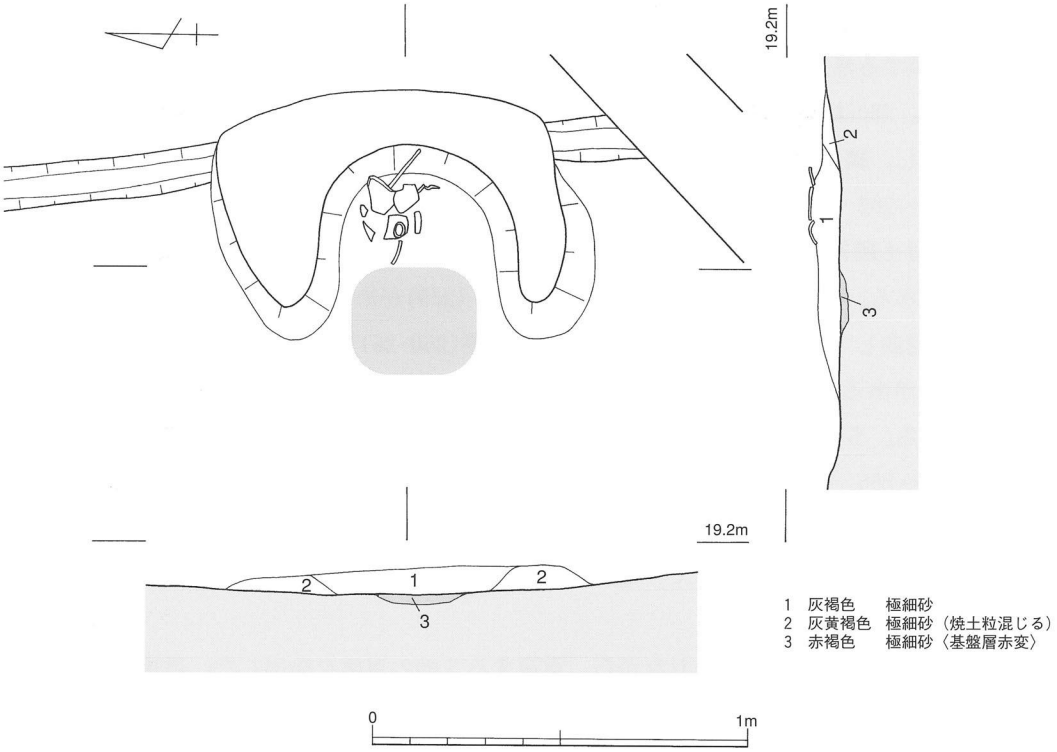
第35図　竪穴住居SH02

が削平されていると考えられる。主柱穴は南西（P101）と北東（P102）の隅で２本を確認している。北西隅は側溝で、南東隅は調査区外のため確認できなかった。規模はP101が直径46cm、深さ20cmの掘形に直径15cmの柱痕跡が残る。P102は直径47cm、推定深さ26cmの掘形に直径14cmの柱痕跡が残る。

遺物は竈内から土師器高坏が、床面から製塩土器、須恵器甕が出土している。

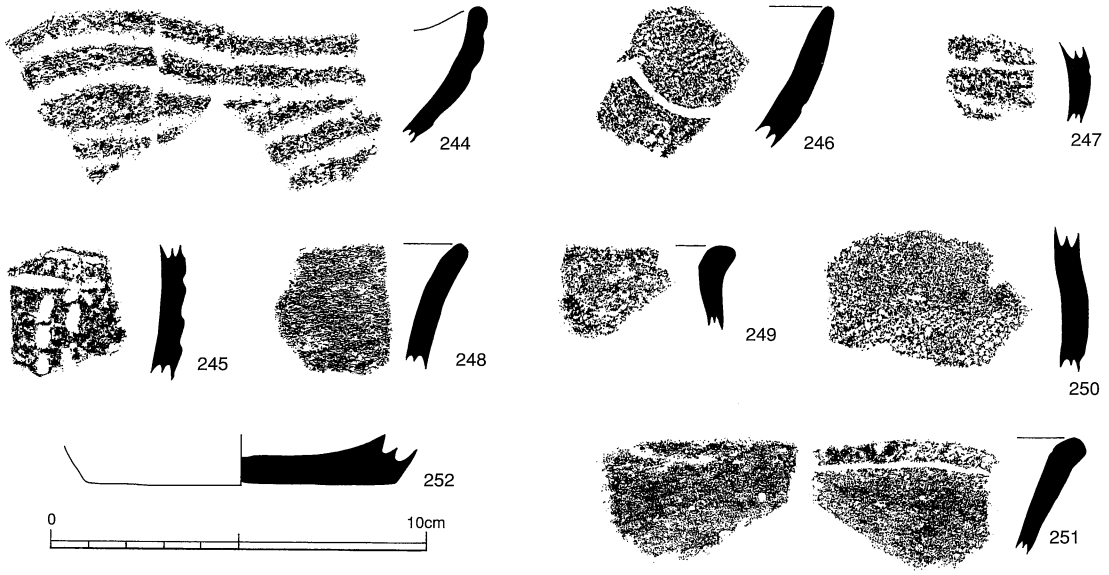


第36図　竪穴住居SH01



1　灰褐色　　極細砂
2　灰黄褐色　極細砂（焼土粒混じる）
3　赤褐色　　極細砂〈基盤層赤変〉

第37図　竪穴住居SH01竈



第38図　流路SD03出土土器

３．遺物（第38・39図）

SD03（第38図　244～252　図版52）

SD03からは縄文土器が出土した。有文土器を中心に記述する。244はキャリパー形の波状口縁である。横位の太い複数の沈線を複数帯めぐらす。245は横と縦に２列の刺突文を施文している。246は口縁部の破片で、口縁下に屈折する沈線を施し沈線より上位に縄文を施文する。247は横位の沈線の間に縄文を充填する。248は外傾する無文の口縁で外面は横方向にナデて仕上げている。249は無文の外反する口縁部で端部は肥厚する。250は口頸部の無文帯から縄文を施す体部の破片である。251は口縁直下の内面に細い沈線一条で区画し、縄文で埋めている。252は直径8.3㎝の平底で無文である。

SH02（第39図　253～262・Ｓ６　図版52・53）

SH02の床面からは土師器壺(253･254)・椀(255･256)・甕(257)がある。椀255･256は半球形甕257は直立気味の口頸部である。Ｐ202からは土師器甕(258)・高坏(259)がある。甕258は布留式甕である。高坏259は坏部底部が屈曲して稜をもつ。Ｐ203からは土師器甕(260･261)・高坏(262)がある。甕260･261は同一個体の可能性がある。高坏262は坏部底部が屈曲して稜をもち、脚部は内面ケズリである。接合法は円盤充填法である。Ｓ６は床面から出土した台石である。

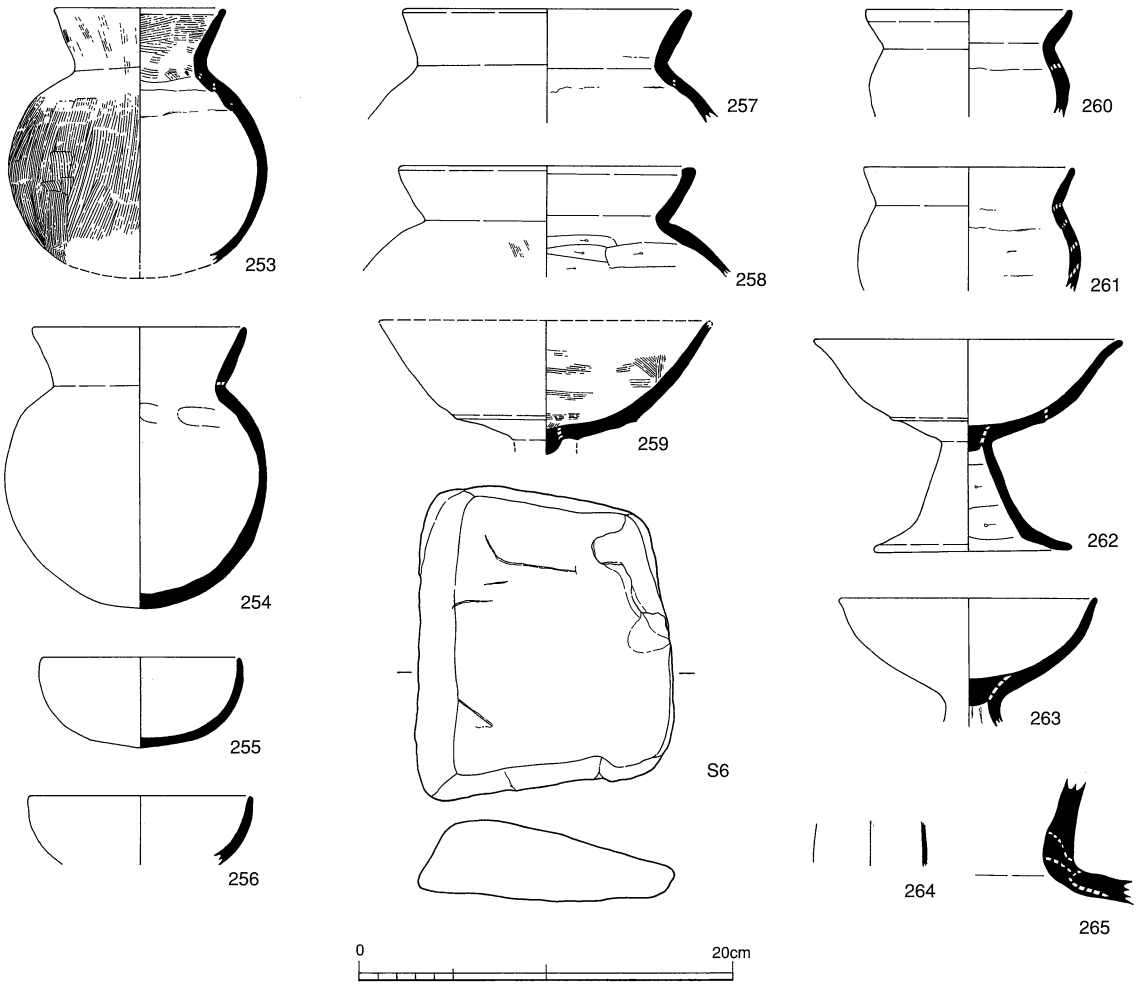
SH01（第39図　263～265　図版53）

土師器高坏263は椀形の坏部に脚部を付けるが、欠損している。製塩土器264は小形丸底のタイプで、器厚２㎜と非常に薄く、手づくねで作っている。須恵器甕265は頸部から肩部にかけての破片である。

４．小結

Ｃ地区では遺構検出面はほぼ同一でありながら、重複する３面の遺構を検出した。遺構の残存状況から、条里施工時などに、大きく削平されていると考えられる。

縄文時代の流路SD03はＣ地区のSD03と同一であり、中期後葉の244や中期末の245、後期前半の252、後期前葉から中葉の250、元住山Ｉ式の251など中期後葉から後期中葉まで幅広く出土している。Ｂ地区と同様に削平が著しいため、そのほかの縄文時代の遺構は確認できなかった。



第39図　竪穴住居SH02・SH01出土遺物

古墳時代の竪穴住居は方形で、ほぼ同じ場所に軸を違えて作られており、Ｂ地区やＡ地区の状況から集落は豊島南遺跡の方に広がっていると考えられる。古墳時代前期の竪穴住居は布留式並行期の土器が出土している。古墳時代中期の竪穴住居は、北壁中央には竈が作りつけられており、初期須恵器や製塩土器が出土している。

第５節　D地区

１．概要（図版54・55）

大阪府道・兵庫県道高速大阪池田線（延伸部）の本体工事に伴う発掘調査に引き続いて、同受電設備等建設に伴い、構造物建設予定範囲において平成７年６月に確認調査（遺跡調査番号950135）を行った。この結果、出土した土器等は少ないものの前回の調査で認められたものと同等の包含層と、その下面で遺構面を確認した。

この確認調査の結果を受けて、翌年の平成８年１月から本発掘調査を実施した。調査対象地は、本体工事部における平成２年度の本発掘調査地点の北側にあたり、北西から南東へ走る大阪府との府県境に接している。周囲から一段高い土地となっており、確認調査によっても約1.5mの厚さで盛土がなされていることがわかっており、県境の痕跡は現況では認められなかった。調査地区の断面図(第40･42図)では盛土分を除いて掲載している。

本発掘調査では盛土等を除去するため、西側から機械によって掘削を行なった。確認調査の結果通り、西側で包含層と想定された土壌化した層からは遺物はまったく検出できなかったため、遺構面まで機械によって除去した。SD108から東側では上層の旧耕土直下で土器片が出土したため、包含層上面までを機械で掘削した。

調査の結果、土壌化層の上下面で遺構が見つかった。SD108の西側では、確認調査で遺構面とされた面まで機械によって掘削した。遺物も出土しなかったことから、顕著な遺構はないものと判断した。第１面の遺構はSD108の東側で溝・掘立柱建物などを検出しており、弥生時代終末から近世に至る時期のものである。

下層の第２面からはほとんど遺物は出土しなかったが、上層の状況から弥生時代後期以前の遺構面と考えられる。柱穴状の穴や土坑が検出され、掘立柱建物２棟を復元した。

調査区の地形は比較的水平であったが、土層の堆積状況を確認すると、緩やかに西に向かって傾斜していることがわかる。更に下層の堆積状況を確認するため、一部断ち割りを行ったところ、下層はよく締まった砂礫層とシルト層が互層となっており、その上層に極細砂層が堆積した後、比較的安定した地形となった状況が見られた。

２．遺構（第40～43図）

第１遺構面（第40図　図版56）

盛土下の旧耕土直下で検出できた上面の第１遺構面では掘立柱建物、溝などを検出している。

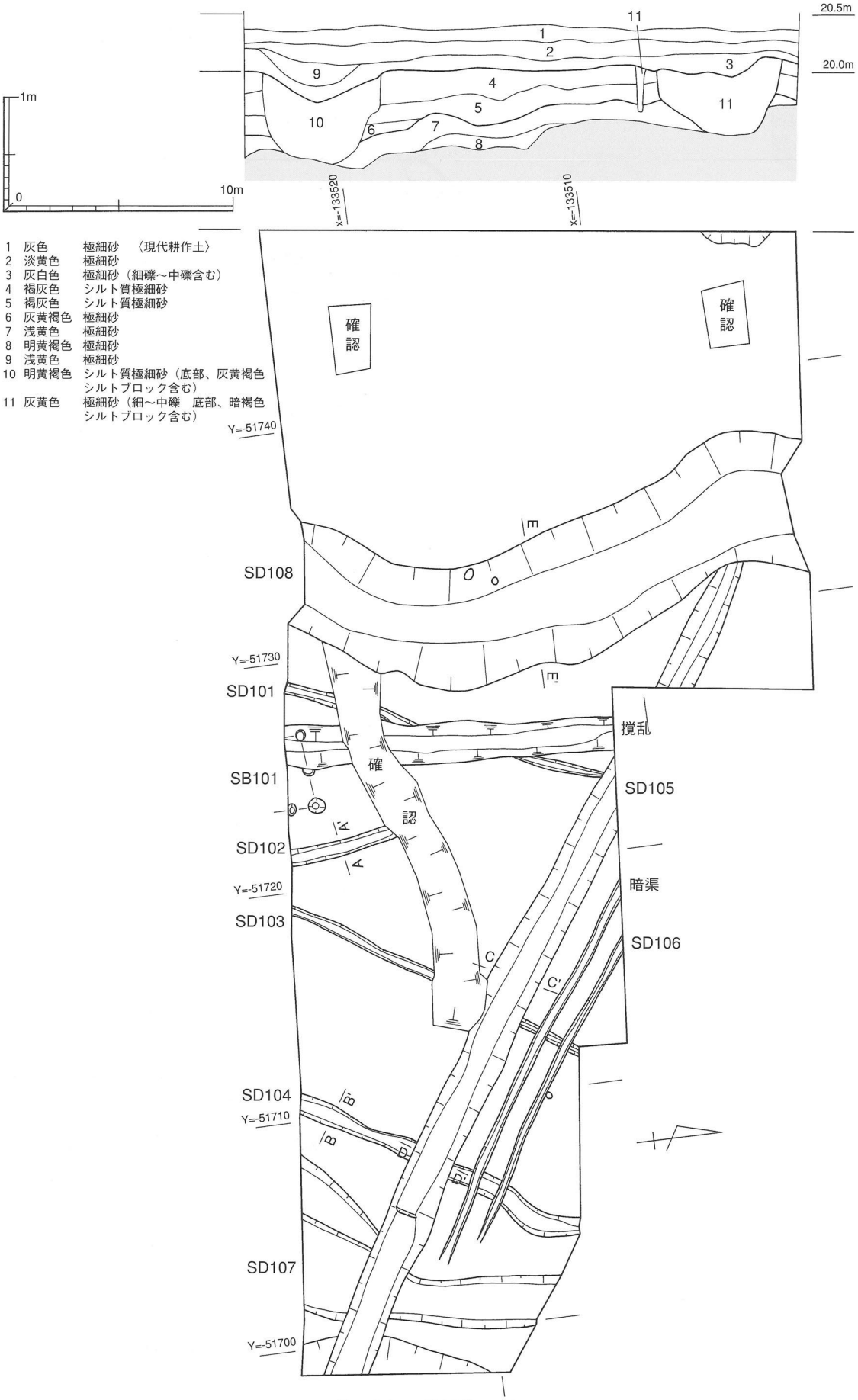
掘立柱建物（第41図　図版56）

掘立柱建物SB101は一部を検出したにすぎず、撹乱によって削平されているが、２間×１間以上の規模をもつ。柱穴の大きさ・深さは不揃いである。柱穴から出土し、図化できた遺物は第47図の石器だけであるが、P-２からは須恵器片が、P-３からは土師器甕片が出土しており、古墳時代から奈良時代にかけてのものと判断した。

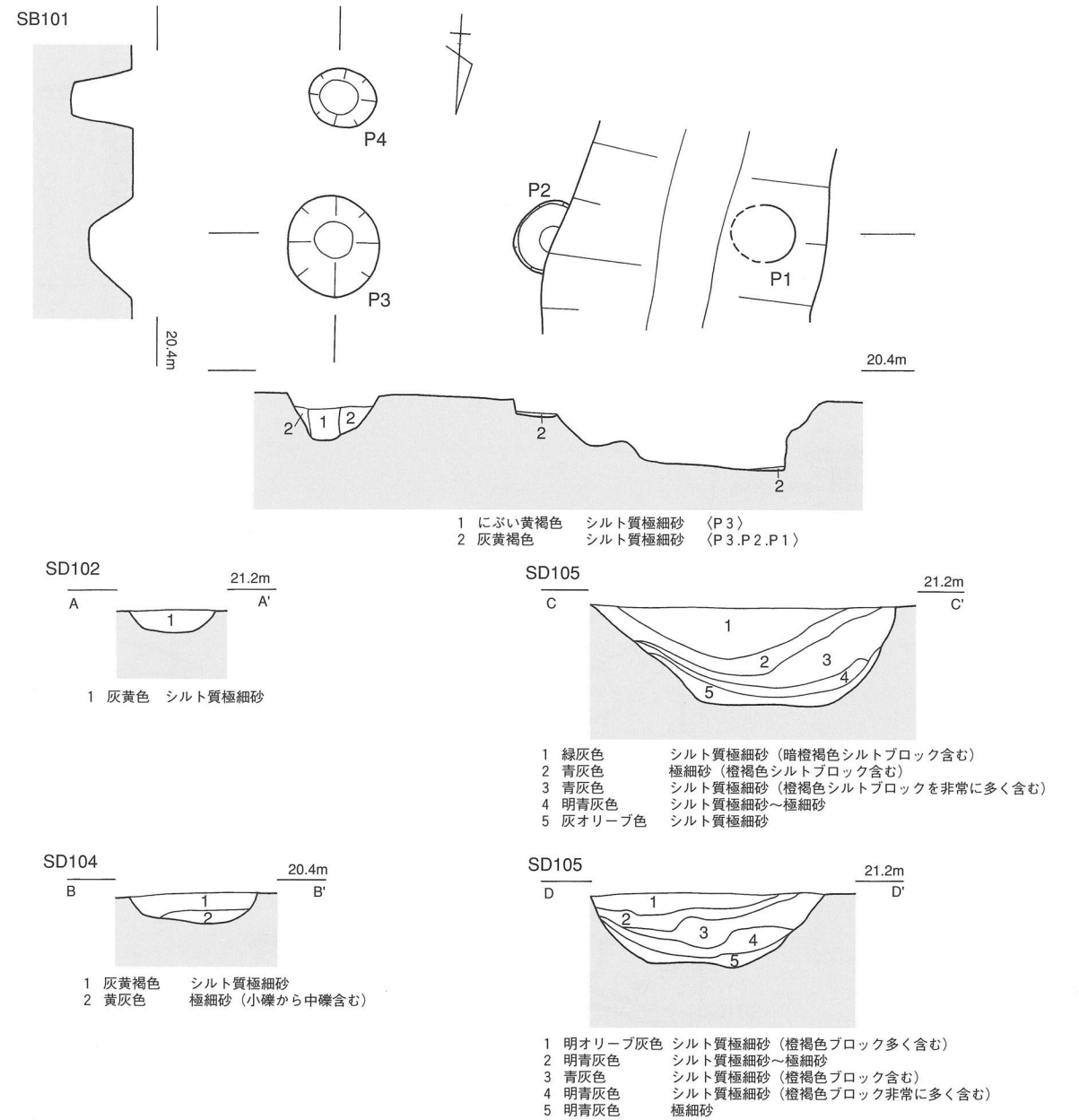
溝（第41図　図版57～59）

SD101は南北方向に走る、幅約50cm、深さ10cmほどの小溝である。SD105に切られている。撹乱等で大きく破壊されているが、古式土師器がまとまって出土した(第44図　301～303)。古式土師器は横転し、押しつぶされているが、あまり遠くから流されてきたような状況は見られない。

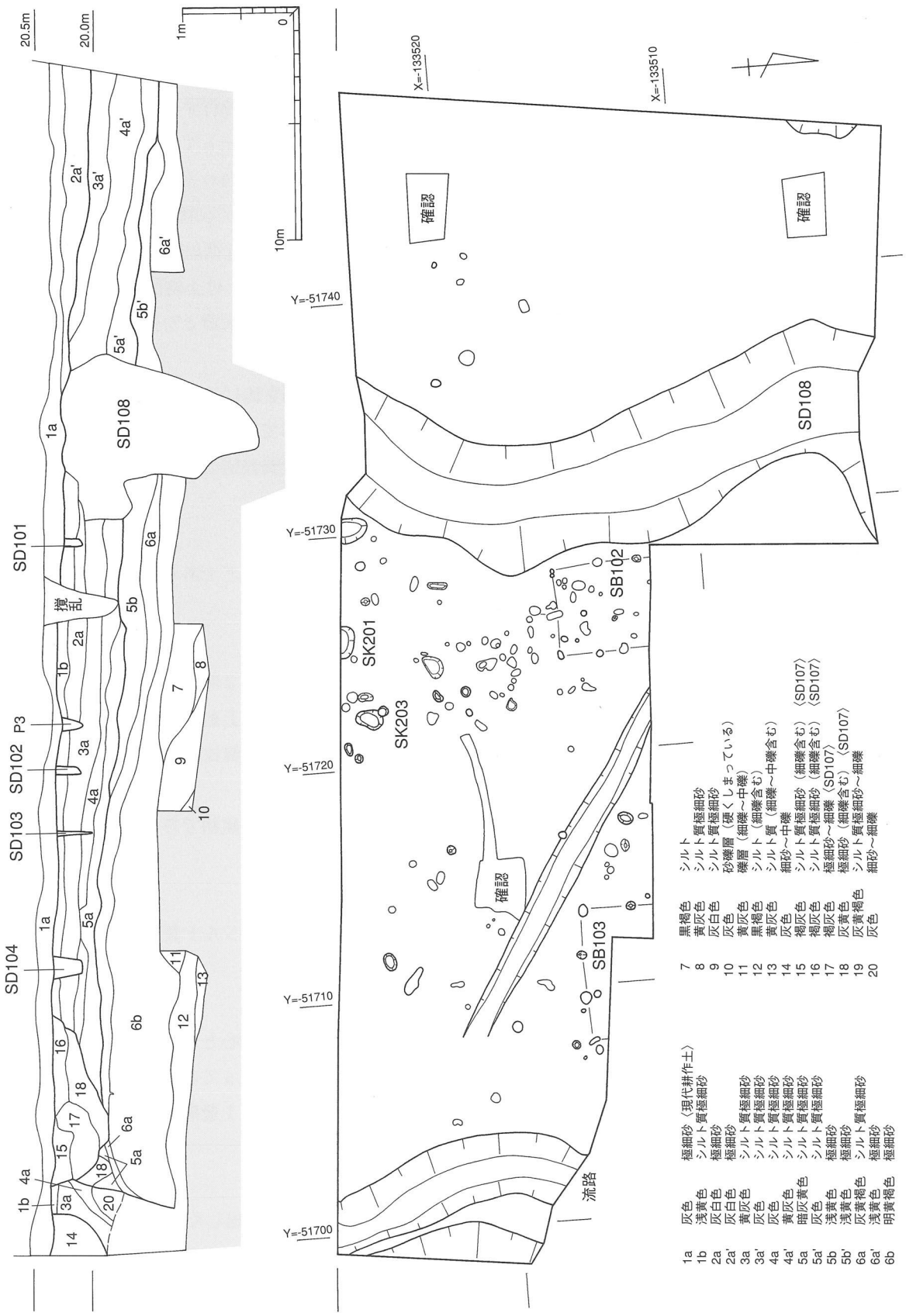
SD102は南北方向に走るが、他の小溝とは少し向きが異なる。幅約60cm、深さ約15cmの小溝である。北端部では削平のためか消失している。弥生土器片やサヌカイトのチップも出土しているが、６～７世


20.5m
20.0m
1m
0
10m
x=-133520
x=-133510
1 灰色 極細砂 〈現代耕作土〉
2 淡黄色 極細砂
3 灰白色 極細砂（細礫～中礫含む）
4 褐灰色 シルト質極細砂
5 褐灰色 シルト質極細砂
6 灰黄褐色 極細砂
7 浅黄色 極細砂
8 明黄褐色 極細砂
9 浅黄色 極細砂
10 明黄褐色 シルト質極細砂（底部、灰黄褐色シルトブロック含む）
11 灰黄色 極細砂（細～中礫 底部、暗褐色シルトブロック含む）
確認
確認
Y=-51740
SD108
Y=-51730
SD101
SB101
SD102
Y=-51720
SD103
SD104
Y=-51710
SD107
Y=-51700
確認
撹乱
SD105
暗渠
SD106

第40図　Ｄ地区第１面



第41図　D地区第１面　掘立柱建物と溝断面


20.5m
20.0m
1m
0
10m
SD101
SD102
SD103
SD104
SD108
P3
攪乱
X=-133520
X=-133510
Y=-51740
Y=-51730
Y=-51720
Y=-51710
Y=-51700
確認
SK201
SK203
SB102
SB103
流路
1a　灰色　極細砂（現代耕作土）
1b　浅黄色　シルト質極細砂
2a　灰白色　極細砂
2a'　灰白色　極細砂
3a　黄灰色　シルト質極細砂
3a'　灰色　シルト質極細砂
4a　灰色　シルト質極細砂
4a'　黄灰色　シルト質極細砂
5a　暗灰黄色　シルト質極細砂
5a'　灰色　シルト質極細砂
5b　浅黄色　極細砂
5b'　浅黄色　極細砂
6a　灰黄褐色　シルト質極細砂
6a'　浅黄色　極細砂
6b　明黄褐色　極細砂
7　黒褐色　シルト
8　黄灰色　シルト質極細砂
9　灰白色　シルト質極細砂
10　灰色　砂礫層（硬くしまっている）
11　黄灰色　礫層（細礫～中礫）
12　黒褐色　シルト（細礫含む）
13　黄灰色　シルト質（細礫～中礫含む）
14　灰色　細砂～中礫
15　褐灰色　シルト質極細砂（細礫含む）〈SD107〉
16　褐灰色　シルト質極細砂（細礫含む）〈SD107〉
17　褐灰色　極細砂～細礫〈SD107〉
18　灰黄色　極細砂（細礫含む）〈SD107〉
19　灰黄褐色　シルト質極細砂～細礫
20　灰色　細砂～細礫

第42図　Ｄ地区第２面

紀頃の須恵器坏小片が出土している。

SD103も南北方向に走る、幅約50cm、深さ約15cmの小溝である。SD105・SD106に切られている。須恵器平瓶(第44図　304)の他に古式土師器と思われる小片が出土している。

SD104も南北方向に走る、幅約95cm、深さ約20cmの溝であり、北半部では蛇行する。下層には礫が含まれており、隣接する流路やSD107の影響を受けたものであろう。遺物は出土していない。

SD105は他の溝と異なり、南東から北西へと走る溝である。深さも北西方向へと深くなっている。幅約１m、深さ25～35cmの断面逆台形を呈した溝である。奈良・平安時代に属する須恵器蓋や中世後半頃に属する須恵器鉢や青花皿(第44図　305～307)が出土している。SD106や近世以降のものと思われる暗渠排水もSD105に平行して走っており、中世以降から踏襲された水路或いは土地区画と思われる。SD106からは遺物は出土していない。この両溝や暗渠はちょうど兵庫県と大阪府とを分ける方向に一致している。

東端のSD107は幅約3.5m、深さ約２mを測り、南端で西側に浅く幅を広げる。上層には平安時代頃までの須恵器が含まれるが、下層からは弥生時代後期頃の土器が出土している(第45図)。更に東側にも落ち込みがあり、東へと大きく落ちる大きな流路の西肩部が埋没する最終段階の状況を検出したのであろう。更に下層からは遺物は出土しなかった。

第２遺構面（第42図　図版60）

土坑・柱穴・自然流路などを検出したが、柱穴・土坑は浅いものがほとんどである。埋土が異なるものや比較的深い柱穴から掘立柱建物を復元した。

掘立柱建物（第43図　図版61）

SB102は調査区中央の北寄りで検出した。1.8～2.0mの柱間をもつ２間×２間以上の建物で独立棟持柱をもつ。独立棟持柱は約1.2m屋外へ突出し、褐灰色シルト質極細砂の埋土をもつ他の柱穴より深いものである。屋内には中軸線上にのる２基の柱穴が約1.5mの間隔であり、側柱の中間に位置する。床束であろうか。遺物は出土していない。

SB103も北寄りで検出された。1.8～2.0mの柱間をもつ３間×１間以上の建物である。褐灰色や黒褐色のシルト質極細砂の埋土を持つ。遺物は出土していない。

土坑（図版61）

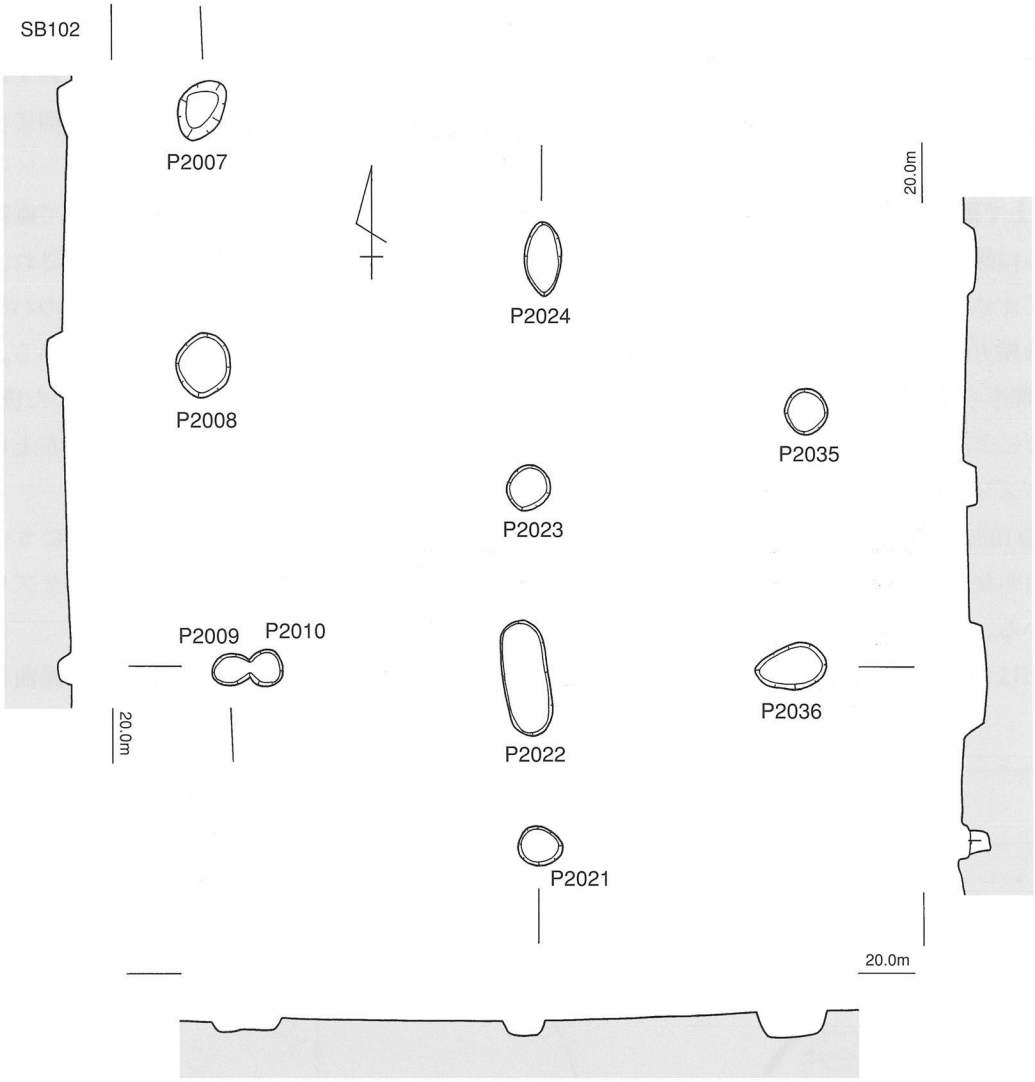
土坑はすべて深さ20cm以内で皿状の断面を呈している。黄灰色や黒褐色のシルト質極細砂の埋土を持つ。遺物は出土していない。

溝（図版61）

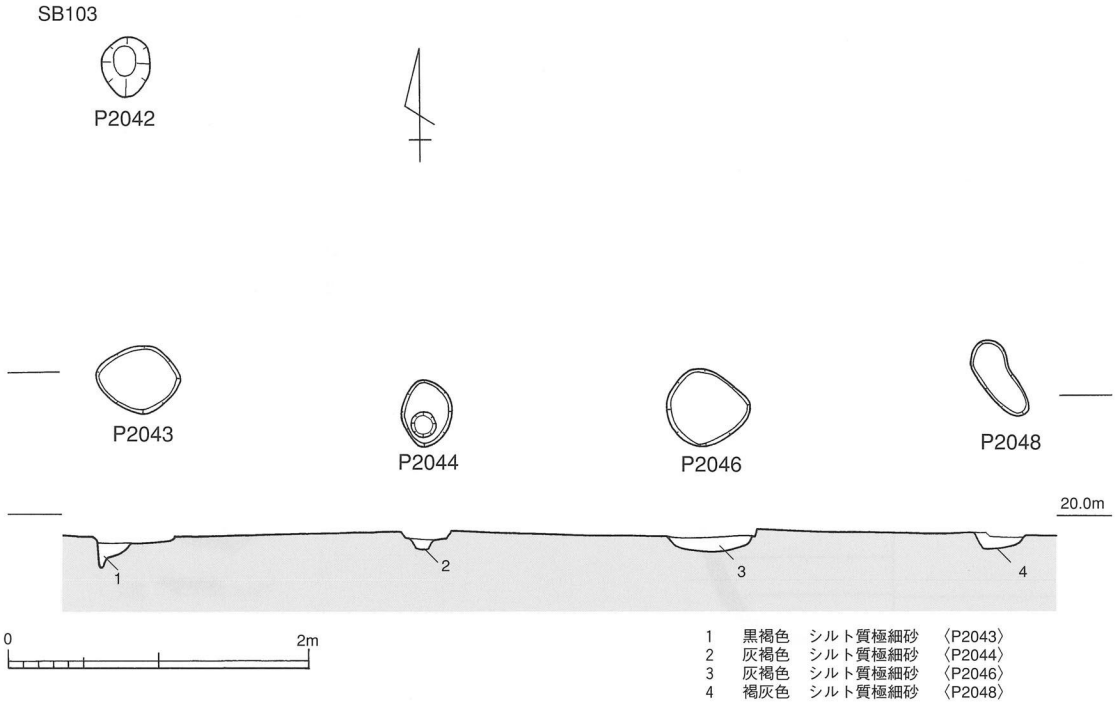
SD108は幅５m強、深さ約75cmで断面U字形を呈しており、砂や中礫を中心とした堆積をもつ。蛇行しており、自然流路である可能性が強いが、この溝の東西で遺構密度が異なっていることから、境界の意識として溝とした。遺物は全く出土しなかった。堆積状況から見ると、第１遺構面を形成している土層が溝上に一部被っていることから、第２遺構面に属する可能性が高い。

流路（図版61）

調査区の東端、上面のSD107の下層から、砂礫で埋没した自然流路を検出した。この下層の堆積からは遺物は出土していない。また、調査区の北西端にも砂層の堆積をもつ西への落ち込みがあり、流路が存在している可能性を示している。これらの自然流路は比較的規模が小さく、南側の調査区に続かないものも含まれている。堆積状況もラミネーションをもった砂礫で充填されており、遺物も出土していないことから、本流性の氾濫により短期間でえぐられ、氾濫堆積物によって埋没した可能性がある。



1　褐灰色　シルト質極細砂　〈P2021〉



1　黒褐色　シルト質極細砂　〈P2043〉
2　灰褐色　シルト質極細砂　〈P2044〉
3　灰褐色　シルト質極細砂　〈P2046〉
4　褐灰色　シルト質極細砂　〈P2048〉

第43図　D地区第２面　掘立柱建物

３．遺物（第44～47図　図版62～65）

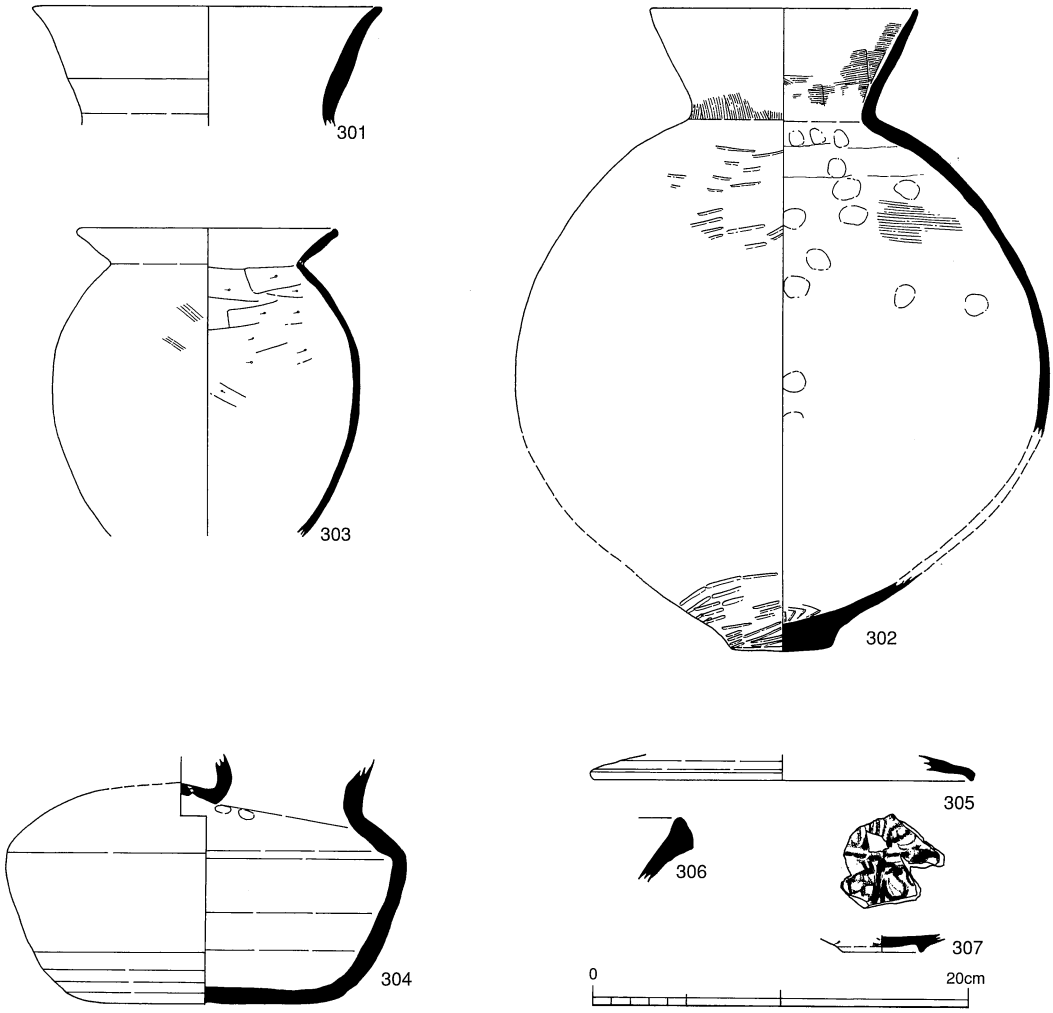
301から303はSD101から出土した。301･302は直口壺である。301は口縁部のみ図化できた。わずかに外反して直線的に伸びる口縁部であるが、摩滅が著しく調整は不明である。接合しないが、内面にケズリを施した胴部の破片も存在する。

302は図上で復元できた。低い平底の底部から球形の胴部へと続き、屈曲してわずかに外傾して直線的に伸びる口縁部に続く。底面には木葉痕が残されている。胴部外面には右上がりのタタキが残され、内面はユビオサエを残しながら、横方向の板ナデ或いはハケメで調整する。口縁部外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメが施され、口縁端部はヨコナデで仕上げている。口縁の一部に黒斑がある。

303は倒卵形の胴部に屈曲して直線的に外傾する口縁部が付く甕である。胴部外面はハケを施した後、丁寧なナデによって仕上げている。内面は胴部上半、頸部まで横方向のヘラケズリ、胴部下半は左上がりのヘラケズリを施す。口縁部はヨコナデで仕上げ、端部は丸く納める。

304はSD103から出土した須恵器平瓶である。口縁端部や把手部を欠き、口縁端部は人為的に５～７回程度打ち欠いたものかもしれない。あまり肩の張らない丸い胴部の下半外面は粗く回転ヘラケズリを施している。

305～307はSD105から出土している。305は須恵器坏B蓋で、真っ直ぐ伸びた天井部から短く屈曲し



第44図　溝SD101・SD103・SD105出土土器

た端部へと至る。内面には重ね焼きによる融着が残る。口径約20cm。

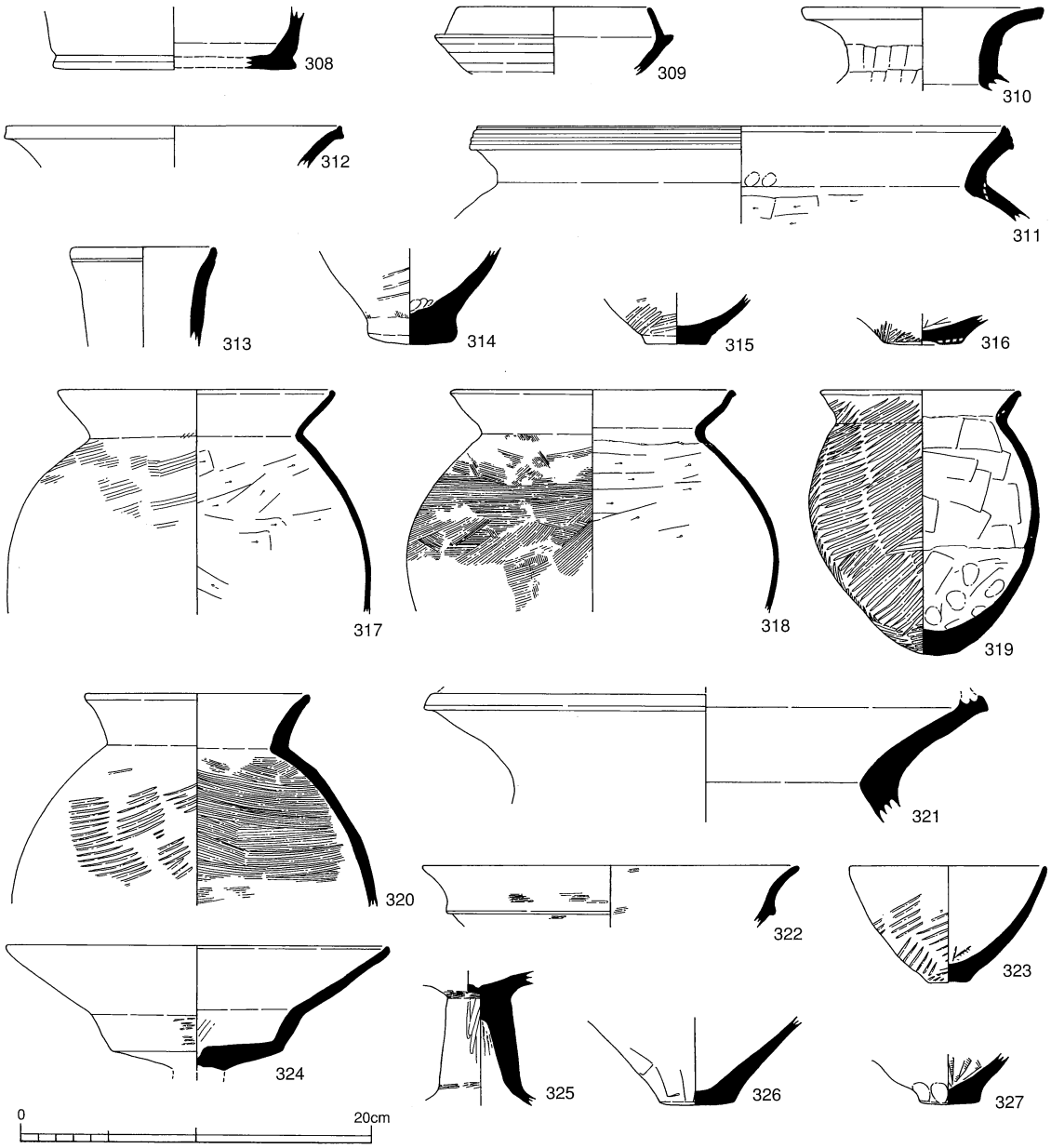
306は須恵器鉢口縁部である。東播系のこね鉢で、上部に大きく肥厚させている。

307は磁器底部で、明の染付（青花）皿である。内面には草花紋を描き、外面にも高台近くまで紋様が見られる。低い高台底面は釉を掻きとって露胎となっている。底径4.2cm。16世紀後半のものであろう。SD105から出土した土器は、16世紀後半までの時期を示している。

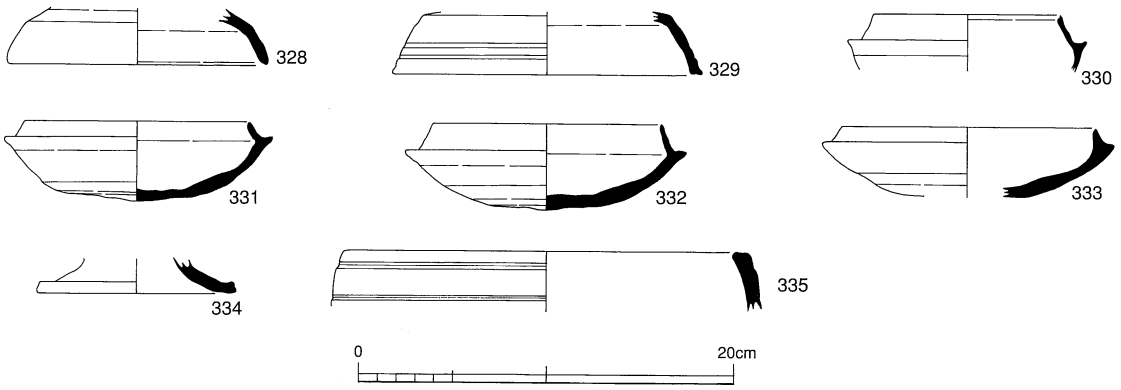
308～327はSD107から出土している。308～316は上層出土のものである。308は須恵器壺底部で底面はヘラ切後、ナデを施す。309は須恵器坏Hで、口縁はやや内傾して立ち上がる。

310は弥生土器壺口縁部である。筒状の頸部から大きく外反して開く口縁部に続く。口縁端部は拡張せず、面を作って収める。頸部は縦方向の板ナデ後、端部までヨコナデ調整を施す。

311は弥生土器甕口縁部である。屈曲して短く外反する口縁端部は上下に拡張して3条の凹線紋を施



第45図　溝SD107出土土器



第46図　D地区包含層出土土器

す。内面頸部直下は横方向のヘラケズリを施し、他はヨコナデで仕上げる。

312は弥生土器壺口縁である。端部は上下に小さく拡張して面を作り、ヨコナデで仕上げる。

313は弥生土器長頸壺口縁部である。端部は内面に強いナデを施すことによりわずかに開く。外面には端部直下に浅い沈線を施す。

314～316は外面に右上がりのタタキを残す平底底部である。316は底面を窪ませ、内面には板ナデを施す。SD107上層出土の土器は９世紀頃までの時期を示している。

317～320は土師器甕である。317は球形の胴部から屈曲して直線的に開く口縁部へと続く。ヨコナデで仕上げた口縁端部はわずかに上方へつまみ上げて丸く収める。胴部外面は右上がりの粗いハケメ、内面の頸部以下は横方向のヘラケズリを施す。

318は球形の胴部から屈曲してやや内湾して開く口縁部へと続く。外面は多方向の細かいハケで調整し、口縁部はヨコナデで仕上げる。内面は頸部直下以下を横方向のヘラケズリを施している。

319は器高15.2cm、口径11.3cmの小形の甕で、丸底、倒卵形の胴部に屈曲して短く開く口縁部が付く。外面は右上がりのタタキを施すが、口縁直下まで及んでいる。内面は横方向の板ナデで調整するが、下半部に段が見られ、底部を整形した後に粘土紐を積み上げて成形したことがわかる。

320は屈曲して短く外反する口縁部へと続く。ヨコナデで仕上げた口縁端部は丸く収める。胴部外面は右上がりのタタキが残るが、一部はナデ消そうとしている。内面は横方向のハケを施す。319・320は他の甕と比べて器壁が厚く、外面に煤が付着する。

321は大形の土師器壺口縁部である。器壁も厚く胎土・焼成とも他の土器と異なる。屈曲して大きく外反する口縁の上部は欠損しているが、二重口縁或いは袋状口縁を呈するものであろう。ハケの後ヨコナデで仕上げている。

322は土師器壺口縁部である。二重口縁を持ち、大きく外反する。内外面とも細かい横方向のヘラミガキを施す。

323は土師器鉢である。上げ底の底部から内湾しながら開く口縁部へと続く。外面には右上がりのタタキ、内面には板ナデ状の痕跡を残す。

324は土師器高坏の坏部である。屈曲して上方へ開いた後、更に大きく直線的に開く口縁部へと続く。内外面ともヘラミガキを施しているが、摩滅が著しい。内面中央に円形の窪みが存在する。成形に関わるものであろうか。

325は土師器高坏脚部である。屈曲して開く脚端部を持つものと思われる。筒部外面は縦方向のヘラミガキ、坏部・脚端部外面は横方向のヘラミガキを施す。坏部内面中央に円形の窪みが見られる。

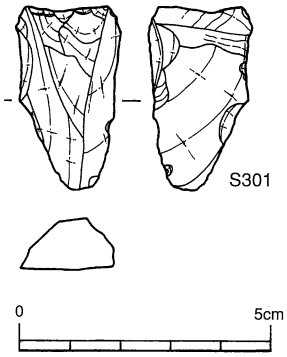
326･327は土師器底部である。

328～335は包含層出土の土器である。328･329は須恵器坏Ｈ蓋である。328は天井部をヘラケズリしているが、口縁端部は丸く納めている。

329は天井部をヘラケズリし、屈曲して口縁部へ続く。口縁端部は面を有する。口縁部外面には２条の沈線が施される。

330～333は須恵器坏Ｈ身、334は須恵器高坏脚部である。６世紀前半から７世紀前半にかけてのものが存在する。

335は瓦質土器の火舎香炉で、２条の沈線が施される。



第47図　Ｄ地区石器

石器（第47図　図版48）

Ｓ301は第１遺構面のＳＢ101内の柱穴２より出土した、二上山産と思われる、緻密なサヌカイトを用いた剥片である。打点から剥離軸に沿って破断しており、その状況から見て、本来は現状の２倍程度の幅をもっていたものと思われる。打面は平坦な剥離面から成る。背面側は、腹面と同一方向、および直交方向からの剥離痕により構成されているが、背面側左側縁と腹面側右側縁には、風化がやや浅い剥離痕が認められる。

４．小結

第１遺構面で検出されたＳＤ105は南東から北西へと流れる直線的な溝であり、出土土器から中世後半には掘削されたものと考えられる。この溝はそれまでの南北に流れる旧河道や溝とは方向を違えており、時期不明のＳＤ106や近世以降の暗渠排水が並行して走っている。これらの溝の方向は兵庫県伊丹市と大阪府池田市との府県境の方向と一致しており、県境を示す溝が中世にまで遡ることを示している。同様に大阪府との府県境を調査した原田西遺跡（兵庫県伊丹市・大阪府豊中市）では複雑に屈曲する府県境に一致するように断面Ｖ字状の堀が検出されている。この堀も中世前半の掘立柱建物を切って掘削されており、中世後半のものと思われる。

大阪府と兵庫県との境界は地図上でも大変複雑であるが、歴史的に見てもさらに複雑なことがわかる。伊丹市小阪田は現在では大阪空港に分断されて、伊丹市の飛び地的な状況であるが、明治４年の廃藩置県の前後には隣接する池田市が麻田県に、さらには摂津県から豊崎県へ改称し、兵庫県になった時期がある。また、それ以前の江戸時代にも麻田藩青木家領、幕府直轄代官斉藤六蔵支配、三田藩・尼崎藩一時預かり等複雑な変遷をたどっている。

今回検出された溝ＳＤ105は規模も大きくはなく、用水路としての機能が考えられるが、現在の府県境を限る指標が、中世後半にまで遡ることを示すのではなかろうか。

今回検出された遺構が、これまでの調査で検出された遺構とどのように関連するかは判断が難しいが、ＳＤ107はその規模、堆積状況、出土遺物の時期から見て、Ｂ地区のＳＤ05に繋がるものと考えられる。その他の溝・流路は不明である。

第４章　自然科学的調査の結果

第１節　小阪田遺跡出土弥生土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
矢作 健二・石岡 智武

はじめに

伊丹市に所在する小阪田遺跡は、大阪平野北西部を流れる猪名川左岸に合流する支流の箕面川左岸の低位段丘～沖積低地に位置する。発掘調査では弥生時代を中心とする土器をはじめとする遺物が多数出土している。本報告では、小阪田遺跡より出土した弥生土器の材質（胎土）の特性を明らかにすることにより、各器種間および各時期間での胎土の類似性あるいは特異性を見出し、弥生土器の製作に関わる資料を作成する。また、胎土から検出された鉱物および岩石の種類構成から、材料の採取地についても検討を行う。

１．試料

試料は、小阪田遺跡から出土した弥生土器片25点である。各試料には資料No.01～No.25が付されている。各試料の器種や時期および出土した遺構などは一覧表にして第２表に示す。

第２表　分析試料一覧および胎土分類

資料No.	報告No.	種別	器種	時期	出土地区	遺構	遺構２	A 1 vc	A 1 c	A 1 m	A 1 f	A 1 vf	A 1 csi	A 2 vc	A 2 c	A 2 m	A 2 f	A 2 vf	A 2 csi	B 1 vc	B 1 c	B 1 m	B 1 f	B 1 vf	B 1 csi	B 2 vc	B 2 c	B 2 m	B 2 f	B 2 vf	B 2 csi
01	079	弥生土器	壺	後期	B	SD-4	３区			■	■	■																			
02	081	弥生土器	壺	後期	B	SD-4	３区				■																				
03	083	弥生土器	壺	後期	B	SD-4	1区･4区･2,3区間アゼ				■	■	■																		
04	087	弥生土器	壺	後期	B	SD-4	南端										■														
05	088	弥生土器	壺	後期	B	SD-4	３区			■	■	■																			
06	097	弥生土器	壺	後期	B	SD-4	２区			■																					
07	099	弥生土器	壺	後期	B	SD-4	３区																■	■							
08	103	弥生土器	壺	後期	B	SD-4	4区･2,3区間アゼ･1区		■		■	■	■																		
09	123	弥生土器	甕	後期	B	SD-4	１区				■																				
10	124	弥生土器	甕	後期	B	SD-4	1区･4区･2,3区間アゼ		■	■	■																				
11	134	弥生土器	甕	後期	B	SD-4	2区・3区・4区		■	■	■																				
12	141	弥生土器	甕	後期	B	SD-4	１区																						■		
13	142	弥生土器	甕	後期	B	SD-4	北拡張				■	■	■																		
14	143	弥生土器	甕	後期	B	SD-4	４区										■	■													
15	145	弥生土器	壺	後期	B	SD-4	４区・南端				■	■	■																		
16	146	弥生土器	甕	後期	B	SD-4	３区										■														
17	147	弥生土器	壺	後期	B	SD-4	２区・３区・４区				■	■	■																		
18	148	弥生土器	甕	後期	B	SD-4	２区・４区					■																			
19	165	弥生土器	鉢	後期	B	SD-4	南端				■	■	■																		
20	168	弥生土器	鉢	後期	B・A	SD-4	北拡張					■																			
21	188	弥生土器	高坏	後期	B	SD-4	３区			■	■	■	■																		
22	189	弥生土器	高坏	後期	B	SD-4	２区・３区・４区		■		■	■	■																		
23	199	弥生土器	高坏脚	後期	B	SD-4	２区・３区・４区		■		■	■	■																		
24	203	弥生土器	壺	前期	B	SD-4	２区	■	■		■	■	■																		
25	204	弥生土器	壺	中期	B(No.3)	SD-4	－									■	■														

Ａ１：岩石片の種類構成が主にチャート・凝灰岩・流紋岩・花崗岩類からなる
Ａ２：岩石片の種類構成はＡ１と同様であるが、火山ガラスを比較的多く含む
Ｂ１：鉱物片に角閃石を非常に多く含み、主要な岩石片は花崗岩類のみ
Ｂ２：鉱物片に角閃石と黒雲母を比較的多く含み、主要な岩石片は花崗岩類のみ
ピークを構成する粒径：vc；極粗粒砂　c；粗粒砂　m；中粒砂　f；細粒砂　vf；極細粒砂　csi；粗粒シルト

２．分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉砕による重鉱物分析や切片による薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光Ｘ線分析が最もよく用いられている方法である。前者の方法は、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点があり、その中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。

この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか（1999）の方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。今回の分析で対象とする弥生土器も、同一の地質分布範囲内で作られた可能性もあるため、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは、試料間の胎土の区別ができないことが予想される。このことを考慮し、本分析では松田ほか（1999）の方法を用いる。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03㎜の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5㎜間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の３次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

３．結果

観察結果を第３表、第48図～第50図に示す。各試料で計数された鉱物片および岩石片の種類構成をみると、資料№.07と資料№.12を除いた23点の試料においてほぼ同様の組成となっている。すなわち、鉱物片では、石英とカリ長石および斜長石の３者により構成され、試料によっては極めて微量の角閃石や雲母類を含むという組成であり、岩石片では、チャート、凝灰岩、流紋岩、多結晶石英、花崗岩類および火山ガラスがそれぞれ少量ずつ含まれ、試料によっては頁岩や砂岩などの堆積岩類を微量伴うものや塩基性片岩などの変成岩を極めて微量伴うものなどが認められる。なお、詳細にみれば、これら23点の中では、資料№.04・№.14・№.16・№.25の４点に特に火山ガラスの量比の多いことが指摘される。ここで、上述の23点をＡ類とし、その中で特に火山ガラスの多い４点をＡ2類、他をＡ1類と分類する。

資料№.07と資料№.12は、鉱物片の種類構成において、石英、カリ長石、斜長石に加えて、角閃石と黒雲母も主要な種類となっていることと岩石片の種類構成において資料№..07は多結晶石英と花崗岩類および極めて微量の斑れい岩、資料№.12は多結晶石英と花崗岩類のみしか認められないことで上述した他の23点の試料とは区別される。ここでは、これをＢ類とする。さらに、角閃石の非常に多い資料№.07をＢ1類とし、角閃石に比べて黒雲母の方がやや多い資料№.12をＢ2類とする。

一方、各試料の粒径組成をみると、試料間でやや違いのあることがわかる。すなわち、第50図に示されたヒストグラムにおいて、単独峰の形状を示すものだけではなく、複数のピークを示すものもある。また、そのピークとなる粒径も極粗粒砂から粗粒シルトまで様々である。さらに、ピークがなだらかであり、それを構成する粒径は複数におよぶと見た方がよいものもある。このような状況から、本分析では、

第３表　薄片観察結果(1)

資料	砂粒区分		砂粒の種類構成																										合計
			鉱物片										岩石片														その他		
			石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	破砕状花崗岩	はんれい岩	ホルンフェルス	結晶片岩	粘土岩	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体	
01	砂	細礫																		1									1
		極粗粒砂	1																	1									2
		粗粒砂	6	3									2				2		1	1									15
		中粒砂	13	9	4							1	3			1	1		5	1									38
		細粒砂	23	4	10			1					3				1		4								2		48
		極細粒砂	28	3	14				1				1						1								1		49
		粗粒シルト	14	5	11				1																		2	1	34
		中粒シルト	4	2	7																								13
	基質																												466
	孔隙																												21
02	砂	細礫																											0
		極粗粒砂		2																									2
		粗粒砂	7	2	3								1				1		2	4									20
		中粒砂	18	2	6						1		4	1		1				2									35
		細粒砂	29	6	15		2						3							2							1		58
		極細粒砂	14	7	17		2						1														1		42
		粗粒シルト	12	2	13							1																1	29
		中粒シルト	7		6																							1	14
	基質																												369
	孔隙																												28
03	砂	細礫	1																										1
		極粗粒砂		1													1			1									3
		粗粒砂		1										1		1				3									6
		中粒砂	3	2	4											1	1			1									12
		細粒砂	11	2	14		1									2	1		3	1									35
		極細粒砂	21	6	24		1		2			1							4										59
		粗粒シルト	17	7	33																							1	58
		中粒シルト	9	4	13																								26
	基質																												474
	孔隙																												20
04	砂	細礫	1																										1
		極粗粒砂	2	1	1								1							1									6
		粗粒砂	5	1	4								1		1		2		2	3									19
		中粒砂	10	1	3				1				1			1	1		1	2							12		33
		細粒砂	18		5				1																		22		46
		極細粒砂	14	1	5																						17		37
		粗粒シルト	4	1	3				1																		13		22
		中粒シルト	1		1																						1		3
	基質																												362
	孔隙																												31
05	砂	細礫												1															1
		極粗粒砂	1										1						1										3
		粗粒砂	11	4									3			1			1	2									22
		中粒砂	17	8	3								6			2			2	3				2					43
		細粒砂	23	8	8								4						1										44
		極細粒砂	26	4	12								2														1		45
		粗粒シルト	16	2	7							1																1	27
		中粒シルト	7	2	6																								15
	基質																												377
	孔隙																												15

第３表　薄片観察結果(2)

資料	砂粒区分		砂粒の種類構成																										合計
			鉱物片										岩石片														その他		
			石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	破砕状花崗岩	はんれい岩	ホルンフェルス	結晶片岩	粘土岩	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体	
06	砂	細礫																											0
		極粗粒砂																											0
		粗粒砂	9	2	2						3		1	1					3	4									25
		中粒砂	28	11	20		1				2		3			2			4	4							1		76
		細粒砂	20	7	20		1		1		1		3	1		1			2	2							2		61
		極細粒砂	15	4	5		1																				1		26
		粗粒シルト	3	1	2																						1		7
		中粒シルト	3		2																								5
	基質																												340
	孔隙																												15
07	砂	細礫			1																								1
		極粗粒砂			1															3									4
		粗粒砂	2		4	1	2													1		1							11
		中粒砂	3		8	1	6				1								2	1									22
		細粒砂	10		24		25		2		5																		66
		極細粒砂	11	1	19		32				1																		64
		粗粒シルト	5		8		12					1																	26
		中粒シルト	2		2		2																						6
	基質																												219
	孔隙																												2
08	砂	細礫																											0
		極粗粒砂	3	2										1						3									9
		粗粒砂	9	2													1		1	4									17
		中粒砂	5	1	1								2							1									10
		細粒砂	13	2	7		2						2							1							1		28
		極細粒砂	9	3	7		1																						20
		粗粒シルト	11	6	8																							1	26
		中粒シルト	6	2	4																							1	13
	基質																												214
	孔隙																												7
09	砂	細礫																											0
		極粗粒砂	3																							2			5
		粗粒砂	8	1									2			1			1	5									18
		中粒砂	10	5	3								1			1			2	3						1	1		27
		細粒砂	18	7	11				1				1			2			4	1							5		50
		極細粒砂	16	5	16		1			1																	4		43
		粗粒シルト	13	4	12																						1	2	32
		中粒シルト	3	3	7																							1	14
	基質																												298
	孔隙																												9
10	砂	細礫																											0
		極粗粒砂		1													1			1						2			5
		粗粒砂	13	2									2				3		6	10						1			37
		中粒砂	14	4	5				1				2					1	3	2						2	1		35
		細粒砂	20	5	9		1					1							2	1							2		41
		極細粒砂	15	3	6							1							1										26
		粗粒シルト	6	1	2																							1	10
		中粒シルト	2		1																								3
	基質																												287
	孔隙																												22

第３表　薄片観察結果(3)

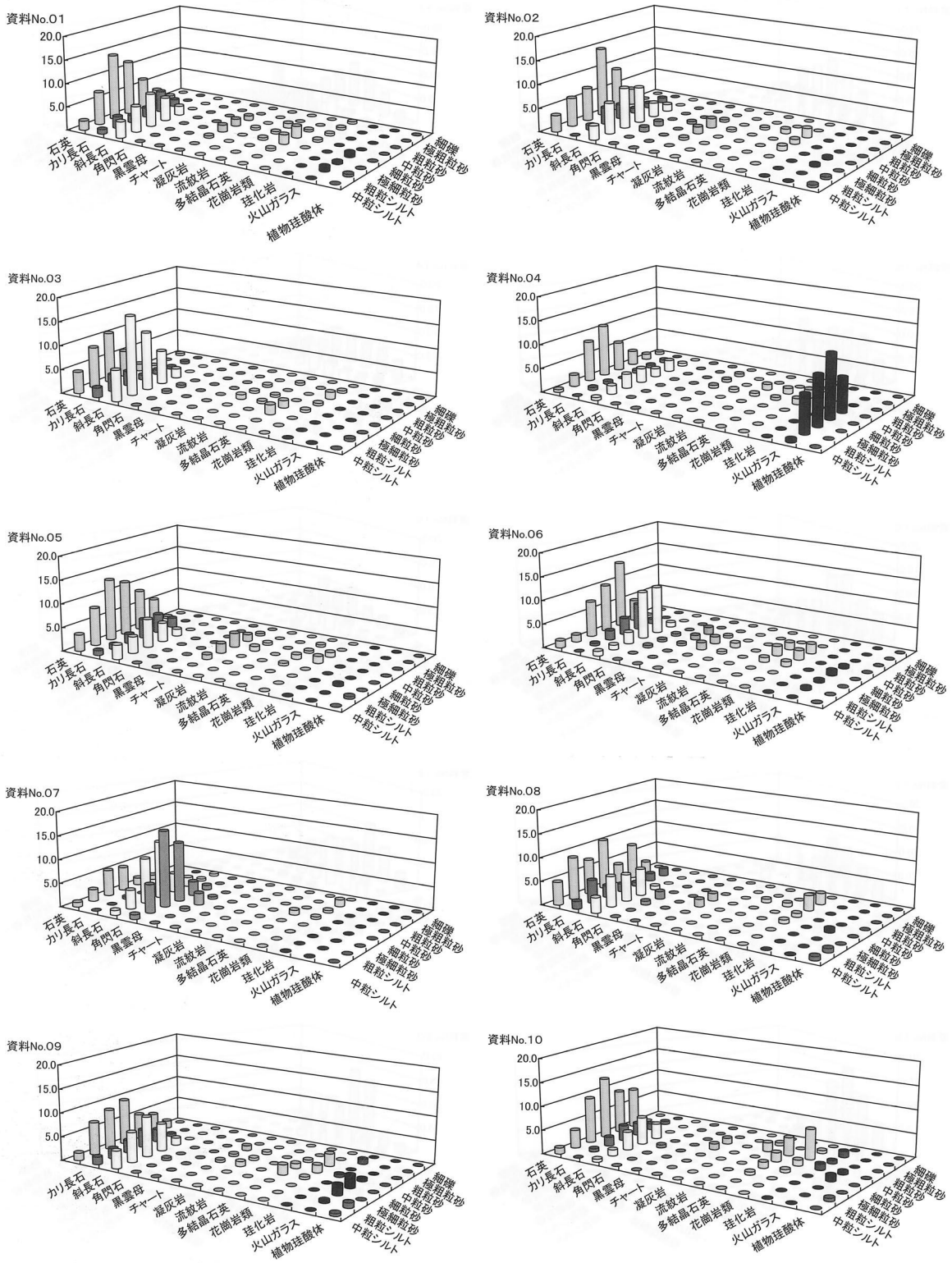
資料	砂粒区分		砂粒の種類構成																										合計
			鉱物片										岩石片														その他		
			石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	破砕状花崗岩	はんれい岩	ホルンフェルス	結晶片岩	粘土岩	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体	
11	砂	細礫																											0
		極粗粒砂		2																									2
		粗粒砂	12	7	2								2							5									28
		中粒砂	15	8	3		1						2						5	3									37
		細粒砂	20	8	10								2						1	1									42
		極細粒砂	15	8	10		1		1				1																36
		粗粒シルト	10	6	9							2																2	29
		中粒シルト	7	2	4																							1	14
	基質																												446
	孔隙																												14
12	砂	細礫																											0
		極粗粒砂																											0
		粗粒砂	5	1	2		1				5									3									17
		中粒砂	9		7		5				9								2	2									34
		細粒砂	13		8		8				17									1									47
		極細粒砂	12	1	6		6				2																		27
		粗粒シルト	7		4		1																						12
		中粒シルト	3		1																								4
	基質																												223
	孔隙																												17
13	砂	細礫																		1									1
		極粗粒砂																		2						1			3
		粗粒砂	14	2									1						2	3									22
		中粒砂	7	8	4												1		1	3									24
		細粒砂	14	5	12								1						1										33
		極細粒砂	15	4	14		1																						34
		粗粒シルト	15	8	15							1																2	41
		中粒シルト	8	3	7																							1	19
	基質																												275
	孔隙																												27
14	砂	細礫																											0
		極粗粒砂	3	2	1														1	3									10
		粗粒砂	4	5	2														1	1							1		14
		中粒砂	10	2	2														1								6		21
		細粒砂	9	2	8														2								17		38
		極細粒砂	8	1	4		2												1								21	1	38
		粗粒シルト	8	1	3																						7	2	21
		中粒シルト	6	2	3																								11
	基質																												375
	孔隙																												33
15	砂	細礫																											0
		極粗粒砂											1	1												1			3
		粗粒砂	5	2									1	1		1													10
		中粒砂	7	3	2								1			5	2		3	3							1		27
		細粒砂	19	6	7		1						1			1											2		37
		極細粒砂	21	7	10											1											2		41
		粗粒シルト	13	6	13							1															1	3	37
		中粒シルト	10	4	9																								23
	基質																												321
	孔隙																												19

第３表　薄片観察結果(4)

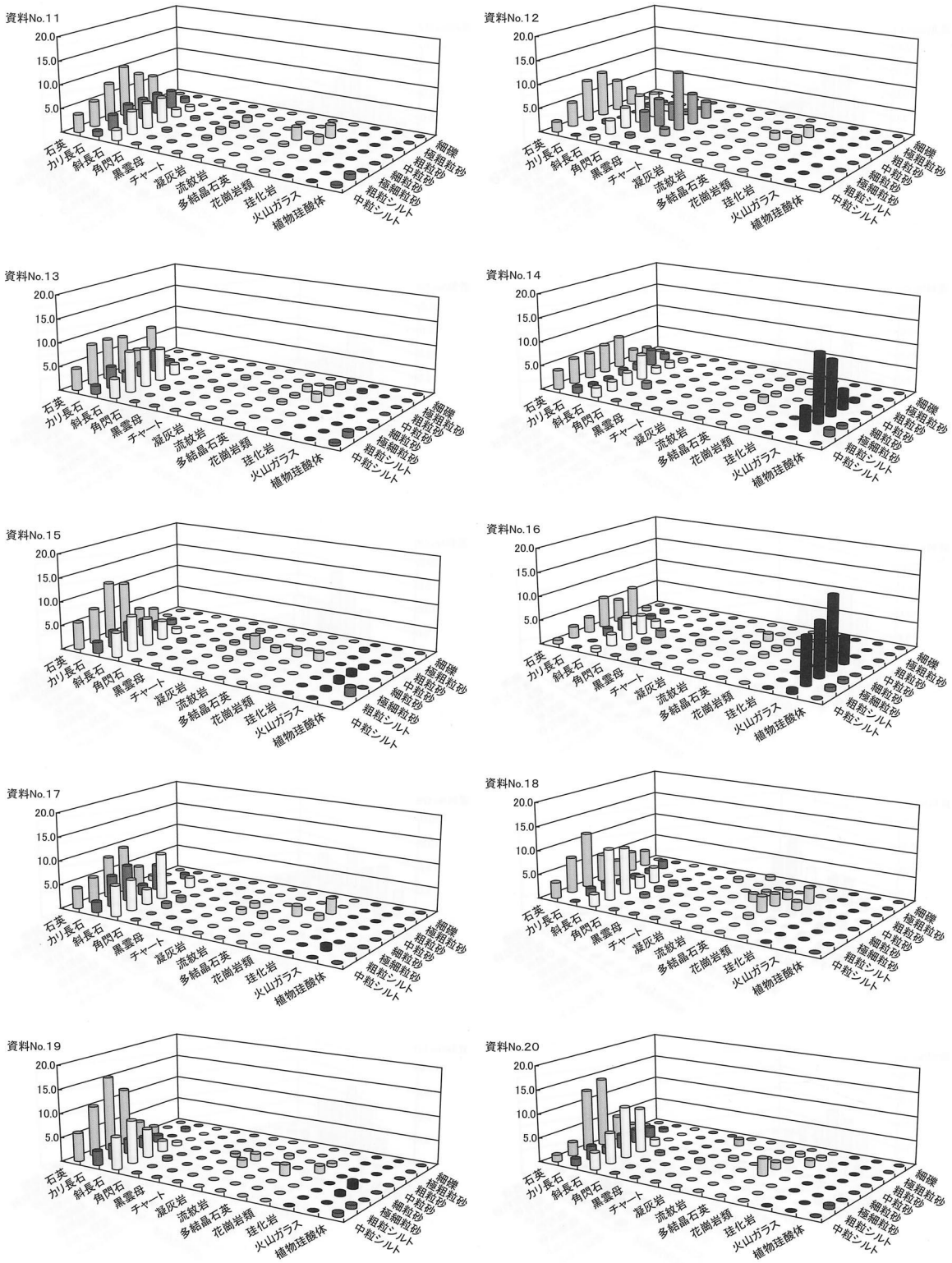
資料	砂粒区分		砂粒の種類構成																										合計
			鉱物片										岩石片														その他		
			石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	破砕状花崗岩	はんれい岩	ホルンフェルス	結晶片岩	粘土岩	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体	
16	砂	細礫																											0
		極粗粒砂	1	1																1	1				1				5
		粗粒砂	8	1													2		1	2									14
		中粒砂	6		2												1		1	1							7		18
		細粒砂	8	3	5		2						1						1								19		39
		極細粒砂	4	2	6		1																				14	1	28
		粗粒シルト	3		3		1																				12	1	20
		中粒シルト	1		1																						1		3
	基質																												300
	孔隙																												13
17	砂	細礫																											0
		極粗粒砂		1																									1
		粗粒砂	1		2															3				1					7
		中粒砂	4	5												1			2	1									13
		細粒砂	9	2	9		1									1	1												23
		極細粒砂	8	7	3		1																						19
		粗粒シルト	5	6	6				1																		1		19
		中粒シルト	4	2	6																								12
	基質																												284
	孔隙																												5
18	砂	細礫														1													1
		極粗粒砂	4	2									1																7
		粗粒砂	5	1											2		1		2	4									15
		中粒砂	4	1	4		1							1			2		3	2									18
		細粒砂	7	1	3		1		1	2				1					4										20
		極細粒砂	14	2	12		1					1							1										31
		粗粒シルト	9	2	13																								24
		中粒シルト	4		3																								7
	基質																												323
	孔隙																												14
19	砂	細礫																											0
		極粗粒砂		1																									1
		粗粒砂	2														1			1									4
		中粒砂	5	2	1								1			2				2									13
		細粒砂	16	3	3											2			3								2		29
		極細粒砂	21	4	8		1																				1		35
		粗粒シルト	14	4	12																							1	31
		中粒シルト	8	4	9																							1	22
	基質																												244
	孔隙																												18
20	砂	細礫																											0
		極粗粒砂	1	1									2						1	1									6
		粗粒砂	3	3										2					1	2									11
		中粒砂	7	4	2											1			2										16
		細粒砂	20	4	13		1	2					1						5										46
		極細粒砂	18	2	15																								35
		粗粒シルト	4	4	9																							1	18
		中粒シルト	2	2	5																								9
	基質																												298
	孔隙																												23

第３表　薄片観察結果(5)

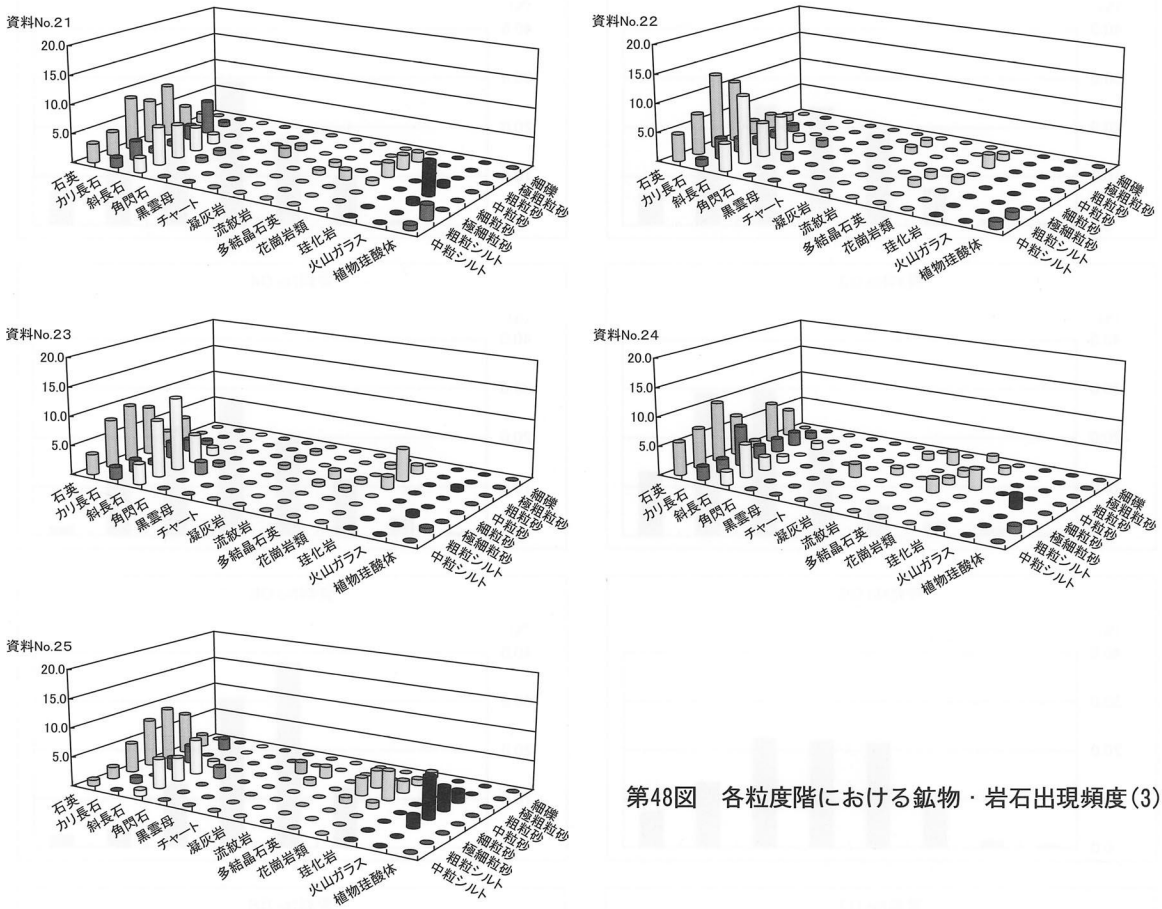
資料	砂粒区分		砂粒の種類構成																										
			鉱物片										岩石片														その他		合計
			石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	破砕状花崗岩	はんれい岩	ホルンフェルス	結晶片岩	粘土岩	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体	
21	砂	細礫																											0
		極粗粒砂	2	1																2									5
		粗粒砂	5	7									1							3									16
		中粒砂	11	3	2								2				1			3							1		23
		細粒砂	9	1	5		1										1		2	1							7		27
		極細粒砂	11	1	7		1																				1		21
		粗粒シルト	5	4	8							1																3	21
		中粒シルト	4	2	3																							1	10
	基質																												338
	孔隙																												13
22	砂	細礫																											0
		極粗粒砂	1													1				1									3
		粗粒砂	2	1										1		1		1		2									8
		中粒砂	2	1	1		1																						5
		細粒砂	9	1	5			1		1									1	1									19
		極細粒砂	11	2	5		1												1										20
		粗粒シルト	6	3	10							1																1	21
		中粒シルト	4	1	4																							1	10
	基質																												222
	孔隙																												12
23	砂	細礫																											0
		極粗粒砂											1						1	2									4
		粗粒砂	6	1									1	2						8							1		19
		中粒砂	4	3	2								1				2		1	3			1						17
		細粒砂	12	4	7		1										1		1										26
		極細粒砂	14	1	18		3																				1		37
		粗粒シルト	12	3	14																							1	30
		中粒シルト	5	3	5																								13
	基質																												354
	孔隙																												20
24	砂	細礫																	1										1
		極粗粒砂	4	1										2		1	2			1	1								12
		粗粒砂	6	2	1														1		2								12
		中粒砂	1	2												1			1	3									8
		細粒砂	6	2	1								2						2								2		15
		極細粒砂	9	6	2																								17
		粗粒シルト	6	2	5																							1	14
		中粒シルト	5	2	2																								9
	基質																												249
	孔隙																												32
25	砂	細礫																		1									1
		極粗粒砂	2	2																1									5
		粗粒砂	7										2			2			3	2							2		18
		中粒砂	9	3	1											1			3	5							4		26
		細粒砂	8	2	6		2												1	1							7		27
		極細粒砂	5		4							1															2		12
		粗粒シルト	2	1	5				1																				9
		中粒シルト	1		1																								2
	基質																												348
	孔隙																												19



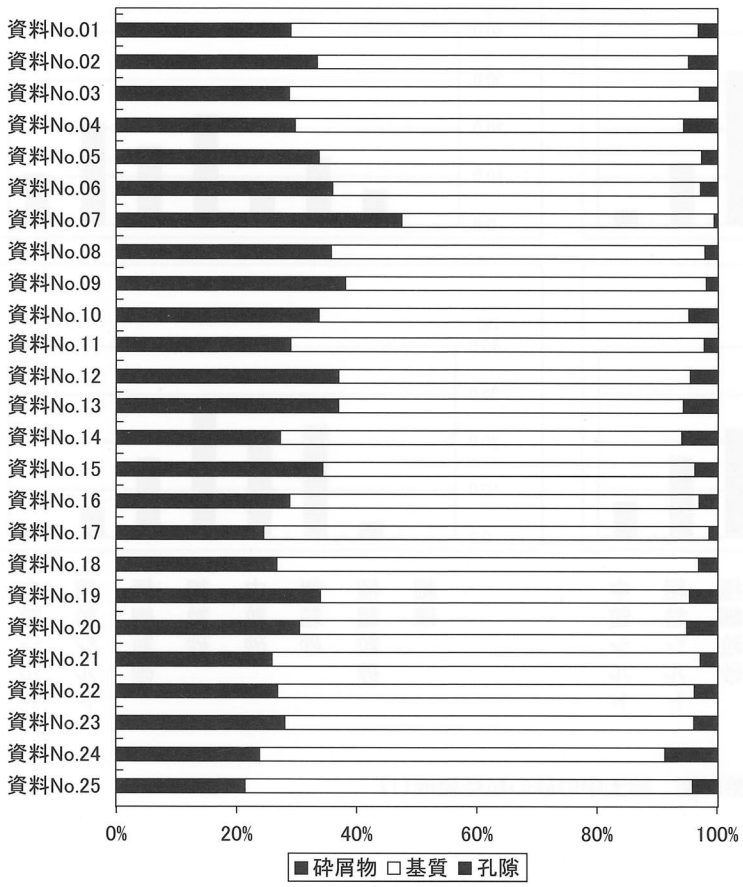
第48図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)



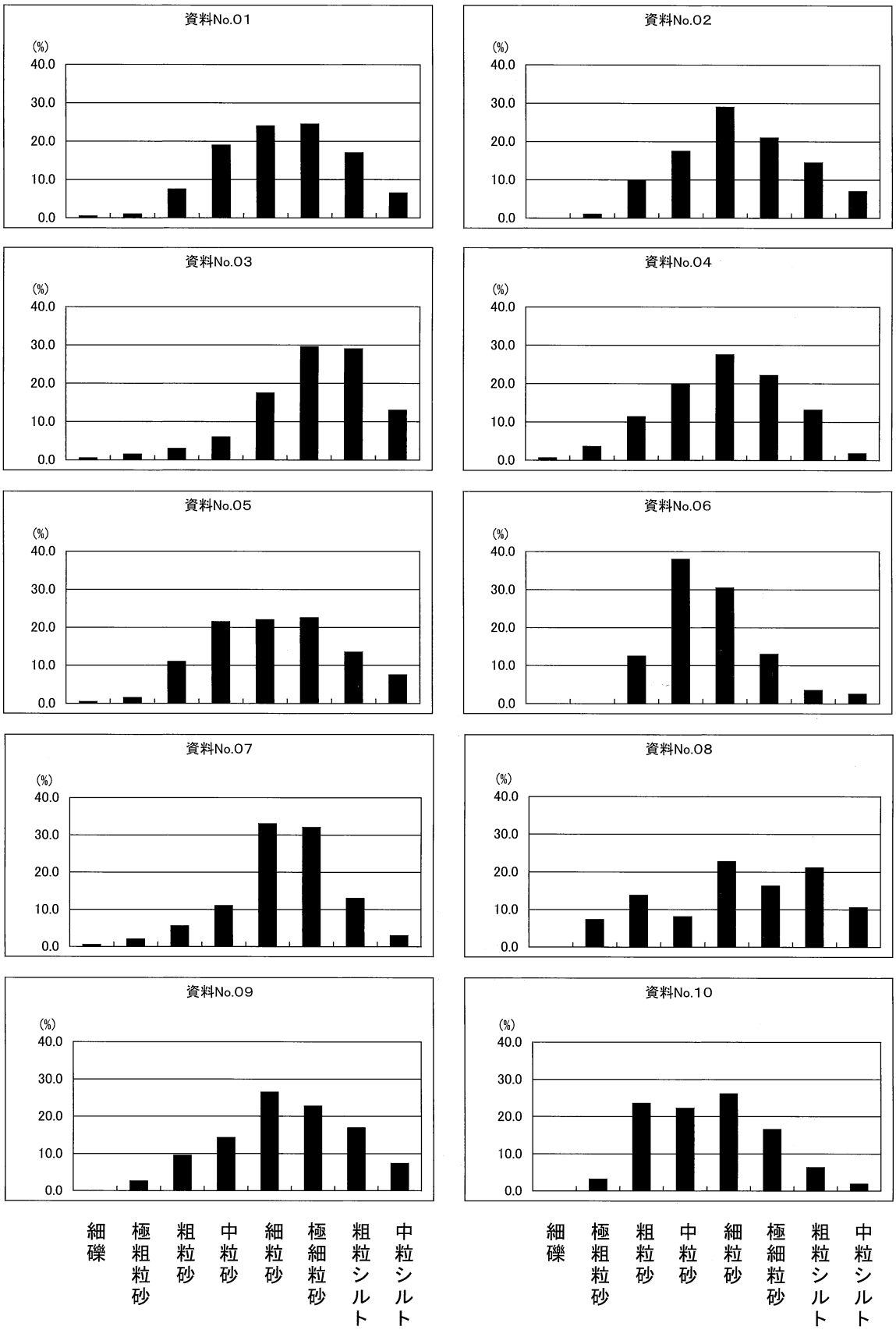
第48図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(2)



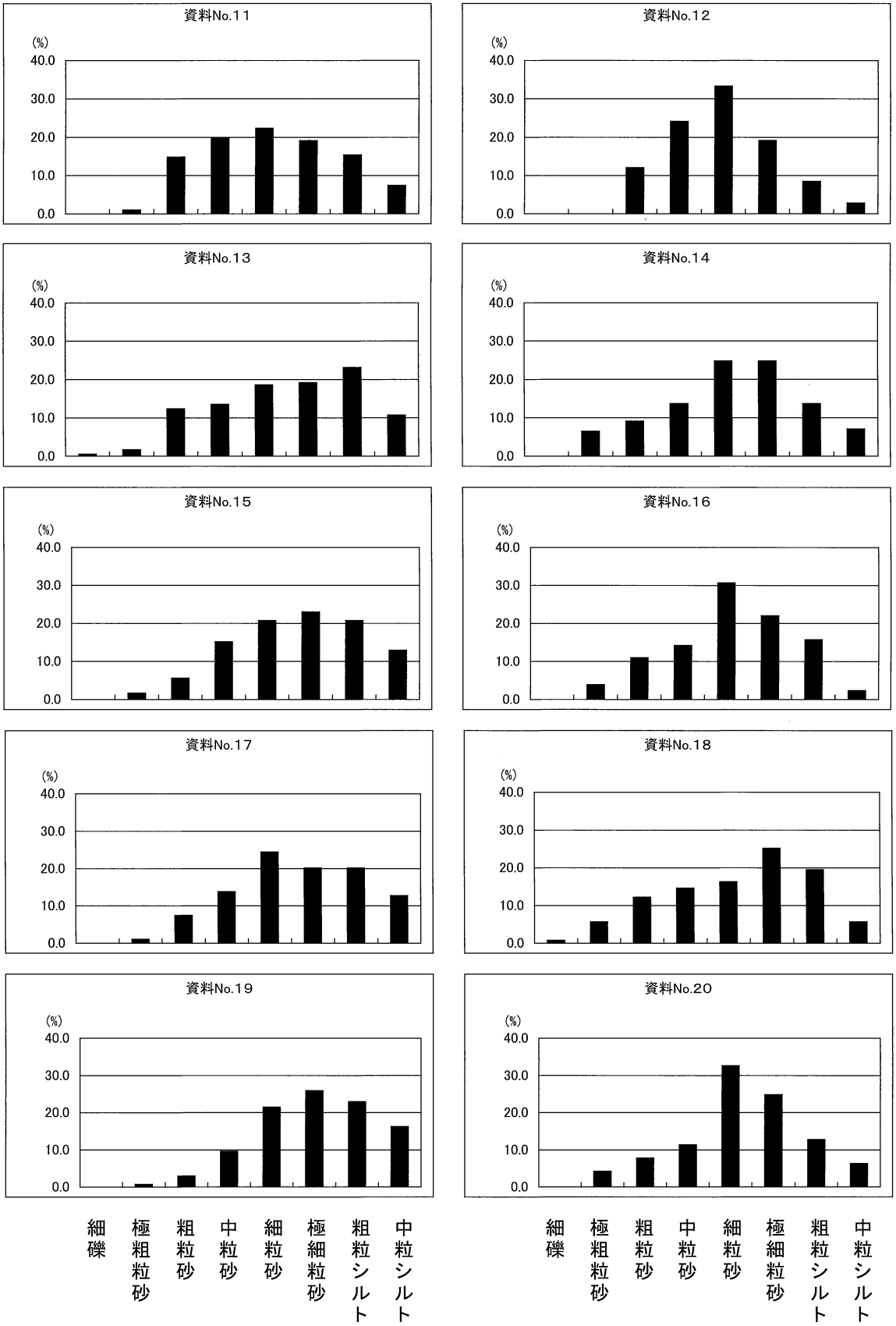
第48図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(3)



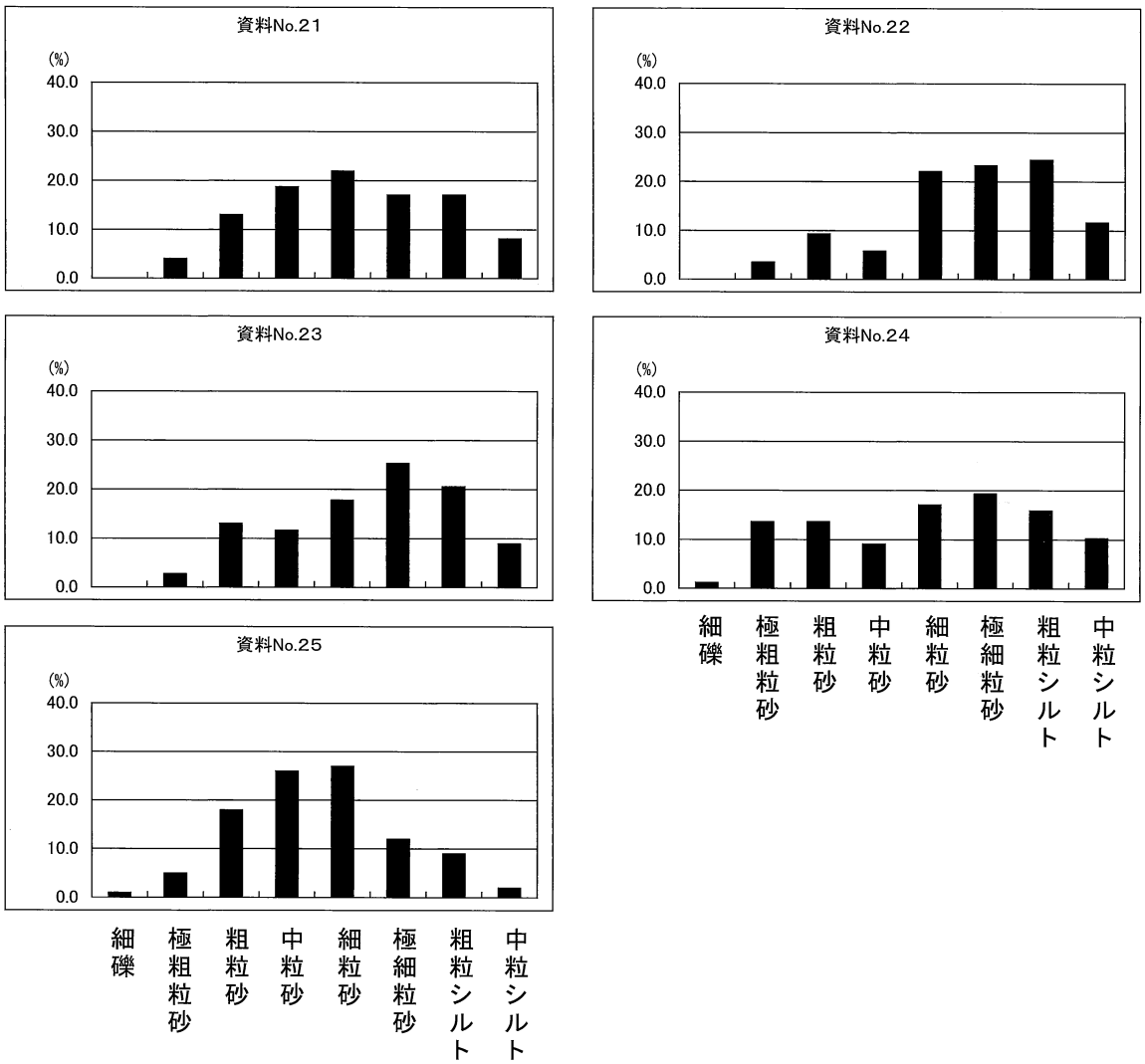
第49図　孔隙・砂粒・基質の割合



第50図　胎土中の砂の粒径組成(1)



第50図　胎土中の砂の粒径組成(2)



第50図　胎土中の砂の粒径組成(3)

粒径組成の状況を、ピークを構成する粒径を表記することで表す。

前述した鉱物片および岩石片の種類構成による分類と上述の粒径組成の状況を表記した結果を第２表に併記する。この結果を土器の器種ごとにみると以下のようになる。

1）壺

資料№.07がＢ1類であるほかは、全てＡ類であり、そのうち、資料№.04と中期の試料である資料№.25がＡ2類、他はＡ1類である。

一方、粒径組成では、各試料間にばらつきが認められる。まず、前期の資料№.24では、粒径の淘汰が不良であり、極粗粒砂から粗粒砂のピークと細粒砂から粗粒シルトまで含む非常になだらかなピークとが存在する。これに対して中期の資料№..25では、中粒砂と細粒砂からなるピークを持つ。後期の試料では、中粒砂から極細粒砂までおよぶなだらかなピークを持つ資料№.01・№.05、同様になだらかなピークであるが、それを構成する粒径は細粒砂から粗粒シルトである資料№.03、粗粒砂のピークと細粒砂から粗粒シルトからなるピークの複数のピークをもつ資料№.08、細粒砂からなる比較的明瞭なピークを持つ資料№.02・№.04の４種類に分けられる。さらに後期の試料では、中粒砂に比較的明瞭なピークを持つ資料№.06と上述した資料№.03とほぼ同様の資料№.15・№.17とに分けられる。なお、Ｂ1類の資料№.07は

上述した中期の資料№.25と同様の中粒砂と細粒砂からなるピークを示す。

2）甕

資料№..12がＢ2類であるほかは、全てＡ類であり、そのうち、資料№.14・№.16の２点がＡ2類であった。

粒径組成では、細粒砂に比較的明瞭なピークを示す資料№.09と粗粒砂から細粒砂におよぶなだらかなピークを有する資料№.10・№.11とに分かれる。また、Ｂ2類の資料№.12とＡ2類の資料№.16とが共に細粒砂にピークをもつ組成である。資料№.13は細粒砂から粗粒シルトにおよぶなだらかなピークを持ち、資料№.14は細粒砂と極細粒砂からなるピーク、資料№.18は極細粒砂からなるピークを示す。

3）鉢

資料№.19と№.20は、ともにＡ1類である。粒径組成では、資料№.19は細粒砂から粗粒シルトにおよぶなだらかなピークを示し、資料№.20は極細粒砂に比較的明瞭なピークを示す。

4）高坏・高坏脚

いずれもＡ1類である。粒径組成では、資料№..21は中粒砂から粗粒シルトにおよぶなだらかなピークを示し、資料№.22と№.23は共に、粗粒砂のピークと細粒砂から粗粒シルトにおよぶなだらかなピークとの複数のピークを持つ。

4．考察

(1) 小阪田遺跡の地質学的背景と胎土中の鉱物・岩石

小阪田遺跡の位置する低位段丘～沖積低地は、主に猪名川とその水系の河川（特に箕面川）により形成されたと考えられる。したがって、それを構成する砂や粘土中には、猪名川とその水系の流域に分布する地質（岩石）に由来する砕屑物が主として含まれていると考えられる。大阪平野北西部の背後に広がる地質については、藤田・笠間（1982）や河田ほか（1986）に記載がある。これらに従えば、猪名川上流の左岸側、主に大阪府川西市・池田市・箕面市の北部地域に広がる山地は、古生代末から中生代にかけて形成された堆積岩類からなる丹波帯と呼ばれる地質が分布する。丹波帯には主にチャートや頁岩、砂岩などが分布しているが、局所的に緑色岩とよばれる変質した火山岩類の分布も認められている。一方、猪名川上流の右岸側、主に兵庫県宝塚市・神戸市北部の山地に広がる地質は、中生代白亜紀～新生代古第三紀にかけて噴出したとされる流紋岩質の凝灰岩および流紋岩溶岩からなる有馬層群である。さらに、猪名川支流の余野川流域、豊能町付近の山地には白亜紀に貫入した花崗岩類の岩体が分布し、これと同時期の花崗岩類の岩体は、大阪平野北西部北縁に臨む宝塚市の石切山にも分布している。小阪田遺跡の位置する沖積低地には、上述した種類の岩石片とそれら岩石片に由来する鉱物片が混在していることになる。

今回の分析でＡ類とした胎土の岩石片の種類構成は、上述した小阪田遺跡の地質学的背景と非常によく一致する。なお、多結晶石英とした岩石片は、おそらくチャート中の脈石英の破砕片か花崗岩類の破砕片に由来すると考えられる。また、極めて微量検出されている岩石片のうち、安山岩とした岩石片は有馬層群、破砕状花崗岩は断層で破砕された白亜紀花崗岩類、ホルンフェルスは丹波層群に貫入した白亜紀花崗岩類の周縁に形成されたもの、結晶片岩は丹波層群中の緑色岩類、珪化岩は丹波層群中の岩石にそれぞれ由来すると考えられる。これらのことから、Ａ類の胎土は、猪名川下流域の段丘～沖積低地およびその周辺部で採取された砂あるいは粘土に由来する可能性が高い。ここで、Ａ類を細分した火山ガラスの由来については、それが形状（例えば薄手平板状のバブル型など）を比較的良く保った新鮮なものであることから、平野に分布する段丘および丘陵を構成する主に第四紀更新世の堆積層からなる大阪層群中に挟まれるテフラ層に由来すると考えられる。したがって、Ａ2類のように多量に火山ガラスを含むような堆積物は、例えば河川砂や河川の泥などではなく、段丘や丘陵の崖に露出した大阪層群の

砂や泥あるいは粘土などに由来する可能性が高い。この場合、小阪田遺跡では、段丘崖に露出した砂や泥などは至近にあったと考えられることから、材料入手という点では、A1類とA2類の胎土との間に差はないと考えられる。

なお、猪名川の支流である箕面川の流域をみると、丹波層群が分布する山地内に水源があり、平野に出るまで、他の地質の分布する地域を通っていない。したがって、箕面川が平野にもたらす砕屑物のほとんどは、丹波層群に由来するチャートや砂岩、頁岩などであることが推定される。しかし、今回分析した小阪田遺跡出土土器の中には、例えば上記堆積岩のみからなるような岩石片の種類構成を示す胎土は認められなかった。すなわち、今回の分析結果では、箕面川の沿岸に位置するという小阪田遺跡の地理的特徴は、土器胎土には反映されていないと言える。

B類とした胎土については、その鉱物片および岩石片の種類構成から、角閃石と黒雲母を斑晶として含む花崗閃緑岩～石英閃緑岩が分布し、それ以外の地質が分布しないような背景を持つ地域に由来すると考えられる。大阪平野北西部周辺においてほとんど花崗岩類のみしか分布しない地質学的背景を有する地域としては、西宮市から神戸市に至る海岸平野地域があるが、背景となる六甲花崗岩は、黒雲母花崗岩であり、角閃石はほとんど含まれない（笠間，1968）。したがって、B類の由来する地域である可能性は低い。一方、生駒山地には、白亜紀に形成された領家帯の花崗岩類が分布するが、その中には角閃石黒雲母石英閃緑岩や角閃石黒雲母花崗閃緑岩などの分布が記載されている（生駒山地領家帯研究グループ，1986）。特に、B1類の資料№.07には極めて微量の斑れい岩も検出されているが、これは、生駒山に分布する斑れい岩体に由来する可能性がある。このようにB類とした資料№.07および№.12は、それらの記載とは矛盾しないという点において、生駒西麓産である可能性がある。ただし、その地域の特定は今後の分析例の蓄積が必要と考えられる。

(2) 土器の器種および時期と胎土との関係について

結果の項で述べたように、今回の試料においては、器種と胎土との間には、含有される砂の粒径組成という特徴からみると、それぞれ傾向が異なっており、相関性の存在する可能性が高い。また、壺においては、時期による違いもある可能性が高い。したがって、同一あるいは至近の地域内と考えられる土器の材料の採取地あるいは製作地において、粒径組成の違いは、その中での製作者の場所的および時間的な違いを示唆する可能性がある。一方で、B類のような大阪平野北西部地域外からの搬入品である可能性の高い土器も検出することができた。今後、小阪田遺跡から周辺の弥生遺跡におよぶ土器の胎土分析例を得ることができれば、それと考古学所見とを整理することにより、大阪平野北西部地域における弥生時代の動態にかかわる有意な資料の作成が望めると考える。

[引用文献]

藤田和夫・笠間太郎　1982　大阪西北部地域の地質．地域地質研究報告（５万分の１図幅），地質調査所，112p.

生駒山地領家帯研究グループ　1986　生駒山はんれい岩体について．地球科学，40,102-114.

笠間太郎　1968　六甲山地の花崗岩類．地質学雑誌，74,147-158.

河田清雄・宮村　学・吉田史郎　1986　20万分の１地質図幅　京都及大阪．地質調査所.

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高　1999　瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－．日本文化財科学会第16回大会発表要旨集，120-121.

第２節　小阪田遺跡から出土した柱材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

小阪田遺跡Ａ地区から検出された古代の建物跡SB04では、４本の柱穴内に柱材が残存していた。本報告では、柱材の樹種を明らかにするため、樹種同定を実施する。

１．試料

試料は、Ａ地区のSB04の柱穴から出土した柱材４点（W-１～W-４）である。各試料は、全て切片の作成とプレパラートへの封入が終了した状態で受領した。

２．分析方法

プレパラートを生物顕微鏡で観察し、木材組織の特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）およびWheeler他（1998）、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林（1990）、伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にした

３．結果

樹種同定結果を表１に示す。柱は、全て針葉樹のヒノキに同定された。解剖学的特徴等を記す。

・ヒノキ（Chamaecyparis obtusa（Sieb. et Zucc.）Endlcher）　ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は早材部の終わりから晩材部にかけて認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、１分野に１-３個。放射組織は単列、１-15細胞高。

第４表　樹種同定結果

資料No.	報告No.	種別	器種	時期	地区	遺構	遺構2	樹種
W-1		木器	柱	古代	Ａ地区	SB04	P411	ヒノキ
W-2	W3	木器	柱	古代	Ａ地区	SB04	P416	ヒノキ
W-3	W1	木器	柱	古代	Ａ地区	SB04	P402	ヒノキ
W-4	W2	木器	柱	古代	Ａ地区	SB04	P413	ヒノキ

４．考察

SB04から出土した柱は、４本とも針葉樹のヒノキに同定された。ヒノキは、常緑針葉樹で、胸高直径１ｍ、樹高30mの大木になる樹種である。木材は、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易で耐水性が高い。このような材質は、柱材としても適材といえる。

ヒノキは、柱材の中でも出土例が比較的多い種類である（島地・伊東1988）。中村（2001）では、兵庫県内で出土した古代の柱材27点についての樹種同定結果が紹介されている。その結果をみると、全て針葉樹材で、ヒノキ11点、カヤ13点で、他にアスナロ、ツガ、モミが各１例ある。このうち、カヤ12点は淡路地方から出土したものであり、１例が播磨地方から出土したものである。一方、ヒノキは、全て播磨および摂津地方から出土したもの、アスナロ、ツガ、モミは摂津地方から出土したものである。また、建築部材の樹種は、古墳時代までは広葉樹、古代以降はヒノキ、カヤに樹種の利用が変化していることも指摘されている。今回の結果は、既往の調査成果と同調する結果といえる。

［引用文献］

林　昭三　1991　日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．

伊東隆夫　1995　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料31　京都大学木質科学研究所　81-181．

伊東隆夫　1996　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料32　京都大学木質科学研究所　66-176．

伊東隆夫　1997　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料33，京都大学木質科学研究所　83-201．

伊東隆夫　1998　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料34　京都大学木質科学研究所　30-166．

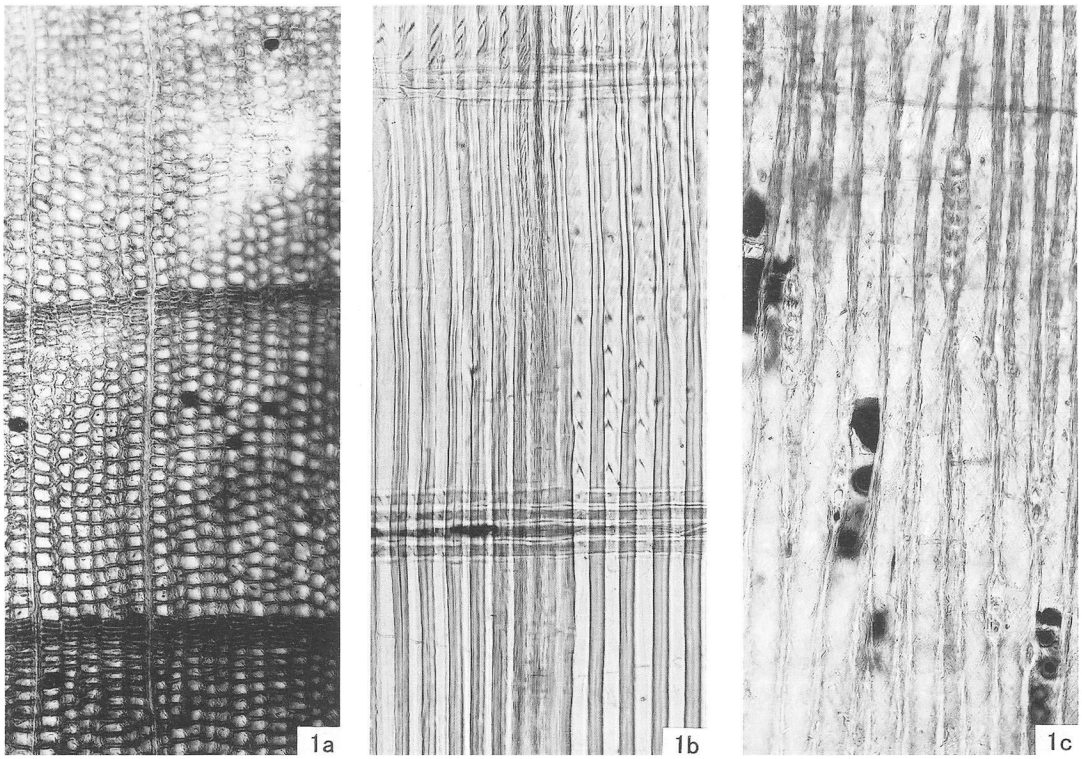
伊東隆夫　1999　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料35　京都大学木質科学研究所　47-216．

中村　弘　2001　兵庫県における樹種同定資料について．兵庫県埋蔵文化財研究紀要　創刊号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　103-121．

島地　謙・伊東隆夫　1982　図説木材組織　地球社　176p.

島地　謙・伊東隆夫(編)　1988　日本の遺跡出土木製品総覧．雄山閣　296p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）1998　広葉樹材の識別　ＩＡＷＡによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）海青社　122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］．



1. ヒノキ(W-2)
a:木口，b:柾目，c:板目

200 μm:a
100 μm:b,c

第51図　木材組織顕微鏡写真

第５章　まとめ

第１節　小阪田・豊島南遺跡群の変遷（第52図）

小阪田遺跡は箕面川左岸に位置する。この小阪田遺跡を理解するうえには府県境を接した大阪府池田市豊島南遺跡[1]と合わせて考える必要がある。第52図には小阪田遺跡と豊島南遺跡を合わせた時期別の遺構変遷の概要の主要なものを示した。以下、時代順に変遷の概要を述べる。

１　縄文時代後期

縄文時代後期は小阪田遺跡Ｂ・Ｃ地区で流路SD03を検出した。厳密に言うと中期後葉の土器から後期縁帯文土器まで出土しており、中心は後期初頭である。豊島南遺跡でも遺構に伴わない後期の土器が出土している。後世の削平が著しいが、付近に集落が存在した可能性が高い。

２　縄文時代晩期

縄文時代晩期は豊島南遺跡で土器がわずかに出土しているのみで、小阪田遺跡では遺構・遺物ともに検出していない。

３　弥生時代前期

弥生時代前期は小阪田遺跡Ｂ地区で、弥生後期を中心とした溝SD04から完形に近い壺が出土しているのみである。

４　弥生時代中期

弥生時代中期は豊島南遺跡で後半の方形周溝墓２基が検出されており、供献土器が出土している。小阪田遺跡ではＢ地区で弥生後期を中心とした溝SD04から壺・鉢・高坏が出土している。

５　弥生時代後期

弥生時代後期は小阪田遺跡Ｂ地区で南北溝SD04があり、多量の土器が出土している。西側に平行して走る溝SD05はＤ地区のSD107とつながり土器が出土している。多量の土器が出土していることから、付近に集落の存在する可能性が高く、溝の性格は小阪田・豊島南遺跡群南側低地の大規模な開田に伴う箕面川からの灌漑水路であると考えられる。

６　古墳時代前期

古墳時代前期は引き続き南北溝が走り、豊島南遺跡Ｉ区のSD-1と小阪田遺跡Ｄ地区SD107・Ｂ地区SD05、Ｄ地区にSD101がある。Ａ地区には屈曲する溝SD20がある。小阪田遺跡Ｄ地区SD107・Ｂ地区SD05より東側は居住域であり、小阪田遺跡Ｃ地区でSH02を、豊島南遺跡Ｉ区でSB-4・SB-5を、Ⅲ区でSB-6の方形の竪穴住居を検出している。

７　古墳時代中期

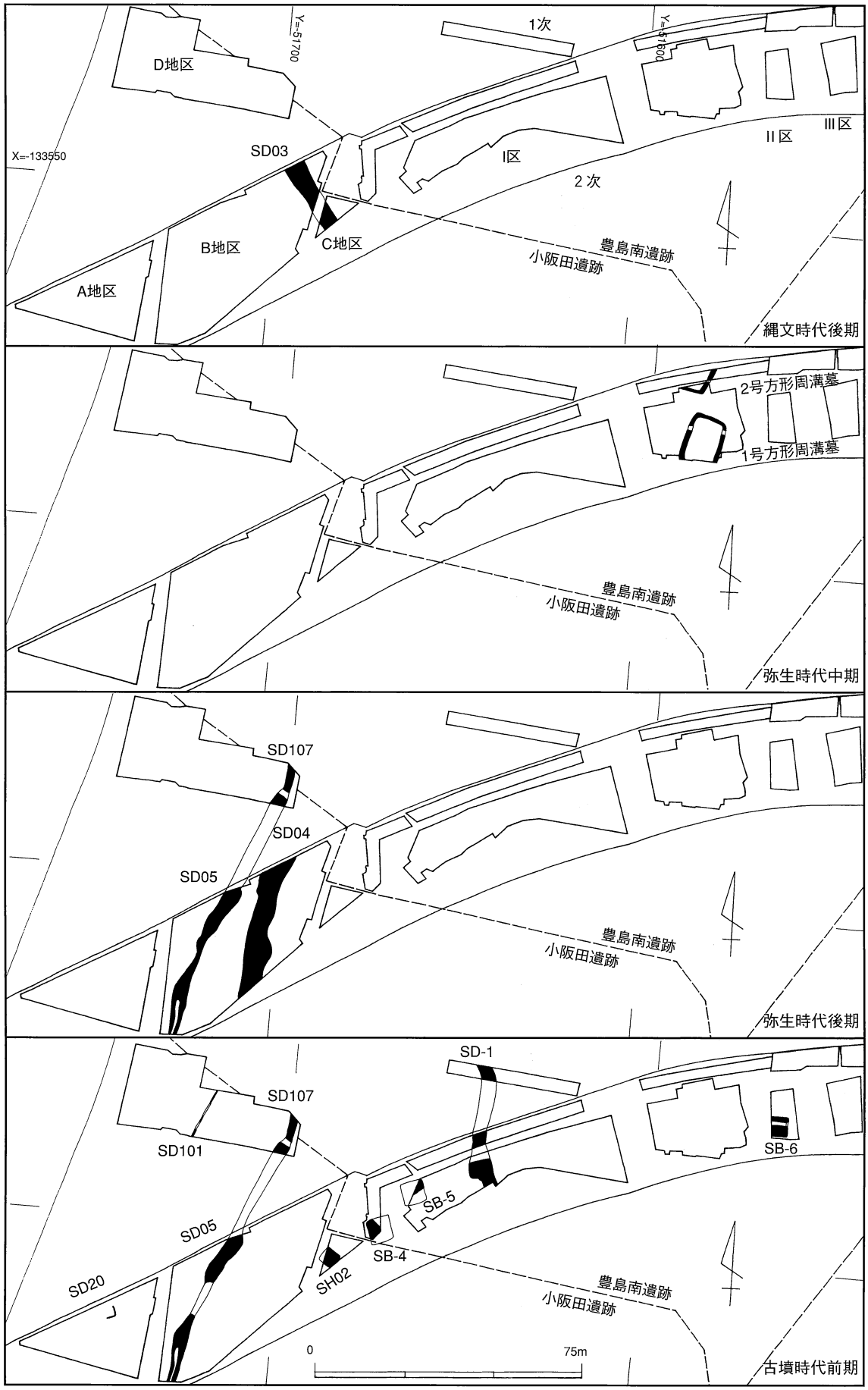
古墳時代中期前半は、豊島南遺跡Ｉ区で方墳のコーナーと考えられるSK-1を検出している。中期後半は居住域になっており、小阪田遺跡Ｃ地区でSH01を豊島南遺跡Ⅱ区でSB-1・SB-2・SB-3の方形の竪穴住居を検出している。

８　古墳時代後期

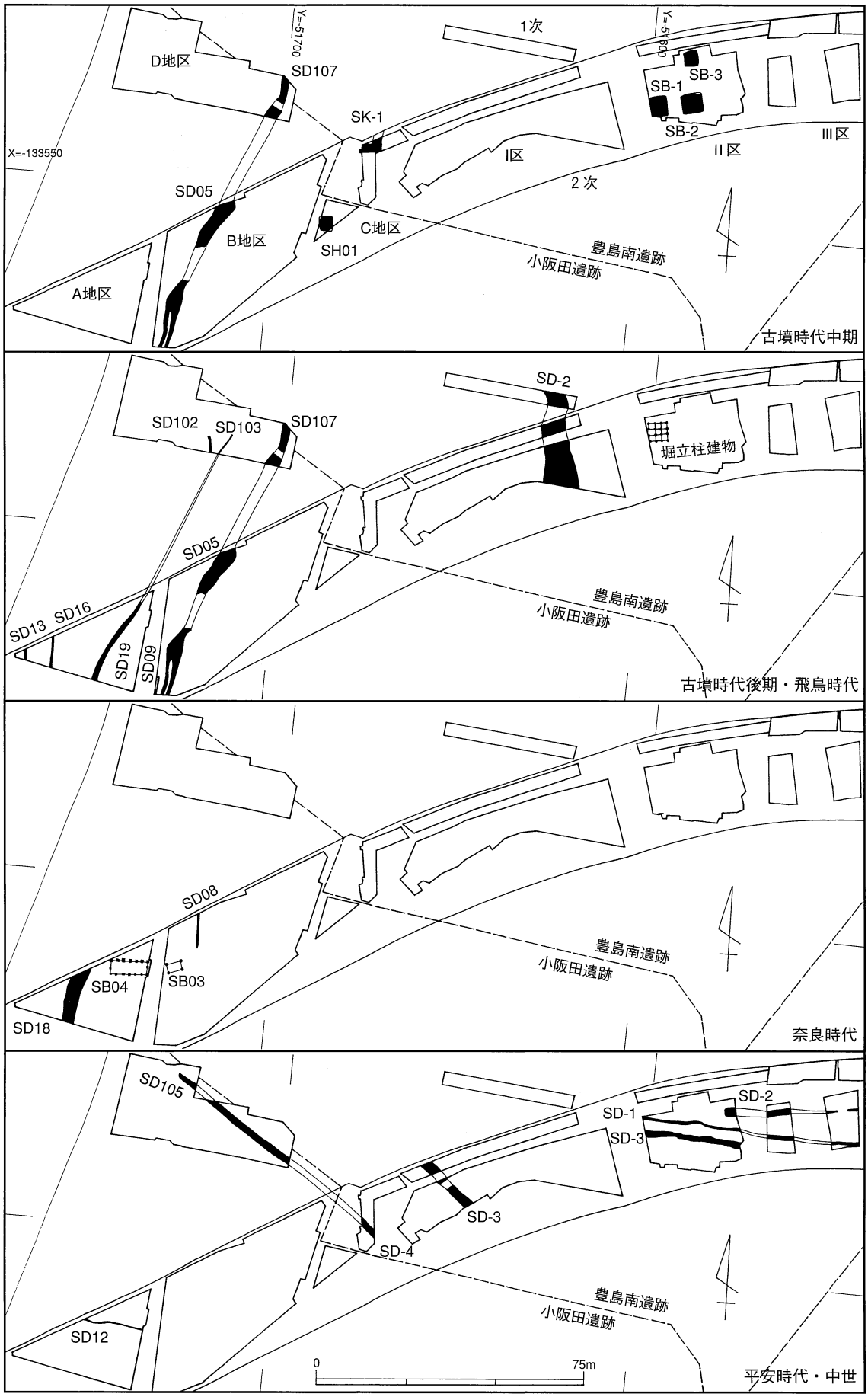
古墳時代後期は豊島南遺跡Ｉ区で南北溝SD-2があり、Ⅲ区で形の竪穴住居SB-8を検出している。小阪田遺跡では南北溝がＤ地区SD107・Ｂ地区SD05、Ｄ地区にSD101がある。

９　飛鳥時代

飛鳥時代は豊島南遺跡Ⅱ区で総柱の掘立柱建物が検出されている。小阪田遺跡では南北溝がＡ地区の



第52図　小阪田・豊島南遺跡群の変遷(1)



第52図　小阪田・豊島南遺跡群の変遷(2)

SD13があり、D地区SD107・B地区SD05、D地区SD103・A地区SD19がある。B地区にはSD09がある。

10　奈良時代

奈良時代は小阪田遺跡A地区で正方位の東西棟の掘立柱建物SB04を検出している。B地区では掘立柱建物SB03と南北溝SD08を検出している。A地区の南北溝群はSD18から奈良時代の遺物が出土しており、奈良時代の可能性がある。

11　平安時代

平安時代は豊島南遺跡Ⅱ区で東西方向の正方位の溝SD1・2・3を検出している。SD1から12世紀中ごろの瓦器椀が出土している。開削年代はさかのぼる可能性があり、豊島北条の条里坪界溝と考えられる。小阪田遺跡A地区では東西溝を検出している。

12　中世

中世は斜行する溝がある。斜行する溝は小阪田遺跡D地区のSD105が豊島南遺跡Ⅰ区のSD-4に続いており、東側に平行する溝SD-3がある。これらの斜行する溝は、現在の兵庫県と大阪府の府県境にほぼ一致しており、川辺郡・豊島郡の境界でもある。

第2節　遺跡立地の要因と景観

前節で小阪田・豊島南遺跡群の変遷を見たが、各時代の遺跡成立要因と景観を考えてみる。

弥生時代中期以前は、箕面川の扇状地に形成された湧水である出水を水源に生活行っていたと考えられる。江戸時代の村絵図や明治時代の村絵図(2)には、出水が描かれており、小阪田遺跡のすぐ南側の「ぬく井上池」・「ぬく井下池」の出水や小阪田遺跡北側の豊島郡今在家村の「清水」・「弁慶淵」の出水などがあり、小坂田村や中村の水田を潤していた。

縄文時代は出水を中心に、起伏のある自然景観を生かした集落が営まれたと考えられ、小坂田・豊島南遺跡群や大阪空港A遺跡など広域な遺跡群としてとらえなければならない。

弥生時代以降は水田の開発が行われたと考えられるが、水田域は出水より下流に形成され、規模も小規模だったことが考えられる。出水周辺には集落が営まれ、近くに墓が形成された（豊島南遺跡）。

弥生時代後期には、小阪田・豊島南遺跡群で箕面川からの灌漑水路と考えられる溝が掘削されていることから、南側の低地は大規模な開田が行われたと考えられる。弥生時代後期以降の土器が多量に出土していることから、これ以降、古墳時代にかけては居住域として位置づけられる。

古代以降の遺跡立地の要因は条里の施工と山陽道によるところが大きいと考えられる。豊島郡条里の施工は旧来までの自然地形を生かした水路であったものが、正方位の区画による耕地化と水路の掘削が行われ、地形は広域に平坦化された。小阪田・豊島南遺跡群は次節で述べるとおり、豊島北条十五条二里に位置づけられ、小阪田遺跡A地区の掘立柱建物SB04は豊島北条十五条二里五坪に位置づけられる。山陽道は遺跡群の北側約350mの地点を斜行しており、草野駅と芦屋駅の間に位置する。

中世後半には、川辺郡と豊島郡の境界溝が掘削されている。

以上のように時代によって遺跡の成立要因が異なっていることが判明した。

第３節　川辺郡・豊島郡の境界

小阪田遺跡周辺の猪名川左岸地域は正方位の条里地割が顕著に残っている。しかし、川辺郡と豊島郡の境界は北西から南東に斜行しており、一部が入り組んでいる。旧小坂田村は斜行した境界西側の川辺郡に属している。

条里地割の施工年代は明らかにされていないが、小阪田遺跡周辺の条里地割は豊島北条の坪付方式である。小阪田遺跡Ａ地区の奈良時代の正方位の掘立柱建物SB04は、条里地割の施工を奈良時代に遡らせる可能性がある。豊島南遺跡Ⅱ区の東西方向の坪界溝SD１・２・3は12世紀中ごろの遺物が出土している。豊島郡条里の復原(3)によれば、今回の調査地点は豊島北条十五条二里の中に位置づけられ、小阪田遺跡のＡ地区とＢ地区の間の水路および、Ｄ地区の撹乱とした南北溝が、五坪と八坪の坪界溝にあたることがわかる。また、豊島南遺跡Ⅱ区の東西溝SD1が八坪と九坪の坪界溝にあたることがわかる。

文献(4)では、10世紀に編纂された『和名類聚鈔』に、摂津国豊島郡の７郷のうちの一つとして「桑津」をあげている。安貞元年（1227）の『勝尾寺文書』には「豊嶋北条西桑津新庄」とあり、猪名川左岸は鎌倉時代初期までは豊島郡であったことがわかる。

このことから、古代から鎌倉時代初期までは猪名川東岸を中心とする豊島郡条里は豊島郡、猪名川西岸を中心とする川辺郡条里は川辺郡というように、猪名川および条里が郡界の基準となっていたと考えられる。

では、近代の川辺郡と豊島郡の境界はいつまで遡るのであろうか。

文献からは、長禄三年（1459）の『勝尾寺文書』には「河辺郡森本」とあり、また年代不詳であるが、15世紀と判断されている『森本文書』の中の「摂津州森本森厳庵田畠納下帳」には川辺郡条里の坪付がでてきており、猪名川東岸の旧神津村域は川辺郡だったことがわかる。

今回調査の小阪田遺跡Ｄ地区第１面で検出されたSD105は北西から南東へと流れる断面逆台形を呈した斜行する直線的な溝であり、豊島南遺跡Ⅰ区のSD-4に続いている。この溝は、これ以前の南北に流れる溝などとは方向を違えており、現在の兵庫県と大阪府の府県境にほぼ一致し、川辺郡・豊島郡の境界でもある。出土土器から中世後半には掘削されていたと考えられ、郡界を示す溝が中世後半にまで遡ることを示している。同じような溝は第３章第５節でも記述してあるように、兵庫県伊丹市と大阪府豊中市との府県境を調査した原田西遺跡で、複雑に屈曲する府県境に一致する断面Ｖ字状の堀が検出されている。この府県境も川辺郡と豊島郡の境界である。この堀も中世前半の掘立柱建物を切って掘削されており、中世後半のものと考えられている。

このことから、近代の川辺郡と豊島郡の境界は中世後半にまで遡ることを明らかにできた。

以上のように、川辺郡と豊島郡の郡界は川辺郡条里と豊島郡条里を基準とした律令期の直線的な境界から、中世後半に現在の郡界に移動したことが考古学的にも裏付けられた。

[註]

(1) 豊島南遺跡の調査成果は『新修池田市史』第一巻　1997年を参照したほか、調査担当者である池田市教育委員会の田上雅則氏に御教示を受けた。ただし、紙面の都合で豊島南遺跡の東端のⅢ区の一部は掲載できていない。

(2) 八木哲浩　「村況と用水論争」『伊丹市史』第二巻　1969年
八木哲浩編『伊丹古絵図集成』伊丹史料叢書６　1982年

(3) 渡辺久雄「伊丹地方の条里制」『伊丹市史』第一巻　1971年

(4) 以下の文献は『伊丹市史』第四巻　1968年を参照した。

[引用・参考文献]

兵庫県教育委員会・川西市教育委員会『栄根遺跡』　1982
兵庫県教育委員会『川西市下加茂遺跡』　1994
兵庫県教育委員会『小戸遺跡』　1997
川西市教育委員会『川西市加茂遺跡－市道11号線建設にともなう発掘調査』　1982
川西市遺跡調査会『川西市栄根遺跡－第19次発掘調査報告－』　1989
関西大学『摂津加茂』　1968
淡神文化財協会『摂津加茂遺跡第138次発掘調査概要報告書』　1995
兵庫県教育委員会『北園遺跡発掘調査報告書』　1991
兵庫県教育委員会『緑ヶ丘遺跡』　1992
兵庫県教育委員会『南本町遺跡』　1998
伊丹市『伊丹市史』　第一巻　1971
伊丹市『伊丹市史』　第二巻　1969
伊丹市『伊丹市史』　第四巻　1968
伊丹市『伊丹古絵図集成』　伊丹史料叢書6　1982
伊丹市教育委員会『伊丹廃寺跡』　1966
伊丹市教育委員会･古代学協会『伊丹市口酒井遺跡－第11次発掘調査報告－』　1988
伊丹市教育委員会･六甲山麓遺跡調査会『口酒井遺跡－第1次～第10次･第12次～第16次調査の概要－』　2000
兵庫県教育委員会･尼崎市教育委員会『尼崎市中ノ田遺跡』　1971
兵庫県教育委員会『田能高田遺跡』　1997
尼崎市教育委員会『田能遺跡発掘調査報告書』　1982
池田市教育委員会「豊島南遺跡発掘調査（第３次調査地）」『池田市埋蔵文化財発掘調査概報1988年度』　1989
池田市教育委員会「豊島南遺跡第5次発掘調査」『池田市埋蔵文化財発掘調査概報1990年度』　1991
池田市教育委員会「豊島南遺跡第6次発掘調査」『池田市埋蔵文化財発掘調査概報1991年度』　1992
池田市教育委員会『娯三堂古墳』　1992
池田市史編纂委員会『新修池田市史』　第1巻　1997
宮之前遺跡調査会『宮之前遺跡発掘調査概報』　1970
堅田直『池田茶臼山古墳の研究』　1964
豊中市教育委員会『勝部遺跡』　1972
豊中市教育委員会『蛍池西遺跡』　1988
豊中市教育委員会『蛍池北遺跡（宮の前遺跡）』　1995
大阪文化財センター『宮の前遺跡・蛍池東遺跡・蛍池遺跡・蛍池西遺跡』　1994
大阪文化財調査研究センター『宮の前遺跡・蛍池東遺跡・麻田藩陣屋跡・蛍池遺跡・蛍池南地区・蛍池西遺跡』　1997
大阪文化財調査研究センター『勝部遺跡』　2003
大阪大学埋蔵文化財調査委員会『待兼山遺跡』Ⅲ　2001

別表　小阪田遺跡土器一覧(1)

報告No.	実測図	拓影	写真	種別	器種	部位	地区	遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土分析	備考
001	第13図	－	図版4・18	須恵器	坏H身		A	SB04・P411	9.1	2.7＋	丸		
002		－	図版19	須恵器	坏B蓋		A	P06	(15.5)	3.0＋	－		
003		－	図版19	須恵器	坏身		A	P08	(11.6)	3.7＋	－		
004		－	図版19	須恵器	坏身		A	P23	13.0	3.0＋	－		
005		－	図版4・18	須恵器	坏B身		A	P14	14.0	7.3	9.5		
006		－	図版19	須恵器	甕		A	P02	(17.0)	4.9＋	－		
007		－	図版19	土師器	皿		A	P06	(12.7)	1.5＋	丸		
008		－	図版19	土師器	皿		A	P19	(12.3)	2.4	丸		
009		－	図版19	土師器	皿		A	P20	(15.8)	2.5＋	丸		
010		－	図版19	土師器	鉢		A	P20	(16.0)	3.7＋	－		
011		－	図版4・18	須恵器	坏H蓋		A	SD13	12.1	3.6＋	－		
012		－	図版19	須恵器	坏I		A	SD19	9.2	3.6＋	丸		
013		－	図版19	須恵器	坏G身		A	SD19	9.8	3.1＋	丸		
014		－	図版30	須恵器	平瓶	頸部	A	SD19	－	5.8＋	－		
015		－	図版19	須恵器	瓶		A	SD16	7.1	3.0＋	－		
016		－	図版19	須恵器	坏B	底部	A	SD18	－	2.8＋	10.0		
017		－	図版19	須恵器	坏B	底部	A	SD18	－	2.3＋	(14.1)		
018		－	図版19	土師器	皿		A	SD12	12.7	1.6＋	－		
019		－	図版18	瓦器	椀	口縁部	A	SD12	－	3.0＋	－		
020		－	図版18	土師器	壺	体部	A	SD20	－	24.2＋	3.0		
021		－	図版19	土師器	坏B蓋	摘部	A	包含層	－	1.8＋	－		
022		－	図版19	土師器	坏B	底部	A	東側溝	－	1.6＋	13.7		
023		－	図版18	土師器	皿		A	包含層	15.4	2.7＋	－		
024		－	図版4・18	須恵器	坏B		A	包含層	(16.5)	4.4	9.8		
025		－	図版19	須恵器	片口鉢	口縁部	A	包含層	33.7	4.9＋	－		
026		－	図版18	瓦器	小皿		A	包含層	11.9	1.9＋	－		
027	第20図	第20図	図版3・27	縄文土器	深鉢	口縁部	B	SD03	－	4.1＋	－		
028			図版3・27	縄文土器	深鉢	口縁部	B	SD03	－	6.7＋	－		
029			図版3・27	縄文土器	深鉢	口縁部	B	SD03	－	3.9＋	－		
030			図版27	縄文土器	深鉢	口縁部	B	SD03	－	2.6＋	－		
031			図版27	縄文土器	深鉢	口縁部	B	SD03	－	3.1＋	－		
032			図版27	縄文土器	深鉢	口縁部	B	SD03	－	2.5＋	－		
033			図版27	縄文土器	深鉢	口縁部	B	SD03	－	6.3＋	－		
034		－	図版3・27	縄文土器	深鉢	口縁部	B	SD03	－	5.9＋	－		
035		第20図	図版27	縄文土器	深鉢	口縁部	B	SD03	－	3.9＋	－		
036			図版27	縄文土器	深鉢	口縁部	B	SD03	－	2.8＋	－		
037			図版27	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	3.1＋	－		
038			図版27	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	2.7＋	－		
039			図版27	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	2.5＋	－		
040			図版27	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	3.0＋	－		
041			図版28	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	2.5＋	－		
042			図版28	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	3.1＋	－		
043			図版27	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	7.0＋	－		
044			図版27	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	1.6＋	－		
045			図版28	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	2.4＋	－		
046			図版28	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	4.2＋	－		
047			図版28	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	4.1＋	－		
048			図版28	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	4.0＋	－		
049			図版28	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	4.9＋	－		
050			図版28	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	3.9＋	－		
051			図版28	縄文土器	深鉢	口縁部	B	SD03	－	2.1＋	－		
052			図版28	縄文土器	鉢		B	SD03	－	1.6＋	－		生駒西麓
053			図版28	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	1.8＋	－		生駒西麓
054	第21図	第21図	図版28	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	3.1＋	－		
055			図版28	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	3.8＋	－		
056			図版28	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	2.5＋	－		
057			図版28	縄文土器	鉢	口縁部	B	SD03	－	1.9＋	－		
058			図版28	縄文土器	深鉢	口縁部	B	SD03	－	3.3＋	－		
059			図版28	縄文土器	深鉢	口縁部	B	SD03	－	2.7＋	－		
060		－	図版28	縄文土器	深鉢	口縁部	B	SD03	－	6.7＋	－		
061		第21図	図版28	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	4.0＋	－		
062			図版28	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	2.8＋	－		
063			図版28	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	6.1＋	－		
064			図版29	縄文土器	深鉢	口縁部	B	SD03	－	3.5＋	－		
065			図版29	縄文土器	深鉢	口縁部	B	SD03	－	4.3＋	－		
066			図版29	縄文土器	深鉢	口縁部	B	SD03	－	6.1＋	－		
067			図版29	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	2.4＋	－		
068			図版29	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	3.6＋	－		
069			図版29	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	3.4＋	－		
070		－	図版29	縄文土器	深鉢		B	SD03	－	3.3＋	－		
071		－	図版30	縄文土器	深鉢	底部	B	SD03	－	2.4＋	8.0		
072		－	図版30	縄文土器	深鉢	底部	B	SD03	－	3.0＋	8.2		
073		－	図版30	縄文土器	深鉢	底部	B	SD03	－	1.8＋	5.6		
074		－	図版30	縄文土器	鉢	底部	B	SD03	－	1.1＋	5.4		
075	第22図	第22図	図版30	縄文土器	深鉢		B	SD06	－	3.2＋	－		
076		－	図版30	須恵器	坏G蓋		B	SD09	(10.3)	1.8＋	－		
077	第23図	－	図版31	弥生土器	壺	口頸部	B	SD04	12.2	5.8＋	－		記号
078		－	図版33	弥生土器	壺	口頸部	B	SD04	14.6	5.5＋	－		
079		－	図版4・31	弥生土器	壺		B	SD04	(13.3)	12.6＋	－	No.01	

別表　小阪田遺跡土器一覧(2)

報告No.	実測図	拓影	写真	種別	器種	部位	地区	遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土分析	備考
080	第23図	－	図版31	弥生土器	壺	口頸部	B	SD04	13.1	5.1＋	－		
081		－	図版33	弥生土器	壺		B	SD04	(15.5)	7.4＋	－	No.02	
082		－	図版33	弥生土器	壺	口頸部	B	SD04	12.8	4.6＋	－		
083		－	図版31	弥生土器	壺		B	SD04	12.4	9.2＋	－	No.03	
084		－	図版31	弥生土器	壺	頸部	B	SD04	－	6.8＋	－		
085		－	図版33	弥生土器	壺	口頸部	B	SD04	16.4	3.8＋	－		
086		第30図	図版4・31・32	弥生土器	壺		B	SD04	13.2	13.1＋	－		記号
087		－	図版4・31	弥生土器	壺		B	SD04	12.6	12.1＋	－	No.04	
088		－	図版33	弥生土器	壺	頸部	B	SD04	－	6.8＋	－	No.05	
089		－	図版4・31	弥生土器	壺		B	SD04	15.0	10.4＋	－		
090		－	図版31	弥生土器	壺	口頸部	B	SD04	16.0	7.6＋	－		
091		－	図版33	弥生土器	壺	口頸部	B	SD04	15.0	7.6＋	－		
092		第30図	図版4・32	弥生土器	壺		B	SD04	13.6	11.3＋	－		記号
093			図版32・33	弥生土器	壺	頸部	B	SD04	－	5.6＋	－		記号
094			図版32・33	弥生土器	壺	頸部	B	SD04	－	9.8＋	－		記号
095			図版4・32	弥生土器	壺		B	SD04	－	22.2＋	4.0		記号
096			図版4・32	弥生土器	壺		B	SD04	－	21.9＋	4.5		記号
097	第24図	－	図版35	弥生土器	壺	口縁部	B	SD04	(19.1)	4.6＋	－	No.06	
098		－	図版35	弥生土器	壺	口縁部	B	SD04	27.2	3.0＋	－		生駒西麓
099		－	図版35	弥生土器	壺	頸部	B	SD04	－	10.6＋	－	No.07	生駒西麓
100		－	図版34	弥生土器	壺	頸部	B	SD04	－	7.0＋	－		生駒西麓
101		－	図版34	弥生土器	壺	頸部	B	SD04	－	7.6＋	－		生駒西麓
102		－	図版4・33	弥生土器	長頸壺		B	SD04	－	19.3＋	4.5		
103		－	図版33	弥生土器	長頸壺		B	SD04	－	20.3＋	5.5	No.08	
104		－	図版34	弥生土器	細頸壺	頸部	B	SD04	13.3	5.8＋	－		
105		－	図版35	弥生土器	細頸壺	頸部	B	SD04	9.6	13.0＋	－		
106		第30図	図版35	弥生土器	細頸壺	頸部	B	SD04	－	2.7＋	－		
107		－	図版34	弥生土器	細頸壺	体部	B	SD04	－	8.6＋	－		
108		－	図版4・33	弥生土器	短頸壺		B	SD04	－	19.5＋	5.3		
109		－	図版33	弥生土器	甕		B	SD04	－	16.5＋	5.0		
110		－	図版34	弥生土器	壺	底部	B	SD04	－	4.9＋	4.7		
111		－	図版34	弥生土器	壺	底部	B	SD04	－	7.6＋	6.9		
112		－	図版34	弥生土器	壺		B	SD04	－	10.4＋	5.5		
113		－	－	弥生土器	壺		B	SD04	－	15.2＋	3.7		
114		－	図版34	弥生土器	壺	底部	B	SD04	－	3.0＋	1.9		
115		－	図版34	弥生土器	壺	底部	B	SD04	－	2.6＋	3.1		
116		－	図版34	弥生土器	壺	底部	B	SD04	－	2.4＋	3.7		
117		－	図版34	弥生土器	壺	底部	B	SD04	－	3.3＋	4.2		
118		－	図版34	弥生土器	壺	底部	B	SD04	－	2.8＋	4.3		
119		－	図版34	弥生土器	壺	底部	B	SD04	－	2.9＋	6.3		
120		－	図版34	弥生土器	壺	底部	B	SD04	－	3.9＋	5.2		
121		－	図版34	弥生土器	壺	底部	B	SD04	－	3.7＋	5.5		
122		－	図版34	弥生土器	壺	底部	B	SD04	－	3.2＋	6.0		
123	第25図	－	図版4・36	弥生土器	甕		B	SD04	15.5	19.5	4.6	No.09	
124		－	図版4・36	弥生土器	甕		B	SD04	15.5	18.8	5.2	No.10	
125		－	図版37	弥生土器	甕		B	SD04	18.9	8.5＋	－		
126		－	図版38	弥生土器	甕		B	SD04	16.7	9.5＋	－		
127		－	図版4・36	弥生土器	甕		B	SD04	16.6	17.8＋	－		
128		－	図版37	弥生土器	甕		B	SD04	17.2	17.0＋	－		
129		－	図版39	弥生土器	甕		B	SD04	20.4	9.2＋	－		
130		－	図版4・36	弥生土器	甕		B	SD04	11.8	11.9＋	－		
131		－	図版37	弥生土器	甕		B	SD04	13.8	9.2＋	－		
132		－	図版37	弥生土器	甕		B	SD04	12.5	12.0＋	－		
133		－	図版37	弥生土器	甕		B	SD04	14.3	12.9＋	－		
134		－	図版38	弥生土器	甕		B	SD04	12.6	11.0＋	－	No.11	
135		－	図版39	弥生土器	甕		B	SD04	14.3	11.4＋	－		
136		－	図版38	弥生土器	壺		B	SD04	14.5	23.8	5.4		
137		－	図版36	弥生土器	壺		B	SD04	15.8	16.9＋	－		
138		－	図版37	弥生土器	甕		B	SD04	(13.8)	14.9＋	－		
139		－	図版4・36	弥生土器	甕		B	SD04	14.7	22.2	4.8		
140	第26図	－	図版39	弥生土器	甕	口縁部	B	SD04	16.7	3.4＋	－		生駒西麓
141		－	図版38	弥生土器	甕		B	SD04	18.4	17.5＋	－	No.12	生駒西麓
142		－	図版39	弥生土器	甕		B	SD04	(13.7)	5.3＋	－	No.13	
143		－	図版4・36	弥生土器	甕		B	SD04	15.8	23.1	(3.9)	No.14	
144		－	図版39	弥生土器	甕	口縁部	B	SD04	16.7	2.2＋	－		
145		－	図版39	弥生土器	壺		B	SD04	16.7	6.6＋	－	No.15	
146		－	図版38	弥生土器	甕		B	SD04	12.8	8.2＋	－	No.16	
147		－	図版39	弥生土器	壺		B	SD04	16.4	7.5＋	－	No.17	
148		－	図版38	弥生土器	甕		B	SD04	15.2	12.7＋	－	No.18	
149		－	図版39	弥生土器	甕	底部	B	SD04	－	9.0＋	4.8		
150		－	図版37	弥生土器	甕		B	SD04	－	19.0＋	5.1		
151		－	図版39	弥生土器	甕	底部	B	SD04	－	3.4＋	3.7		
152		－	図版39	弥生土器	甕	底部	B	SD04	－	4.1＋	5.4		
153		－	図版39	弥生土器	甕	底部	B	SD04	－	4.2＋	4.1		
154		－	図版39	弥生土器	甕	底部	B	SD04	－	4.5＋	4.2		
155		－	図版37	弥生土器	甕		B	SD04	－	11.3＋	4.8		
156		－	図版39	弥生土器	甕	底部	B	SD04	－	4.4＋	4.6		
157		－	図版39	弥生土器	甕		B	SD04	－	3.1＋	5.2		
158		－	図版39	弥生土器	甕	底部	B	SD04	－	3.7＋	4.1		

別表　小阪田遺跡土器一覧(3)

報告No.	実測図	拓 影	写 真	種 別	器 種	部 位	地 区	遺 構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土分析	備 考
159	第26図	－	図版39	弥生土器	甕	底部	B	SD04	－	3.0＋	3.2		
160		－	図版39	弥生土器	甕	底部	B	SD04	－	4.5＋	3.7		
161		－	図版39	弥生土器	甕	底部	B	SD04	－	4.3＋	4.2		
162	第27図	－	図版42	弥生土器	鉢		B	SD04	(17.3)	3.4＋	－		
163		－	図版42	弥生土器	鉢		B	SD04	(17.8)	5.9＋	－		
164		－	図版42	弥生土器	鉢		B	SD04	18.7	4.7＋	－		
165		第30図	図版4・40	弥生土器	鉢		B	SD04	18.4	8.6	4.1	No.19	記号
166		－	図版40	弥生土器	鉢		B	SD04	19.4	9.6	5.4		
167		－	図版42	弥生土器	鉢		B	SD04	(23.4)	7.7＋	－		
168		－	図版4・40	弥生土器	鉢		B	SD04	(33.6)	16.2	5.0	No.20	
169		－	図版4・40	弥生土器	小型鉢		B	SD04	(3.9)	2.1	2.3		
170		－	図版4・40	弥生土器	鉢		B	SD04	8.5	5.0	3.3		
171		－	図版4・40	弥生土器	鉢		B	SD04	11.8	6.1	4.0		
172		－	図版40	弥生土器	鉢		B	SD04	12.7	6.6	4.0		
173		－	図版42	弥生土器	鉢		B	SD04	(15.6)	6.3＋	3.5		
174		－	図版4・41	弥生土器	鉢		B	SD04	17.8	8.4	4.2		
175		－	図版42	弥生土器	鉢	底部	B	SD04	－	2.2＋	4.2		
176		－	図版42	弥生土器	鉢	底部	B	SD04	－	2.4＋	4.5		
177		－	図版42	弥生土器	鉢	底部	B	SD04	－	2.5＋	4.4		
178		－	図版41	弥生土器	鉢	底部	B	SD04	－	6.1＋	4.7		
179		－	図版42	弥生土器	鉢	底部	B	SD04	－	8.2＋	4.9		
180		－	図版4・41	弥生土器	鉢	底部	B	SD04	－	3.7＋	6.2		
181		－	図版4・41	弥生土器	有孔鉢		B	SD04	15.6	9.2	4.3		
182		－	図版4・41	弥生土器	有孔鉢		B	SD04	13.6	11.1	－		
183		－	図版42	弥生土器	有孔鉢	底部	B	SD04	－	4.5＋	3.8		
184		－	図版42	弥生土器	有孔鉢	底部	B	SD04	－	4.8＋	2.6		
185		－	図版42	弥生土器	有孔鉢	底部	B	SD04	－	4.6＋	1.5		
186		－	図版42	弥生土器	有孔鉢	底部	B	SD04	－	6.5＋	3.4		
187	第28図	－	図版43	弥生土器	高坏	坏部	B	SD04	23.2	5.2＋	－		
188		－	図版43	弥生土器	高坏	坏部	B	SD04	25.1	7.4＋	－	No.21	
189		－	図版43	弥生土器	高坏	坏部	B	SD04	29.7	6.6＋	－	No.22	
190		－	図版43	弥生土器	高坏	脚部	B	SD04	－	6.6＋	9.6		
191		－	図版43	弥生土器	高坏	脚部	B	SD04	－	9.4＋	14.0		
192		－	図版43	弥生土器	高坏		B	SD04	－	12.0＋	－		
193		－	図版43	弥生土器	高坏	脚部	B	SD04	－	7.8＋	－		
194		－	図版44	弥生土器	高坏	脚部	B	SD04	－	7.1＋	11.5		
195		－	図版43	弥生土器	高坏		B	SD04	－	7.1＋	－		
196		－	図版43	弥生土器	高坏	脚部	B	SD04	－	9.8＋	－		
197		第30図	図版43	弥生土器	高坏	脚部	B	SD04	－	5.6＋	－		
198		－	図版43	弥生土器	高坏	脚部	B	SD04	－	2.5＋	17.8		
199		－	図版44	弥生土器	高坏	脚部	B	SD04	－	8.4＋	20.9	No.23	
200		－	図版43	弥生土器	器台		B	SD04	－	10.2＋	12.5		
201		－	図版43	弥生土器	器台	口縁部	B	SD04	－	1.6＋	－		
202		－	図版43	弥生土器	器台	口縁部	B	SD04	－	2.4＋	－		
203	第29図	－	図版44	弥生土器	壺		B	SD04	12.3	22.4	7.6	No.24	
204		－	図版44	弥生土器	壺		B	SD04	15.4	23.5＋	－	No.25	
205		第30図	図版44	弥生土器	壺		B	SD04	－	6.8＋	－		
206		－	図版44	弥生土器	壺	底部	B	SD04	－	2.3＋	8.0		
207		－	図版44	弥生土器	高坏		B	SD04	－	1.9＋	－		
208		－	図版44	弥生土器	高坏	口縁部	B	SD04	26.6	3.1＋	－		
209		－	図版44	黒色土器	椀		B	SD04	14.0	4.8＋	－		
210		第29図	図版44	縄文土器	深鉢		B	SD04	－	6.2＋	－		
211	第31図	－	図版4・45	須恵器	坏蓋		B	SD05	13.3	4.0	－		
212		－	図版47	須恵器	坏Ｈ身		B	SD05	(12.4)	3.5	－		
213		－	図版47	須恵器	坏Ｈ身		B	SD05	(14.2)	4.0	－		
214		－	図版4・45	須恵器	坏Ｇ身		B	SD05	8.6	3.4	丸		
215		－	図版47	須恵器	坏Ｇ身		B	SD05	9.4	3.6	丸		
216		－	図版47	須恵器	坏Ｇ身		B	SD05	(10.2)	3.8	丸		
217		－	図版47	須恵器	坏Ｇ身		B	SD05	9.2	3.5	丸		
218		－	図版47	須恵器	坏Ｉ		B	SD05	(10.8)	5.0	丸		
219		－	図版4・45	須恵器	坏Ｂ蓋		B	SD05	18.6	3.0	－		
220		－	図版47	須恵器	坏Ｂ身		B	SD05	－	3.5＋	12.2		
221		－	図版30	須恵器	無蓋高坏	坏部	B	SD05	－	1.8＋	－		
222		－	図版30	須恵器	平瓶		B	SD05	－	5.2＋	丸		
223		－	図版47	須恵器	䏰	体部	B	SD05	－	5.0＋	－		
224		－	図版30	須恵器	短頸壺	体部	B	SD05	－	4.6＋	丸		
225		－	図版47	須恵器	直口壺	口頸部	B	SD05	9.0	5.4＋	－		
226		－	図版47	須恵器	広口壺	口縁	B	SD05	13.7	3.8＋	－		
227		－	－	須恵器	壺	底部	B	SD05	－	6.4＋	丸		
228		－	図版45	須恵器	台付壺		B	SD05	－	10.8＋	14.0		
229		－	図版47	須恵器	器台		B	SD05	－	5.8＋	－		
230		－	図版45	土師器	椀		B	SD05	9.5	3.0	丸		
231		－	図版46	土師器	高坏	坏部	B	SD05	(13.2)	5.3＋	－		
232		－	図版46	土師器	高坏	脚部	B	SD05	－	2.5＋	11.1		
233		－	図版46	土師器	壺		B	SD05	9.6	5.6＋	－		
234		－	図版46	土師器	甕	口縁部	B	SD05	20.5	5.2＋	－		
235		－	図版45	土師器	壺		B	SD05	9.0	12.5	2.5		
236		－	図版46	土師器	高坏	脚部	B	SD05	－	7.2＋	(10.8)		
237		－	図版45	土師器	高坏	脚部	B	SD05	－	3.4＋	11.8		

別表　小阪田遺跡土器一覧(4)

報告No.	実測図	拓 影	写 真	種 別	器 種	部 位	地 区	遺 構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土分析	備 考
238	第31図	−	図版46	弥生土器	壺		B	SD05	16.6	1.9+	−		
239		−	図版46	弥生土器	壺	底部	B	SD05	−	4.4+	4.3		
240		−	図版46	弥生土器	甕		B	SD05	(14.9)	8.1+	−		
241		−	図版46	弥生土器	甕		B	SD05	−	4.7+	4.0		
242		−	図版46	弥生土器	甕	底部	B	SD05	−	4.2+	4.8		
243		−	図版46	弥生土器	有孔鉢	底部	B	SD05	−	3.9+	1.2		
244	第38図	第38図	図版52	縄文土器	深鉢	口縁部	C	SD03	−	3.7+	−		
245			図版52	縄文土器	深鉢		C	SD03	−	3.7+	−		
246			図版52	縄文土器	深鉢	口縁部	C	SD03	−	3.8+	−		
247			図版52	縄文土器	深鉢		C	SD03	−	2.2+	−		
248			図版52	縄文土器	深鉢	口縁部	C	SD03	−	3.4+	−		
249			図版52	縄文土器	深鉢	口縁部	C	SD03	−	2.3+	−		
250			図版52	縄文土器	深鉢		C	SD03	−	3.9+	−		
251			図版52	縄文土器	深鉢	口縁部	C	SD03	−	3.0+	−		
252		−	図版52	縄文土器	深鉢	底部	C	SD03	−	1.4+	8.3		
253	第39図	−	図版3・53	土師器	壺		C	SH02	8.8	13.6+	丸		
254		−	図版3・53	土師器	甕		C	SH02・床面	11.0	15.0	丸		
255		−	図版3・53	土師器	椀		C	SH02・床面	10.4	4.9	丸		
256		−	図版52	土師器	椀		C	SH02	11.7	3.7+	丸		
257		−	図版53	土師器	甕		C	SH02・床面	14.8	6.2+	−		
258		−	図版52	土師器	甕		C	SH02・P202	15.3	5.9+	−		
259		−	図版53	土師器	高坏		C	SH02・P202	−	7.0+	−		
260		−	図版52	土師器	甕		C	SH02・P203	(10.7)	5.7+	−		
261		−	図版52	土師器	甕		C	SH02・P203	10.9	6.6+	−		
262		−	図版3・53	土師器	高坏		C	SH02・P203	16.1	11.4	10.5		
263		−	図版53	土師器	高坏	坏部	C	SH01・竈	13.5	6.6+	−		
264		−	図版52	土師器	製塩土器		C	SH01	−	2.5+	−		
265		−	図版52	須恵器	甕	頸部	C	SH01	−	6.7+	−		
301	第44図	−	図版4・64	土師器	直口壺	口頸部	D	SD101	18.5	6.5+	−		
302		−	図版4・64	土師器	直口壺		D	SD101	14.0	(34.2)	5.5		
303		−	図版4・64	土師器	甕		D	SD101	13.5	11.5+	−		
304		−	図版4・65	須恵器	平瓶		D	SD103	−	8.1+	丸		
305		−	図版65	須恵器	坏B蓋		D	SD105	(20.1)	1.3+	−		
306		−	図版65	須恵器	片口鉢		D	SD105	−	3.4+	−		
307		−	図版65	磁器	皿	底部	D	SD105	−	0.9+	4.2		
308	第45図	−	図版63	須恵器	壺	底部	D	SD107	−	3.6+	13.8		
309		−	図版63	須恵器	坏H身		D	SD107	(10.9)	3.9+	−		
310		−	図版63	弥生土器	壺	口頸部	D	SD107	13.5	4.7+	−		
311		−	図版63	弥生土器	甕		D	SD107	30.0	5.5+	−		
312		−	図版63	弥生土器	壺	口縁部	D	SD107	18.9	2.4+	−		
313		−	図版63	弥生土器	長頸壺	口頸部	D	SD107	7.9	5.7+	−		
314		−	図版63	弥生土器	甕	底部	D	SD107	−	5.6+	5.1		
315		−	図版63	弥生土器		底部	D	SD107	−	2.9+	3.4		
316		−	図版63	弥生土器		底部	D	SD107	−	1.7+	4.6		
317		−	図版4・62・65	土師器	甕		D	SD107	15.8	12.9+	−		
318		−	図版4・62・65	土師器	甕		D	SD107	15.7	12.7+	−		
319		−	図版4・62・65	土師器	甕		D	SD107	11.3	15.2	丸		
320		−	図版4・62・65	土師器	甕		D	SD107	(12.7)	12.2+	−		
321		−	図版63	土師器	壺	頸部	D	SD107	(32.0)	7.4+	−		
322		−	図版63	土師器	壺	口縁部	D	SD107	(21.2)	3.5+	−		
323		−	図版4・64	土師器	鉢		D	SD107	11.0	6.8	2.4		
324		−	図版4・62・65	土師器	高坏	坏部	D	SD107	21.6	7.7+	−		
325		−	図版63	土師器	高坏	脚部	D	SD107	−	7.8+	−		
326		−	図版63	土師器	壺	底部	D	SD107	−	5.0+	4.3		
327		−	図版63	土師器		底部	D	SD107	−	2.9+	3.4		
328	第46図	−	図版65	須恵器	坏H蓋		D	包含層	13.6	3.0+	−		
329		−	図版65	須恵器	坏H蓋		D	包含層	16.4	3.5+	−		
330		−	図版65	須恵器	坏H身		D	包含層	10.0	3.0+	−		
331		−	図版4・65	須恵器	坏H身		D	包含層	12.0	4.3	丸		
332		−	図版4・65	須恵器	坏H身		D	包含層	12.2	4.6	丸		
333		−	図版4・65	須恵器	坏H身		D	包含層	13.4	3.7+	丸		
334		−	図版65	須恵器	高坏	脚部	D	包含層	−	1.9+	10.4		
335		−	図版65	瓦質土器	火舎香炉	口縁部	D	包含層	21.5	3.3+	−		

別表　小阪田遺跡石器一覧

報告No.	挿 図	写 真	種 別	器 種	材 質	地 区	遺 構	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備 考
S1	第32図	図版48	石器	不明	粘板岩	B	SD03	70.2	34.2	0.9	19.8	
S2		図版48	石器	剥片	サヌカイト	B	SD03	74.0	34.5	10.5	22.0	
S3		図版48	石器	石包丁	粘板岩	B	SD04	67.0	38.0	0.7	19.4	
S4		図版48	石器	台石	不明	B	SD05	9.0	122.0	49.5	782.5	
S5		図版48	石器	砥石	砂岩	B	SD05	143.0	99.0	19.5	381.7	
S6	第39図	図版53	石器	台石	不明	C	SH02					
S301	第47図	図版48	石器	剥片	サヌカイト	D	SB101・P2	36.2	21.0	10.0	8.9	

図　　版

1　小阪田遺跡　遠景（南から）

2　小阪田遺跡　遠景（東から）

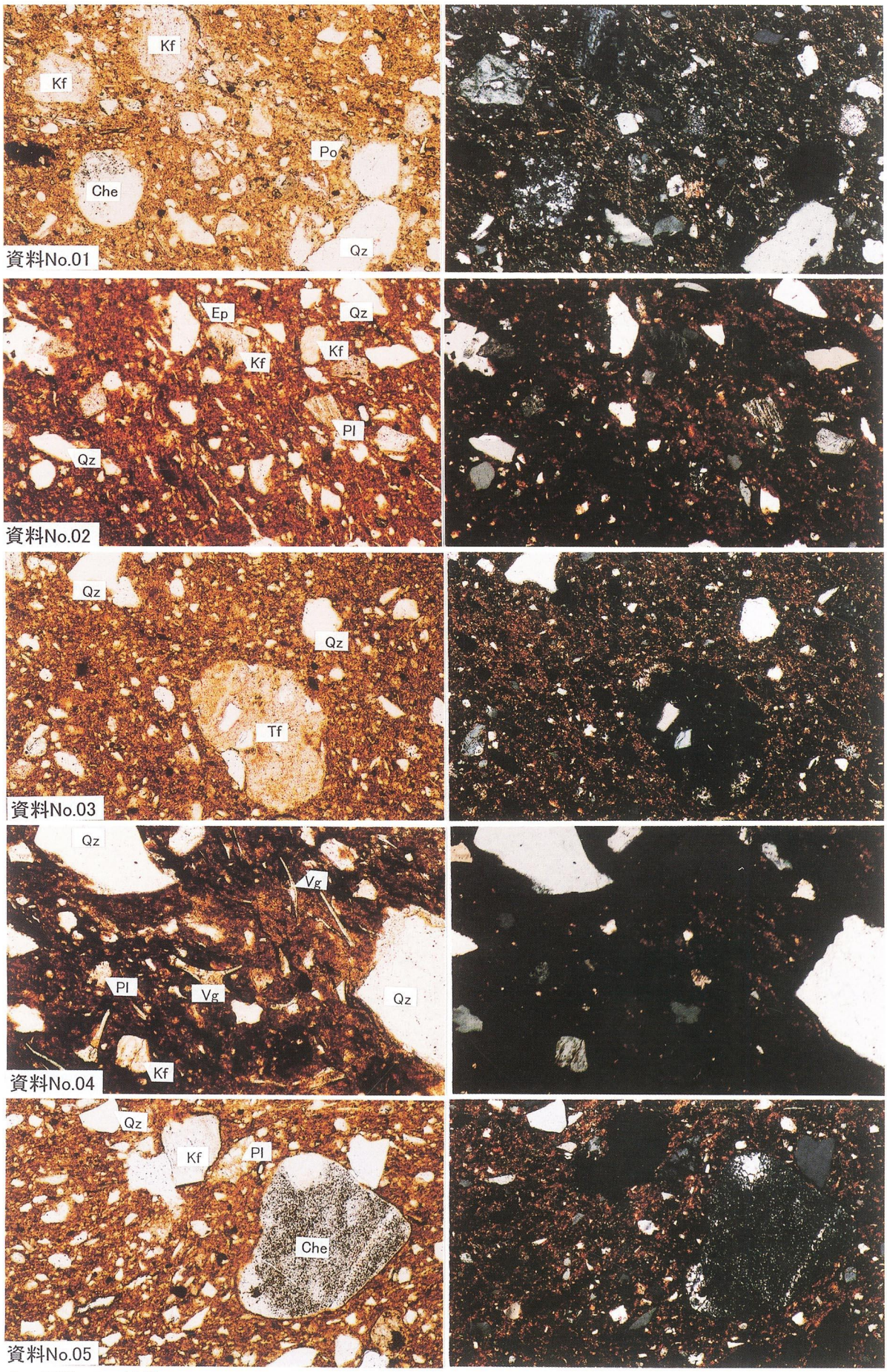
3　A・B・C地区　全景（南西から）

4　D地区　全景（北から）

上：B地区　SD03出土縄文土器
下：C地区　SH01・SH02出土土師器

図版4　遺物

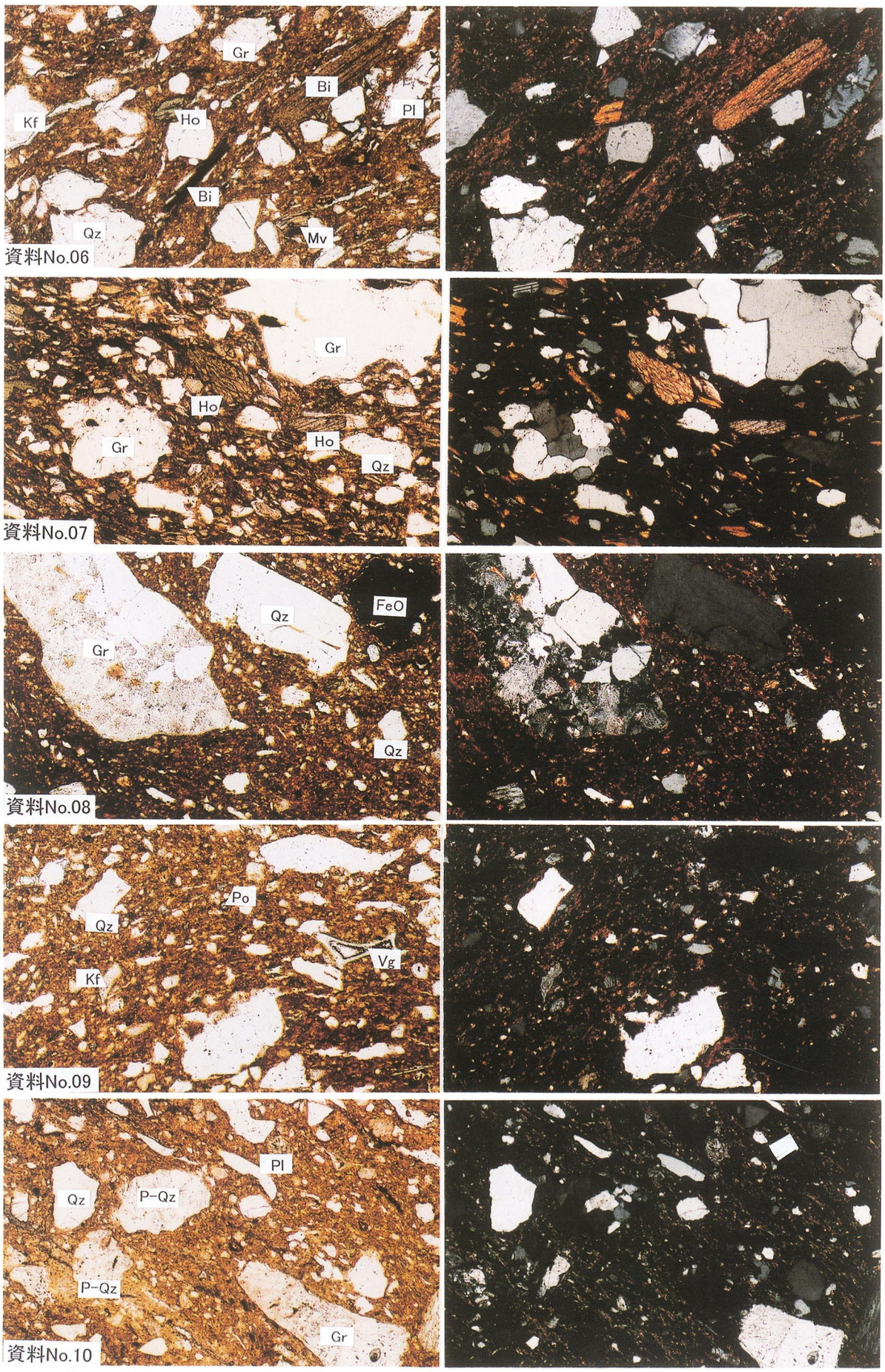
上：A地区・D地区　古墳時代～奈良時代須恵器
中：D地区　古墳時代前期土師器
下：B地区　SD04出土土器



Qz:石英　Pl:斜長石　Kf:カリ長石　Ep:緑レン石　Tf:凝灰岩　Che:チャート
Po:植物珪酸体
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

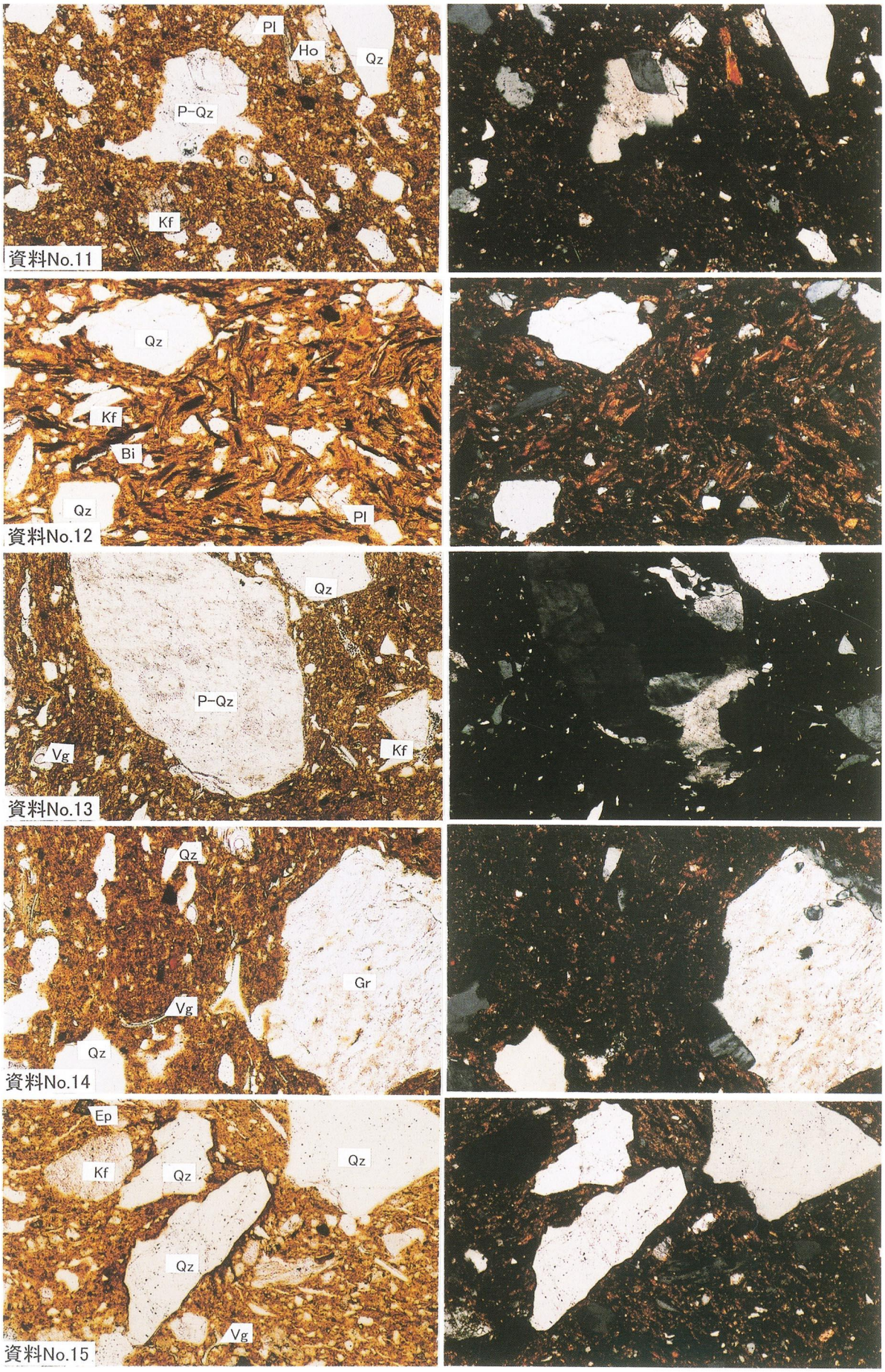
0.5mm

図版6　分析



Qz:石英　Pl:斜長石　Kf:カリ長石　Mv:白雲母　Bi:黒雲母　Ho:角閃石
Gr:花崗岩　P-Qz:多結晶石英　Vg:火山ガラス　FeO:酸化鉄結核
Po:植物珪酸体
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

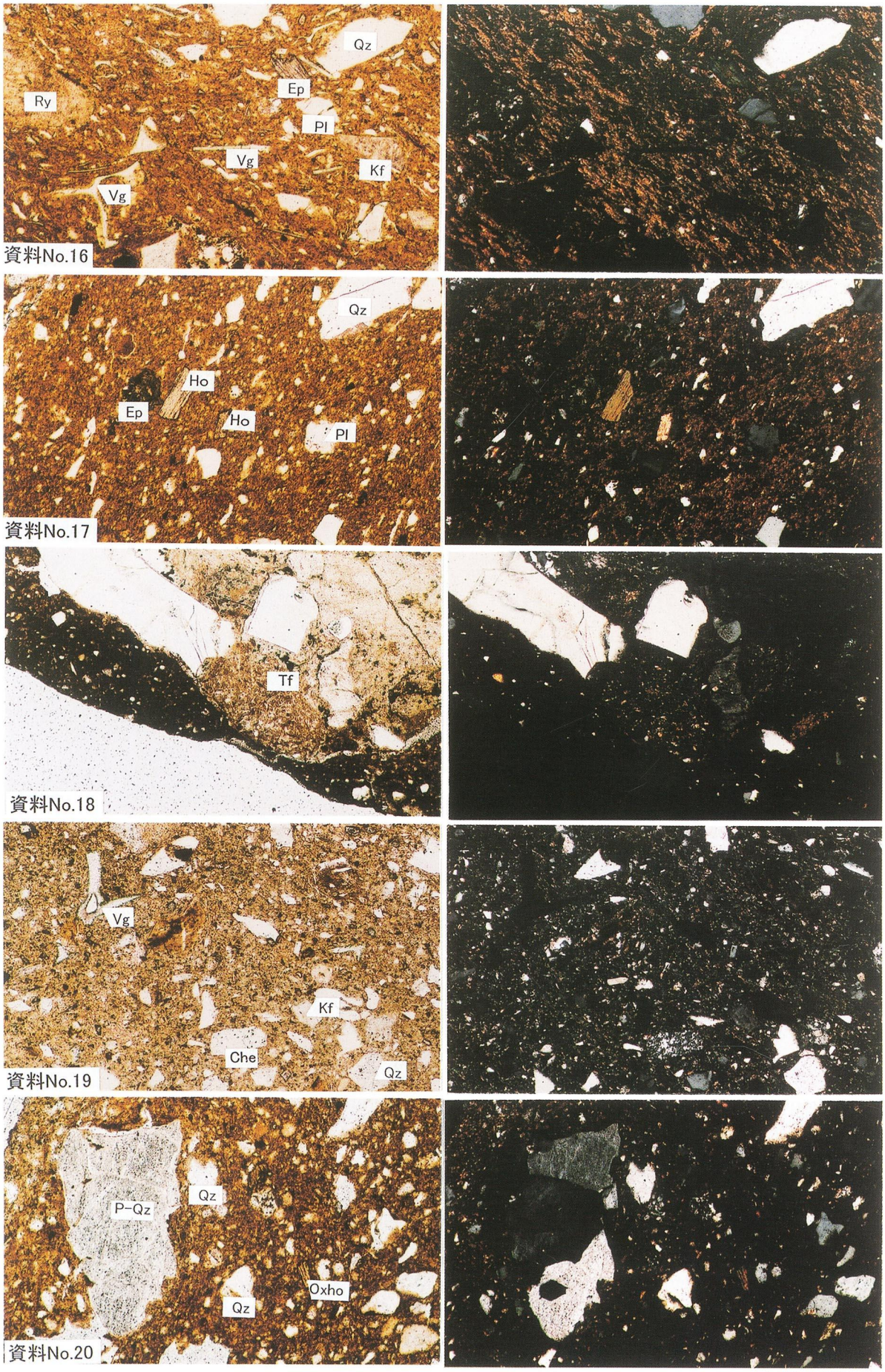
0.5mm



Qz:石英　Pl:斜長石　Kf:カリ長石　Bi:黒雲母　Ho:角閃石　Ep:緑レン石
Gr:花崗岩　P-Qz:多結晶石英　Vg:火山ガラス
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

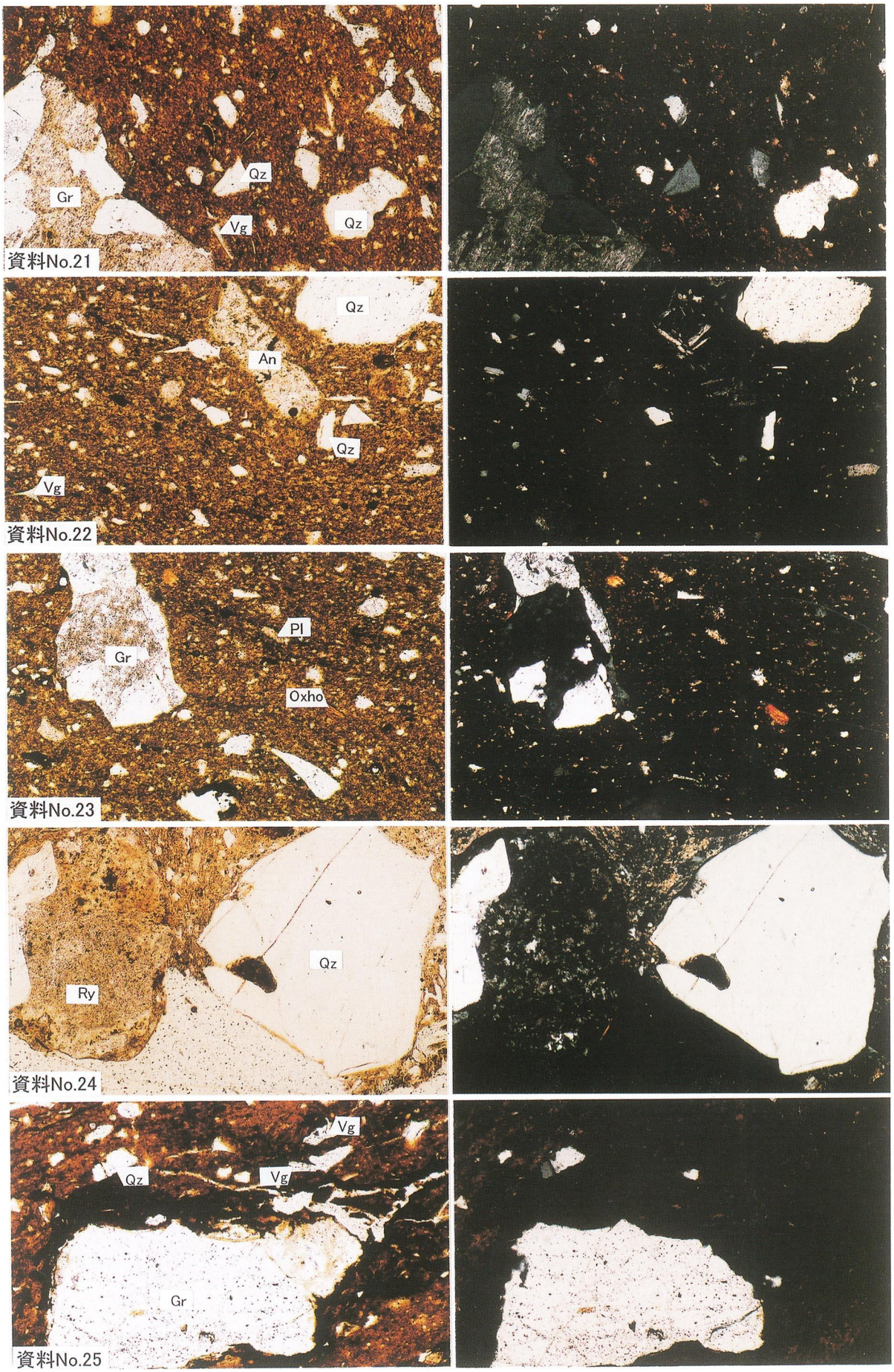
0.5mm

図版8　分析



Qz:石英　Pl:斜長石　Kf:カリ長石　Ho:角閃石　Oxho:酸化角閃石　Ep:緑レン石
Ry:流紋岩　Tf:凝灰岩　Che:チャート　P-Qz:多結晶石英　Vg:火山ガラス
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

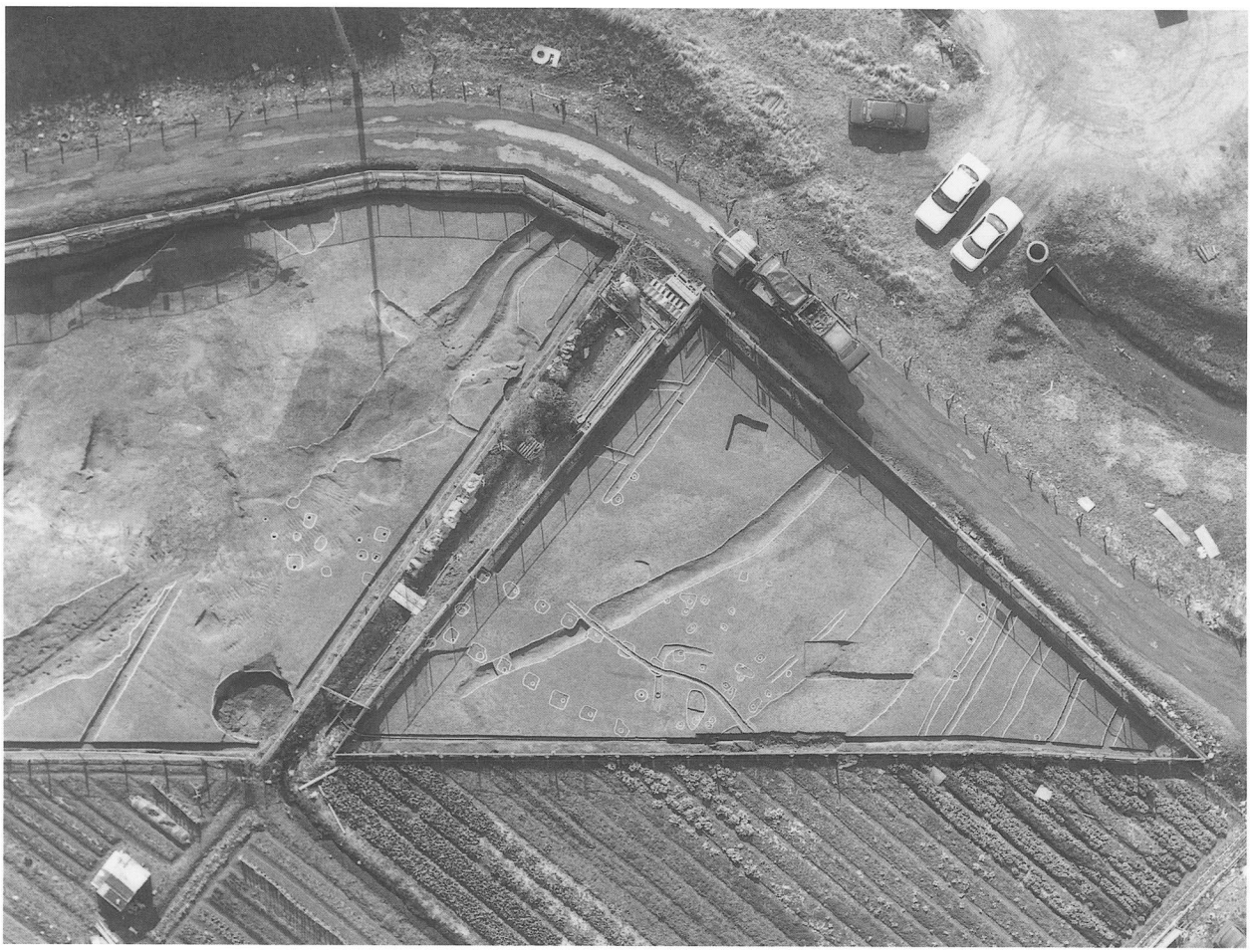


Qz:石英　Pl:斜長石　Oxho:酸化角閃石　Gr:花崗岩　Ry:流紋岩　An:安山岩
Vg:火山ガラス
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

5　A・B・C地区　全景（北西から）

6　A・B・C地区　全景（上が北西）

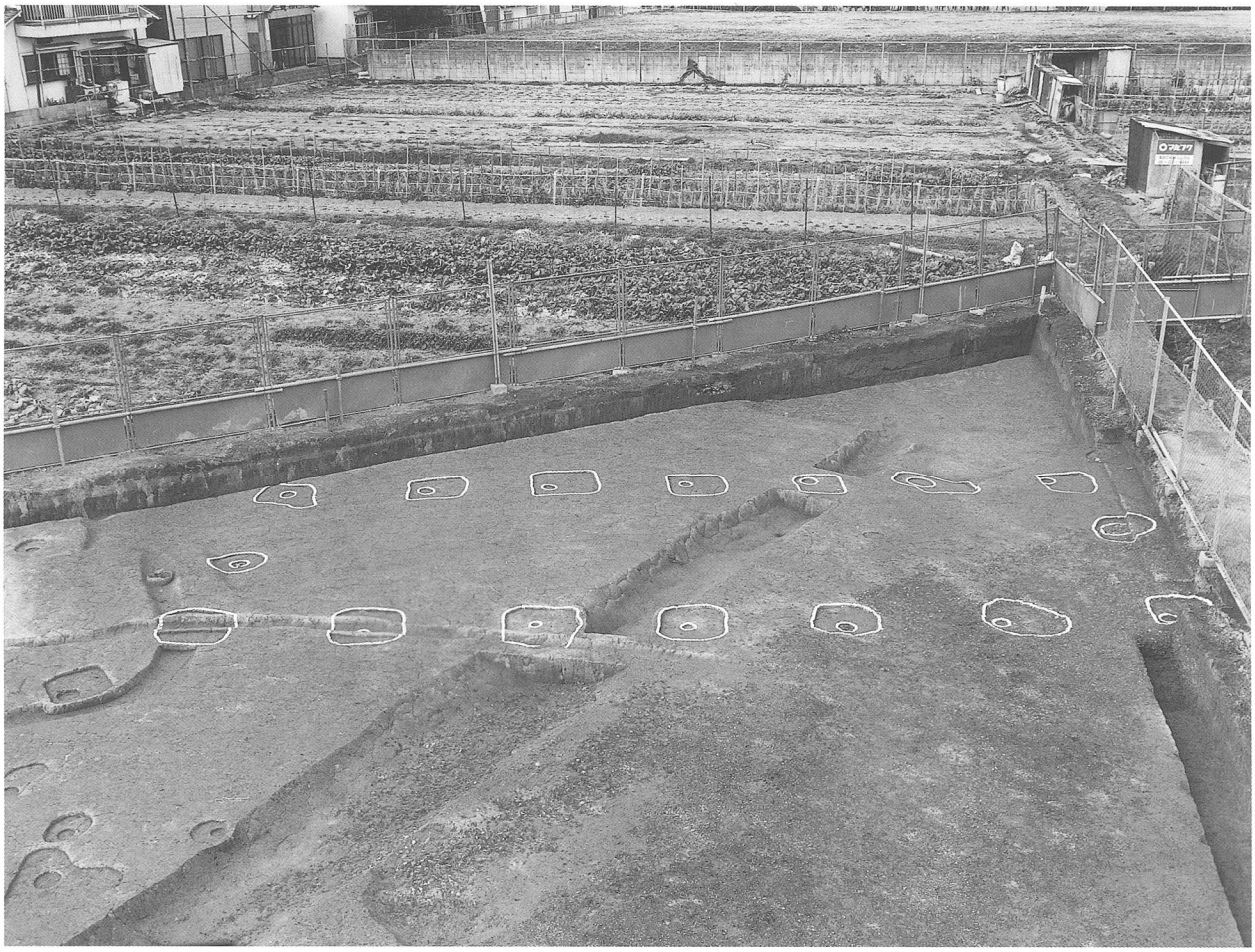


7　B・A地区　全景（上が南東）

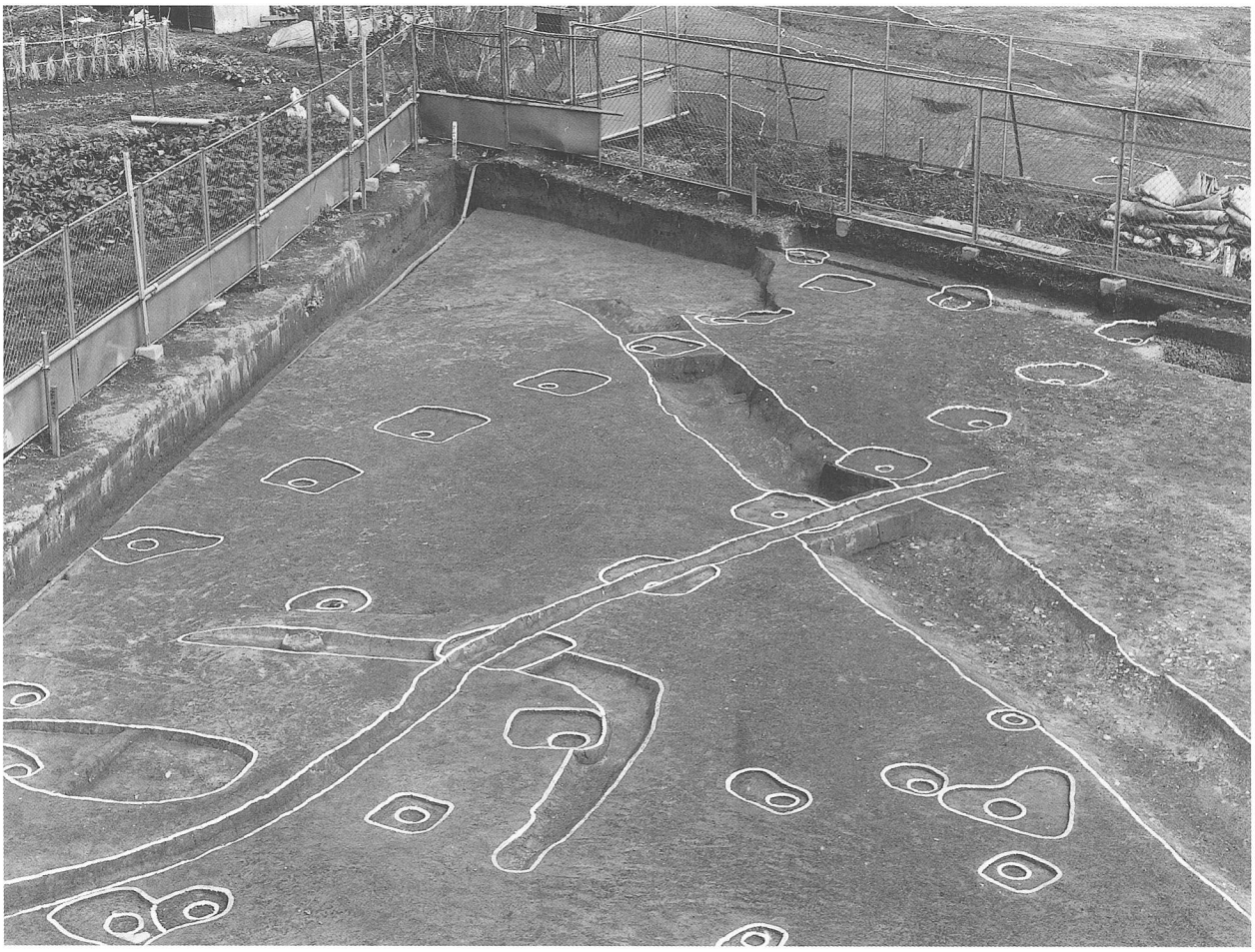
8　C・B地区　全景（上が南東）

図版12　遺構　A地区

9　東半部　全景（南西から）　10　柱穴P04　11　柱穴P14（西から）
12　柱穴P13　13　柱穴P20（北から）

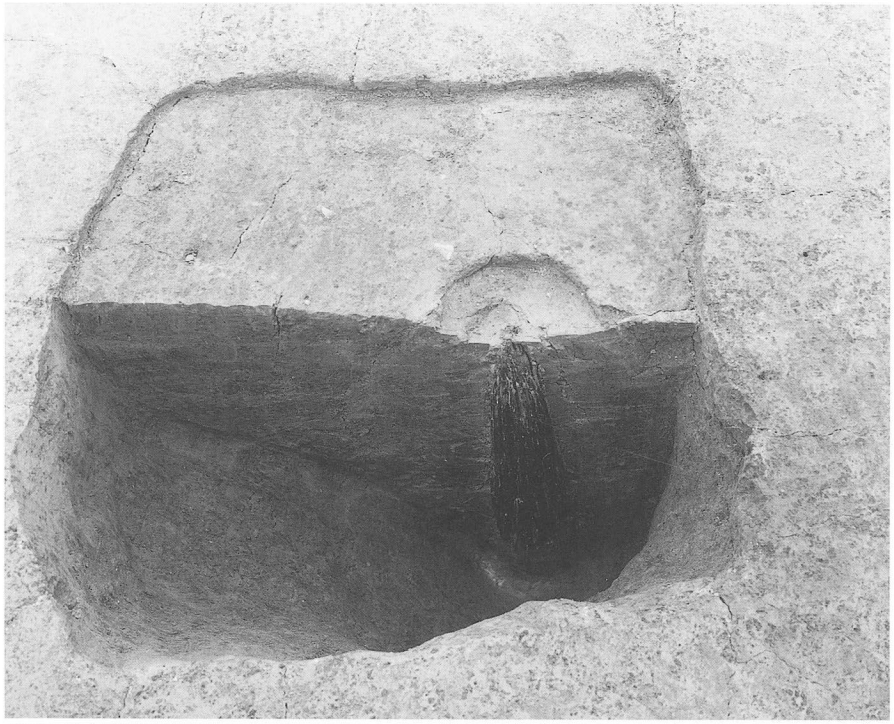


14　掘立柱建物SB04　全景（南から）

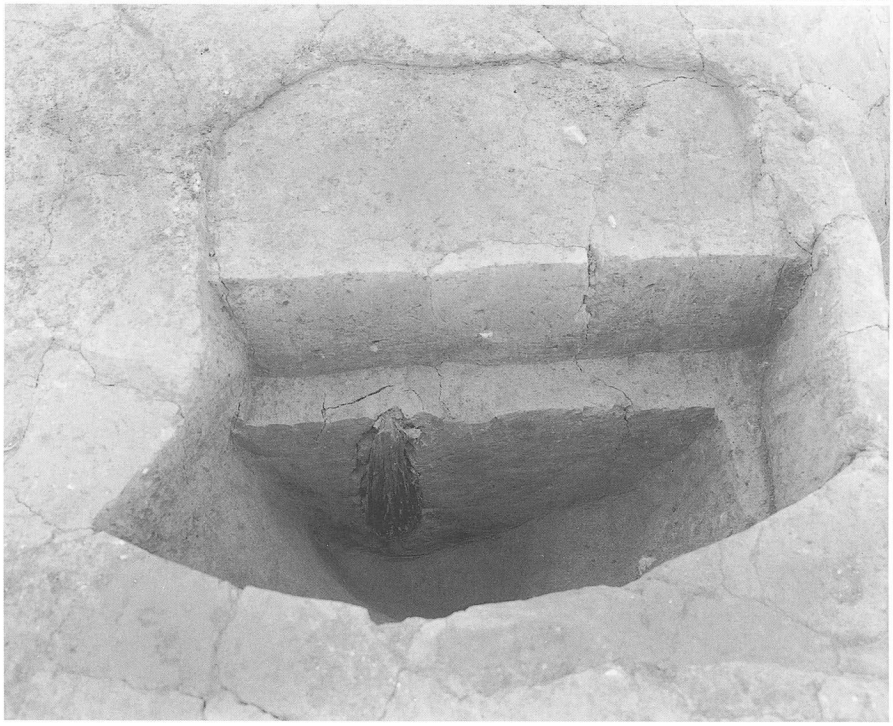


15　掘立柱建物SB04　全景（南西から）

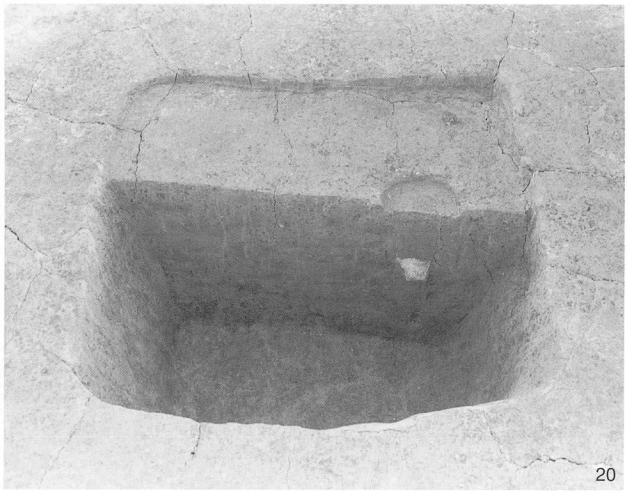
16　掘立柱建物SB04　柱穴P416
柱根断面（西から）

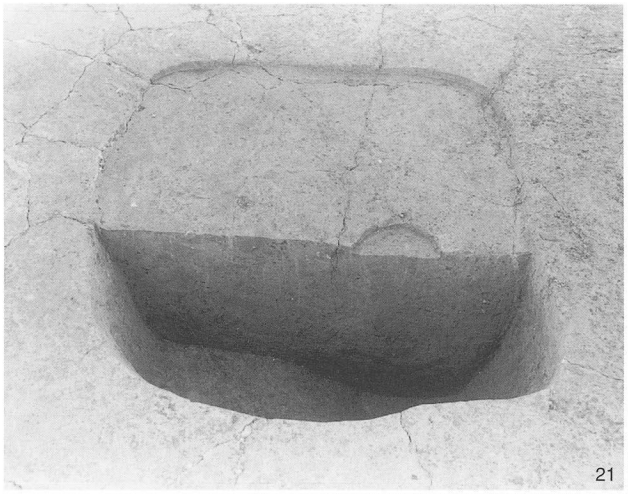


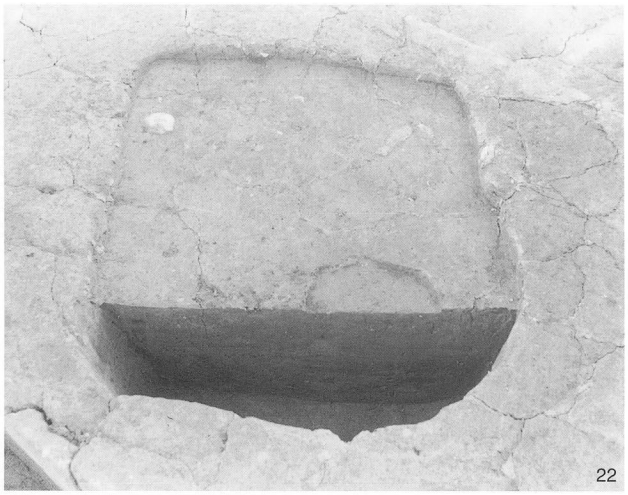
17　掘立柱建物SB04　柱穴P402
柱根断面（北から）

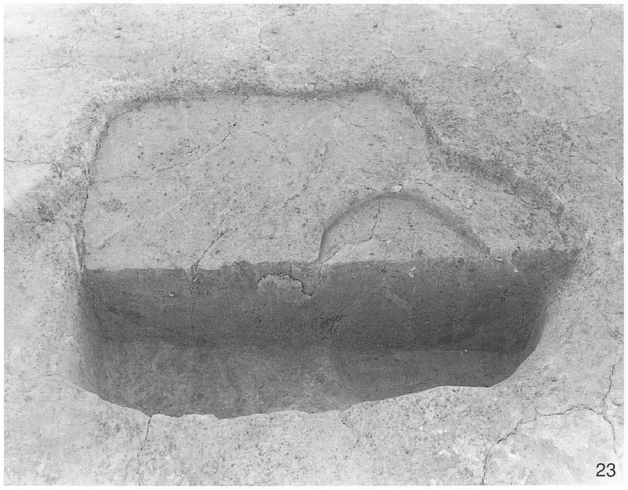


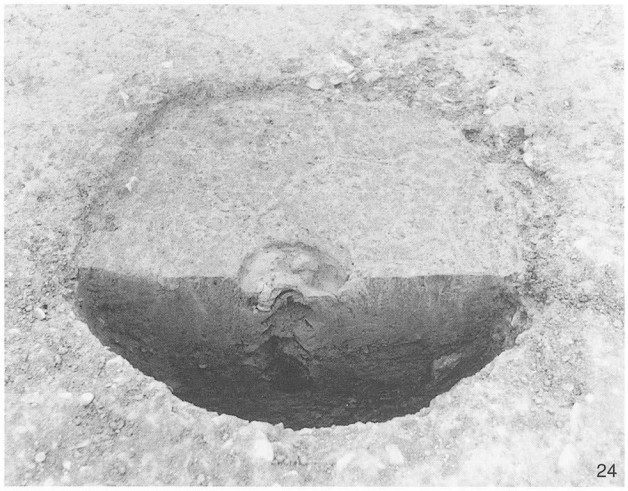
18　掘立柱建物SB04　柱穴P413
柱根断面（南から）

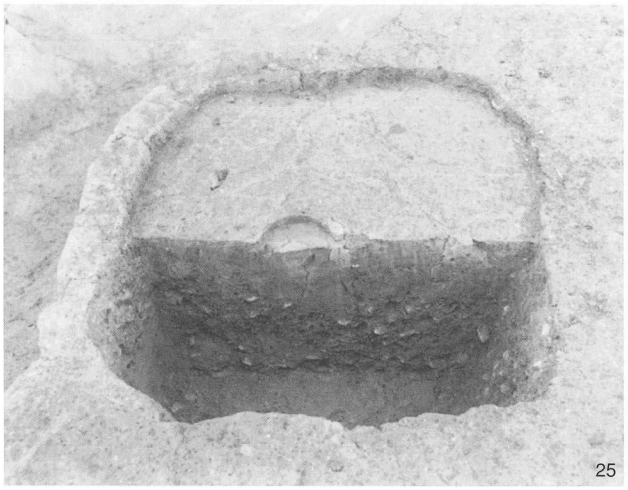


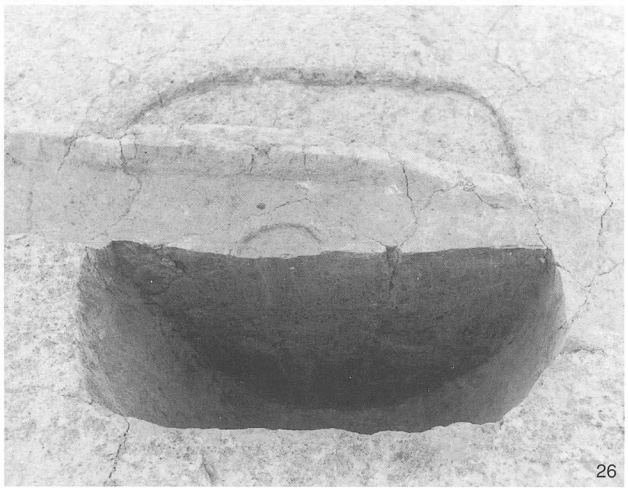












掘立柱建物SB04

19　柱穴P402　検出状況（東から）
20　柱穴P403　断面（北から）
21　柱穴P404　断面（北から）
22　柱穴P405　断面（北から）
23　柱穴P406　断面（北から）
24　柱穴P411　断面（南から）
25　柱穴P412　断面（南から）
26　柱穴P414　断面（南から）